

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二年九月二十五日印刷
平成二年十月二日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年（通卷七六一号）



日川協加盟

No. 761

平成二年度 二賞発表

十月号

平成二年度 同人総会と

二賞表彰 本社十月句会

とき 10月7日(日) 午後1時開場
 ところ 大阪市立労働会館

JR環状線または地下鉄中央線「森ノ宮」
 下車すぐ(日生球場東側)

電話〇六(九四二)六三三一(代表)

同人総会 午後2時から(二〇七号室)

(議事) ①会計報告②会計監査報告③事業経過報告

④同人規約改正案⑤役員改選⑥その他

本社句会 午後5時半から(二〇五号室)



「川柳塔」碑参拝
 10月6日(土)午後1時
 高野山大霊園

川柳塔社

川柳塔鹿野みか月

結成満十周年記念川柳大会

とき 11月11日(日) 午前9時開場
 ところ 鹿野町営国民宿舎「山紫苑」

(JR浜村駅からバス15分)

兼題と選者(各題2句・午前11時締切)

「遅しい」	西尾 栞選
「野心」	橘高 薫風選
「姉妹」	森中 恵美子選
「辻」	浜野 奇童選
「旅」	天根 夢草選
「訛る」	柳楽 鶴丸選
「劇」	八木 千代選
「さむらい」	土橋 螢選

会費 2000円(軽食・発表誌呈)

投句 1000円(10月31日締切)

投句先 鳥取県高郡鹿野町鹿野1279

中原 颯 人方

川柳塔鹿野みか月事務局

道

西尾 朶

あの道

この道

秋の道

電車に乗ると、ハイキングの誘いの吊りピ
ラがゆれている。この間までの暑い暑いと呪
文のように言うていたのが嘘のよう。

空を見上げると、鱗雲がひろがっている。

いわし雲、うろこの数とわが罪と 鬼 遊

空気が澄みに澄みきっている。

秋の江に打ち込む杭の響かな 漱 石

漱石の病床吟であるが、澄み渡る秋空、広
い入江、そこに打ち込む杭の音が遠くから響
いてくる。漱石のすみきった呼吸がある。

いよいよ秋も最中で、身も心も風も雲の光
も爽かである。

なあちろりこれから秋に親しもう 路 郎

秋さらり銀の襖のもののおもひ 路 郎

路郎は秋が好きだった。

あの道

この道

秋の道

道にも色々あるが、松下幸之助翁の道は又
人生訓がある。

自分に与えられた道がある

広い時もある 狭い時もある

上りもあれば下りもある

思案に余る時もある

然し心を定め 希望をもって

歩むならば 必ず道は

ひらけてくる

深い喜びもそこから生れてくる

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

座右の句

栄光の日も一日は二十四時

(薰風)

私の句

正直に言えば幸せこわれそう

井上照子

■巻頭言 道	西尾 栞	(1)
ひょうたん島	河内天笑	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 栞	(4)
自選集	東野 太八	(32)
■川柳太平記(149) 川柳の群像 小宮山雅登	東野 太八	(36)
■連載 柳籠裏三篇研究(五丁)	黒川紫香選	(38)
水煙抄	黒川紫香選	(44)
平成二年度 路郎賞・川柳塔賞決定	西 山 幸	(40)
秀句鑑賞	西 山 幸	(63)
同人吟	西 山 幸	(63)
水煙抄	神谷凡九郎	(71)

ひょうたん島

河内 天笑



南洋諸島や東南アジアで生まれた回遊魚の稚魚たちは、黒潮に乗って北上すると言われています。流木や藻の群塊などはプランクトンも多く、外敵からものがれやすい稚魚たちの隠れ場所だということを二年ほど前のNHKテレビで知りました。私のユメがふくらんだのはそれからです。人工の藻をいっぱいふら下げたひょうたん島を作り、海流に乗って太平洋を時計まわりに一周しようというのです。

ひょうたん島は六つの外島と中心のお城からでき、ロープとパイプで繋がっています。私と悪友たちの乗り込むお城は海上二階、海面下四階で、一辺が十メートルの六角柱だと思ってください。外島もみな六角形で海上二メートル、海面下八メートル、一つが約三百平方メートルの島です。島はそれぞれ約三百個の鉄製のカプセルを繋ぎ合わせてできており、海上部は全て太陽電池のパネルが光っています。海中部の底からは人工の藻が林のように

銀河系

■女性コーナー 茴香の花

河内天笑選 …… (64)

■ひみこさろん 「秋がきて」

八木千代選 …… (68)

「法律」

春城年代・林 瑞枝 …… (70)

一路集「降る」

阿萬萬的選 …… (72)

「鉄道」

松本元江選 …… (72)

初歩教室「倦きる」

菌田猊沓選 …… (73)

■ずいそう こんぴら詣で(その二) 四国

辻 白溪子 …… (74)

本社九月句会

布施 幸子 …… (76)

各地柳壇(佳句地十選/松村迷観子)

…… (78)

柳界展望

…… (82)

10月各地句会案内

…… (93)

■編集後記

…… (96)

座右の句

人はみな善なり向かいあつたとき

(緑之助)

私の句

指荒れていつか異郷の水に慣れ

松本文子

広がり、魚たちを遊ばせています。お城の海中展望室から魚たちの遊ぶ様子が手に取るように、まるで竜宮城です。城の屋上はヘリポートです。ここに降った雨水は、地下四階の貯水槽へロカ装置を通って行きます。

四月一日にハワイ沖に出現したひょうたん島は、毎時二〜六キロの北赤道海流に乗って西へ西へ。でっかい太陽。降りそそぐ星雲。七夕のころ、台湾の南東沖で東シナ海の沿岸流と混じり合って黒潮となり、北上します。那覇沖で中秋の名月を拝み、お正月は美しい富士山に万歳しました。三月半ば金華山沖でオホーツク海から南下してきた親潮とぶつかりました。親潮は黒潮の下へもぐり、海面には長い潮目ができていい漁場となります。いか釣船の漁火を左に見ながら、海流は北太平洋を東に向います。海流に乗ったひょうたん島を上から見れば巨大な雪の結晶のようです。

海中展望室のガラス越しのジョーズにあかんなべえをしてやったこと、銚子沖で釣ったひらまさのおつくりが旨かったこと、ソ連のUボートの艇長と握手したこと、米第七艦隊のヘリがちょくちょく遊びに来たことなど、夢はたくさん。こんどひょうたん島II号を作る時は、フェリーの棧橋もあるでっかいのを計画しており、修学旅行にも推奨するつもり。アラブへ三十億ドル上げてもいいけど、こっちにも一億ドル投資して下さい。海部さま。



西尾 葉選

松原市 谷垣史好

世の中がみな中腰になつてゐる
にぎやかな病歴まるで勲章だ
病床で居ずまい正す報せ聞く
僕もあなたも平和ボケではないのかな
シャンソンを習いますのとぬかしたり
至近距離さあ引き金が引けますか
ひとりの部屋はいつも夕暮れ

岡山県 嘉数兆代賀

実山椒の彩あざやかに風は秋
生きてゐる命しみじみ顔洗う
炎の帯をきりりとしてめて敗けてゐる
うしろ指 心の傷に突き刺さる
まっすぐに生きて汚れた掌を恥じず
余白塗る絵の具が少し足りません

和歌山市 西山幸

秒針の音に笑えぬ洒落がある

向日葵は向日葵のまま枯れるべし
茶柱に今日の寓話がつきまとう
気働き過ぎてわたしという他人
小賢しい計算はない万歩計
すぐ破る誓いへ心病んでゐる

尼崎市 春城 武庫坊

コーヒーはホットひぐらし聞きながら
お互いの過去にはふれず遠花火
雷は孤独で太鼓打ちたがる
首筋に暑さをためて墓参り

郡上八幡・鳩ヶ湯の旅

街々に水があふれる神の慈悲
鳩ヶ湯に真の闇あり虫すだく

大阪市 西出楓 楽

母性本能くすぐっている無精ヒゲ
花をもらってボキヤブラリーを試される
真夏日へ中身ない刻過ぎてゆく

主義あつて独身でいる訳でない
神の御意などと努力はせずにいる
求人欄見て年齢が身にしみる

豊中市 田中正坊

竹を踏む平均余命二十年

食べるのは罪だと思ふさくらんぼ
本論を出しそびれてる長ばなし
ルビツキの全集があり直哉の忌

郡上八幡・鳩ヶ湯の旅

城跡におよしの哀話 蟬時雨

狐狸庵という茶房あり山の宿

米子市 林 荒介

補聴器が拾うきれぎれの手紙

井戸が浅くて夏瘦せを繰り返す

かたくなに砦を護る愚を守る

駅裏に賞罰なしの灯がともる

行く雲の白より白くははを焚く

わが影を拾い集めて封印す

米子市 林 瑞枝

人間の逢う瀬は神が決め給う

運命線の中程で会うにわか雨

宿のベン暫し夜景と昏れゆくか

燐寸箱小さな城を守り抜く

駅裏にネオン疲れの椅子がある

木洩れ陽の優しさで着く形見分け

鳥取県 新家完司

ひいき目で見ても貧しいふるさとよ
無人島にも空き缶が捨ててある
流木を集め庵を結ばんか

虫籠の中にわたしとお月さま

八月十五日 兵隊さんの歌うたう

わたくしの影よ背中を曲げるなよ

和歌山市 福本英子

お迎え火 御先祖様が慈雨連れて

物置に籬の緩んだ槓の櫃

独居老人の調書まわってきた酷暑

紆余曲折 父は田舎でアマゴ釣り

生傷を持った子供にもう逢えぬ

叛く子も西瓜大きい方をとる

八尾市 宮西弥生

今日もまた夏雲炎える早出する

花の絵にふれて過去をみな許す

裏があり表があつて みな仲間

姉妹の絆深まる なすの色

立読みが帰ってくれない熱帯夜

アルプスの絵が一枚の部屋に居る

富山市 舟渡杏花

落丁をみとめたくない蟬しぐれ

いつ死んでもよいと老いの嘘つばち

チンと鳴る料理期待が多すぎる

仮面だけでも笑ってくれて救われる
一生の今 充電のままならず
等身大の鏡が憎まれることも

鳥取県 土橋 螢

夕焼けの視界に戻る道がある
善いことが降ってきそうな今朝の秋
待つことのうれしさ秋を惜しむなり
曲がり角から大きな秋の音がする
ブレーキを踏んで六十路の坂下る
愚痴ひとつ殺す空腹感がある

熊本市 永田 俊子

空無限 欲は出さない奴風
虫を曳く蟻のかけ声聞えない
君子危うきに近よらず皆他人
月と話す有為転変の父の過去
左遷送る言葉は下手に飾られぬ
かぶとの値札が悲しい甲虫

和歌山市 松原 寿子

身の程へ一途な想いころさねば
記念大会仲間のころろ弾んでる
ドアチェーンはずし悩みを打ち明ける
直進を許してくれる風に遇い
状況判断 右折の先の闇を読む
迷いから覚めて翼に満ちるもの
善意かも知れぬ同情枷となる

和歌山市 堀端 三男

法螺を吹く話術も大きな財産だ
一つ話 風船造った挺身隊
食べたあととはしばらく牛になる残暑
兄らしく草笛吹いて聞かして
すれ違いざまバストラインを比べてる

大阪市 本間 満津子

アスファルト人もいっしょに溶けそうな
逃げ場所が有るので酷暑にも耐える
同居するのが親孝行とは限らない
逆説も聞いて自分を確かめる
幸せなら良いよあちらを向いたって
気を抜いたときに始まる逆回転

西宮市 林 はつ絵

走馬灯揃いの浴衣回り出す
哀愁の浴衣に時が流れゆく
終の日も路の半ばであるように
脱皮した殻に完全主義が浮く
獅子の歯が恐かった日の祭笛
ホームステイ靴へ浴衣入れてゆく

笠岡市 松本 忠三

人前をつくり愚妻と書いておく
人は右車は左日が暮れる
望まれて来ましたほどではありません
頃合を見計らってのご出座か
瞑想にふけるよっぽど暇なこと

京都市 都倉求芽

この風にまだ気がつかぬ風車
蟬の鳴く声に合わせて歯をみがく
不知火と山鹿灯籠 火が恋し
枕元 明日の五線譜敷いて寝る
鴉の群れにも美声と悪声と

堺市 中川滋雀

平凡な花うつくしく共白髪(ある金婚)
良心から何処へ逃げてでも逃げられぬ
身に覚えないうがクシヤミが三つ出る
ポストまでついでの用が重なる
お寺から涼しい案内状が来る

倉吉市 奥谷弘朗

ひたむきに物を育てる顔が好き
要領と利巧な口がよく動く
縁あって縁を守る職で生き
ワンセット夫婦茶碗がまだ残り
うらぶれた心に故郷の灯が温い

伊丹市 樫谷寿馬

針葉樹 葉影鋭き大暑かな
発信人不明の暑中見舞着く
名水に頷く夏のだ仏
母の忌へソーメンに添えカンビール
耳鳴りへ更に激しく油蟬

竹原市 小島蘭幸

ゆっくりと飲む霊水が効いてくる

負けてばかりで四十二歳にはなった

真夜中の水飲むここは妻の実家
ピアノには負けぬと蟬が窓に来る
台風は来ないか墾の中の船

下関市 石川侃流洞

熊の胆の効目に父と子の落差
秋灯下 妻もルーペで読み耽ける
CDで虫の音 故郷の秋を恋う
大船に乗せると世情に甘くなる
父が酌ぎ子が酌ぐ極楽だと思う

松原市 玉置重人

色も香も抜けた夫婦の差し向い
冷蔵庫ビールの補充ばかりする
長い雨古いレコード回りだす
グルメとや猫も私も肥満ぎみ
たこやきの列タコの身が大きいぞ

奈良市 宮口笛生

夏の海男の心干している
最高気温三十七度霊樞車
満作へ政府の慌て見えてくる
腹たてぬことを覚えて老いて行く
四分六で六分好かれてる安堵

今治市 矢野佳雲

積み方が甘いと積み木笑い出し
そこそこに折ったのもある千羽鶴
結論を急ごう酒が出るらしい

大好きと山はこだまにして返し
満々の海退きどきは心得る

米子市 小西雄々

油断して造花の嘘も見抜かれず

金婚を誇る二つのめし茶碗

風鈴も鳴らぬ乾いた記事を読む

僕だつて一日市長ならできる

涙腺がゆるんで丸い絵が描けぬ

堺市 藤井一二三

黒岡セイさん逝去

蟬しぐれ浄土へ紅をさして発ち

暇を見抜いたかあれこれ役がくる

蟬の音が減りゆつくりと夏うごく

ぬるま湯のくらしを蟬がたしなめる

お人好しの構図はどこかほころびる

大阪市 江城修史

語り部よ夾竹桃よ永遠に咲け(原爆忌)

ご破算でお願いします腎不全

落丁のある人生も黄昏れる

亡母の忌に合せて咲く花コスモスよ

ちぎれ雲流れる果てにある墓標

寝屋川市 稲葉冬葉

気の毒に思う程度の義理人情

スパイスの効いたカレーで和解する

中立を守るアンテナ低くする

脚光を浴びたその後が淋しそう

当面の目標たたず小半日

大阪市 津守柳伸

夏山をめざす陽気なスニーカー

川床は貴船に限る舌つづみ

あら炊きを黙々つつく昼の鬱

クローラーに罪着せておく五十肩

原点に戻してくれる桜貝

尼崎市 春城年代

炎天下子を連れて説く神の道

捨て切れぬもろもろ抱いて生きている

いまいましくて転んだ場所をたしかめに

しんし張り板張り亡母の四十年代

とり残された夫婦で古い唄うたう

京都市 山本規不風

金華山の頂上で戦慄に会う氷

大文字が奇麗 浄土にいるのかな

永平寺の門前修羅の商店街

幼稚園の園長さんが卦を習う

吊り橋をさまよう闇の秋螢

倉敷市 稲田豊作

休日の僕は妻子の使用人

うちの子も歌手の噂に騒ぐ齡

ホステスの小指に約束してしまふ

背を曲げた爺が走ると喜劇だね

いそがしや舅姑居て指図

夫婦の悪口 夫婦の場だけで言えばよい
今治市 越智一水

信濃方面の旅

軽井沢 金がもの言う風が吹き
人妻がきれいに見えるも旅のこと
富士山は八合目見えてそれでよし

路郎二十五回忌

一字一句ずっしり重い旅人よ

東大阪市 森下愛論

町内のスナック全部顔が利き
顔色を見てボチボチからみ出し
歯車の一員でつせと乗せられる
あれからの話が弾むビヤホール
星座だの血液型だと恋占い

名古屋市 越村桔梢

喜寿北陸行(三句)

竹人形 古の恋の語り部か

老松も俺とおなじ杖をつき

お手植えの松は大樹を保証され

泣きごとはここまでにする梅雨晴れ間

老妻に看病疲れという遺産

島根県 西村早苗

秋祭りもうすぐ白い紙障子

じんまりとした部屋むかし娼妓とか

少しづつ昼を縮めてくる陽ざし

これとてはないが気ままな菊いじり

遍路笠仏の顔になっている

美禰市 安平次弘道

深呼吸してから自信取り戻し

蔵書印 亡父の思想を垣間見る

職業欄がとも気になる無職です

方舟の切符を黒い金で買い

そっくりが余計哀しい造花です

島根県 堀江正朗

盲人のつつけんどんと知りながら

盃を満たし見えた日語ろうか

ここからは来るなど蜂のいい羽音

もう齢か弱音を吐けばバックする

嫌なこと見ずに済むとは負け惜しみ

島根県 堀江芳子

心にも紅いつまでも老いぬよう

そのうちに寒い寒いときつと言う

辛辣な言葉じわじわ温うなり

人柄を胸にいたたく書に合掌

この平和このまま続く恐ろしさ

堺市 高橋千房子

共稼ぎ裏方さんに母を呼ぶ

反対を頃合いと見た助け舟

命とりとめ嫌な男と又暮らす

億単位驚かぬよう慣らされる

OLの饒舌ゆれる更衣室

藤井寺市 吉岡美房

何事の起りしなりや蟻の列

終戦へ音皆消えた蟬時雨

鮎一匹 皿で縄張り主張する

軍艦が入ると海の貌変る

優先座席 日本の未来考える

大阪市 河井庸佑

筋通す男にしては弱気過ぎ

冷静を欠いた自分が道化めく

肩書きが増えて頭の低い人

見る人が見ればはつきり知る手抜き

値切ったがまだ安いのを見た不満

和歌山市 若宮武雄

国境が もし国境が無かりせば

何がため生きているかと言われても

困ったら戻って来いと言えぬ親

花もさまざま 向日葵と女郎花

老い独りただ生きのびている疲れ

和歌山市 内芝登志代

むつかしい親の手塩の味加減

スムーズにいけばいったて又案じ

墓詣りすればすかつと夏の間

洗濯機の愚痴がきこえる子沢山

泣きながら見ていたドラマへ寝てしまい

廿日市市 林野甦光

縛らせる恰好で女拗ねている

お誂への雨が降り出すカラストロフ

こんな時燃えても困るカンナの緋

涙みなしぼりころが一転機

不揃いの拍手で終るセレモニー

寝屋川市 江口度

ウインクへ横の短足走りだす

くま蟬に盆と正月きた日照り

福祉課を訪ねることのないように

無神論スツパナだけが神棚に

ねじ一本ゆるめ観光バスに乗る

姫路市 大原葉香

平和願い鳩も加えてみたけれど

老眼鏡だから遠くは見えはせぬ

千羽鶴悲しい命秘めている

齢かくす女の性が気にくわぬ

落ち目の日 座敷の家訓口ずさむ

島根県 小砂白汀

流麗に宇宙あやつる墨の色(祝 石田清泉君個展)

ぬれ縁へもつともらしく猫すわり

きまじめに生きると豆など数えさせ

草中の草を除らせる老人会

産油国さすが火種は絶やささない

松原市 佐藤奏月

偶然がかさなり出会い重くする

バス停の柳に恩がたんとある

逆縁に男の背中時雨する

今日のことか思い出せないどうしよう
雨やどり母のみやげを一つ買う

町田市 竹内紫鏑

クールな投手も抱き合う日来る

自己紹介し盛り上がる通夜

早送りして棋勢みる弟子

街路だけ見て演奏旅行

夫いまごろ出すか生ゴミ

鳥取県 林露杖

雨の日の口説こぼれる傘を干す

雷鳴に追われる如くバイク駆ける

長生きをしそで何かしら不安

一病と妥協 百まで生きたるか

金余る国に借金抱いて老い

羽曳野市 吉川寿美

貴重な刻をさらさらさらと砂時計

裏の裏読んでしまった人嫌い

純粹に生きるは難し沙羅の花

鏡の中のわたしが怖い時がある

二つ並んだ枕が別の念い抱く

加古川市 吐田公一

早起きの犬と散歩の万歩計

一隅を照らす明りをさしのべる

雷が嫌いでゴルフには行かぬ

腹一ぱい食べると自分とり戻す

地位名誉捨てれば肩の凝りがとれ

鳥取県 松下たつみ
いつかくる活路へ足踏みして待とう
紫陽花の自惚れすぎは梅雨のせい
お互いの立場で席につく無策
やわらかい言葉で古い釘ささる
灰色は嫌い裏切るかもしらぬ

奈良市 天正千梢

はじらいの美学 七十のうす化粧

原生林 意外と明るいブナ林

ゴルバチョフ クルミ割る歯持ち合わせ

しっくりした椅子に出合い自信とりもどし

一等席です柱にもたれてる

八尾市 内海幸生

又一つ本音を世辞に変えて生き

賽銭が少しすくないようです

左手の酒が此の世の極楽で

お祈りを済ませて一杯やりますか

遠火花 株が暴落したそう

八尾市 宮崎シマ子

恋に泣くなんて昔のことよお母さん

おじいちゃんの肩をゆっくり揉む平和

倅せにするというたを忘れられ

尼寺を賑わす柿の実がうれる

思い切って走ってみるか秋の道

八尾市 鷺見章

リゾート化 過疎の空気を引き替えに

テトラポット母のない子は海に来る
イソップの続き指切りして寝かせ
嫁貰うてから血圧と肩の張り
点滴に祈るあした あさって しあさって

松原市 小池 しげお

富士びたい 鬼をその気にさせている
ある予感 次の急行待ってみる
のどちんこ 中一恋をしたらしい
白檀の扇子がやたら喋り過ぎ
水槽の鯛に同情して仕舞う

姫路市 丁 坪 サワ子

義理人情離れる暮らしに馴らされる
ピーポーへ出先の姑が案じられ
見るだけで満足してますグルメ旅
幾百通弔電義理の花咲かせ
糖尿の見舞いは羊羹持つてくる

姫路市 中 塚 遊 峰

言い勝ってみても所詮は親子なり
空海の臨書や軸に風信帖
冷蔵庫何時も満たん無駄遣い
通院と趣味に一日暮れる老い孤独
命あるかぎりは夢も捨てきれず

京都市 松 川 芳 子

ふる里のない人生で旅が好き
その時は夫のシグナル信じます
母にまだ過去を背負っている自信

寄り道の好きな老犬道連れに
食堂のレジで支払う子沢山

西条市 片 上 明 水

終章から作り話は語り出す
勝った汗 明日から重い荷に替る
横道に話がそれてから拍手
小さい罪 気にして鐘を撞き直す
霊柩車 街をはずれて速くなり

神戸市 山 口 美 穂

今日の暑さを表す言葉が見当らぬ
五十路にも小さな花なら咲かせそう
時効となった小さな傷が疼き出す
心身共にも少し余裕くださいいな
答え出しているのに自問自答する

西宮市 奥 田 みつ子

蚊緋の浴衣の似合う背の高さ
あなたとの違い認めて仲が良い
お隣と比べる癖は持ってない
酔芙蓉 気持の通う人と居る
大声で笑う淋しさ倍になる

大和高田市 岸 本 豊平次

ジーンズを破ってまでも臍を見せ
菜園の草は耐えてるこの猛暑
井戸水が一番冷たかった頃
若くても車掌の敬語板につき
寝たい時寝ればよい身が安定剤

西宮市 門 谷 たず子

淋しきの視野にいか釣る舟がある
倅せのしつべ返しが来ぬように
ピッコ引く父を黙って見守る子
夫婦独楽すこし充電してみよう
行き過ぎた一人にすぎぬおじぎ草

松江市 恒 松 叮 紅

お隣が建って採光悪い部屋
一徹な父の死角で謀反する
頑固さがまだ捨てきれず母白寿
晴耕の汗幸せな日課表
方便が上手になって老いすすむ

松江市 柳 楽 鶴 丸

民主国に何故同和の壁がある
入選作はナメクジのヒントです
イミテーションがとつてもよく似合う妻
野仏にお世話になった放浪記
大師範殿 金釘流が書けますか

松江市 舟 木 与根一

遠雷を聞き水がめ瘦せほそり
以来医者も俺もポリープには触れぬ
八月の傷跡疼く蟬しくぐれ
肩書をつけて左遷と言わさない
顔写真載れば悪相らしくなる

米子市 石 垣 花 子
ゆずられた指揮棒がまだ振り切れぬ

黙々と母はシンバル叩いてる
針の耳 勘で通して縫ってます
だんだんとつんば棧敷が多くなり
騙される程ふところが暖いから

米子市 菅 井 とも子

立ち直るきつかけとして髪染める
あじさいの緑になるの見届ける
矢印は無いが二人で歩いている
道のりの何処あたりか古稀傘寿
何時来ても老母の時間は止っている

米子市 青 戸 田 鶴

紙ヒコーキ昔の空は青かった
磨かれたリング他人の貌をする
真夏日のいらいら犬にほえられる
ふりかえることのみ多き秋の雲
一番に秋訪れる萩の道

米子市 政 岡 日枝子

恋だろう毎日花をかえている
友達の白いリボンは汚れない
太陽はかけ足なんだ少年よ
締めている帯が縮んだ裏切りか
引き出しが浅く涙をとじこめず

米子市 田 中 亜 弥

行き先はどうあれ文を書いている
交わったあたりから染あざやかに
この上の充分嫁がくれましたた

満たされて仏の名までいただいた
森に来て見分けのつかぬ毒きのこ

米子市 川上より子

朱夏の海 絆も波に遊ばせて

盆踊りエアロビスクとして踊る

男装で踊れば爽快盆踊り

盆踊り妻は視界で泳がせる

中世もかくてありなん村踊り

米子市 光井玲子

動かない空気話題もとぎれがち

川底の石と語らうふる里だ

清流へ願いは同じ赤トンボ

散る日まで赤いポストと仲良しに

百日紅そんなに咲いていいですか

米子市 沢田千春

漁火が忘れ得ぬ人つれてくる

巢の隅にひなは命を重ね合う

逢いに行こう気持の整理ついたので

気持の渦をとかす一人のコーヒー館

文章にならぬ想いを抱いて寝る

高槻市 川島 諷云児

二番手につけて追い越す機を狙う

充電をしても冴えない知恵袋

病床にいても心はいつも春

おいと呼ぶ視角に妻がいてくれる

下心抱いているから酔えぬ酒

羽曳野市 榎本吐来

その余命知ってるような蟬しぐれ

口きかぬ夫婦に小犬じやれてくる

新入りのおのれを知らぬ目と出会う

痩せたい女 肥えたい男夫婦なり

この辺でちよっかい出してみる余生

香川県 松村迷観子

法の壁 杓子定規で曲げられず

内科外科眼科回って日が暮れる

一言が多い仲間の独り酌

甲子園終ってからの秋の風

ただ広いだけで大国とは言えず

鳥取県 両川洋々

胸に棲む鬼が目を覚まして困る

故郷恋うコケシ横向く横を向く

粗大ゴミろうろうろとしなさんな

妻と子に折れた矢などは見せまいぞ

氷屋の旗はあーつい風とじやれ

和歌山市 牛尾緑良

生きたくて針千本を受け入れる

傷口の癒える日をただ待っている

勝者にはまだ安らぎが解らない

真心でバラの奢りをたしなめる

躓いた石も火種を抱いている

竹原市 森井菁居

盆休を先祖にだけは会いに行く

見舞いから戻り控える酒の量

出来得れば使いたくない父の鞭

記念日を忘れぬ母の五目寿司

異端者を自覚して咲く夏えびね

大阪市 藤田 頂留子

信号を守り頭上も御用心

経を詠む大師の顔は日々違ふ

夏のメモ二つ三つある盆おどり

時代劇も米や油でよくもめる

さりげない比較している初対面

羽曳野市 田中 透太

選り好みしたのではないがまだ独身

あげまんを妻より先に観ておこら

嫁姑違ふ物指し持っている

もう少し詩人でいたい秋夜長

保護色にあきた女は森を出る

高知県 赤川 菊野

ハチキンは見掛け倒して泣き虫で

花束を受けて喜劇の幕が開く

文化とはウサギ小屋にもシャンデリア

狐の部屋で棺の寝心地など思う

ゼスチャーが派手でサインを盗まれる

守口市 羽原 静歩

十月の雲を見ている二等兵

どちらにも勝たしてやりたい白と赤

南北の対話 何時まで寒い冬

漢方薬効しているのかいないのか
三面鏡 神も仏も夜叉も棲む

奈良県 長谷川 春蘭

夏野菜苦勞話も一しきり

来し方の竹の落葉を踏めば泣く

向き合えばころやすまる人が欲し

物欲しい目になるまいぞひとり旅

夏休み誰にでもある非行歴

大阪市 神夏 磯典子

今年またトンボ来ました原爆忌

思考ゼロ 私励ます油蟬

暑い午後あざ唾うよう百日紅

反戦の詩が聞える海の底

ふくらんだ萩に暑さもあと少し

玉野市 小谷 仙山

あの時はあれで良かった棒の丈

八月十五日 胸のやけどが疼き出す

屈折へ明日あしたとかたつむり

あの人もこの人も好きねぎぼうず

猫七匹勢揃いして萩の雨

岡山市 川端 柳子

お金で勝負出来ぬが情けはたとある

風通しよくて人情育つ街

玄関に家族の靴が揃っている

妊って何はともあれ神詣

衝突の果ての似合いの夫婦なり

岸和田市 古野 ひで
精いっぱい生きております蟬しぐれ

猫の目に心の奥をのぞかれる
同じ齡ただそれだけで気を許し
熱帯夜言わでもがなの愚痴が出る
冗談のようにポツクリ友が逝き

岸和田市 島崎 富志子

逆縁の夫婦淋しく墓洗う
洗面器 夜見世の金魚に乗つとられ
履歴書は不要だという老いの職
かき氷こんなにおいしい汗のあと
待望の雨が近畿をよけてゆく

大阪市 黒田 真砂

夏祭り孫の浴衣の丈直し
一筋の道を歩んで夫婦坂
又一つ無駄を承知で買うバーゲン
美しい想い出ばかり住む故郷
辻褄の合わぬ所が人生か

唐津市 田口 虹汀

鳩も大変 今日には葬儀の空を舞う
太陽を怖いと知った日射病
蟬を追う子に少年の我を見る
迫力を手話に感じる句読点
孫はもうはたち地酒を提げて来る

唐津市 久保 正敏

寡婦と飲む夜は一つの畏であり

徳依見る目が足の裏にある

ワントンポ遅れて老いの盆踊り

火の鳥の生きねばならぬ水を呑む

定年の一人は腕をもて余し

唐津市 浜本 ちよ

お悔みは口をもぐもぐさせるだけ
窘める言葉多くて嫌がられ

堂々と派手を着ている佗しさよ

夜もすがら想像重ね夜叉となる

頭は軽いのに体重重過ぎる

島根県 柿原 秀子

失敗を布石に私の夜があける

冷素麺やつと喉こす暑さなり

鬼瓦 天をにらんでいる猛暑

饒舌の悔いしきりなり蟬の声

七夕にねがう七十歳の恋

島根県 榎みどり

横這いで満足してる蟹親子
思い出が一杯オルゴールのねじを巻く

いい話そろそろ纏まる盆近し

夏祭りどの孫も大人になりました

様々な果実酒楽しい母の城

島根県 松本文子

お互いに我慢の出来るところまで

追いかけるわたしの癖が直らない

催眠術かかったままで生きている

元氣すぎてはたが迷惑しています
焦がれ死にしても変らぬ骨の数

出雲市

吉岡 きみえ

寄り添うてぼろぼろ人生 影法師
渴水を話しホースで水をやり
兄ちゃんがあそんでくれぬ金バット
作文ががてのぼくは運転手
ポケットベル油断も隙も突いてくる

出雲市

園山 多賀子

名水を酌み沸沸と生きる欲(郡上八幡)
文学碑暫し模索の刻稼ぐ

逢えば又心許せるねむの花
交叉点 不惑懺悔の風に逢う
温故知新 昨日を捨てぬ明日がある

姫路市

人見 翠記

上京して百歳翁を看取る

美しき友情に恵まれ今日を生き
若者の洪水 渋谷の日曜日
なすべきをなし終えて悔いは残らじ
我が部屋は暦はみんな四月なり
恵まれし生命力は神のもの

高石市

浅野 房子

文学をかじった割りに多い誤字
集計をすればプラスになる余生
ハイレグは視線集めて泳がない
ゴミ袋捨てて出勤する夫

一べつで見抜かれていた恋心

箕面市 坪田 紅葉

自分だけの人生ならとふと思う

暑い時お中元ありお盆あり

ニールック腰の曲がり気がいらす

ストレスがたまつた頃に電話くる

期待した波浮の港のうすあかり

大阪市 大塚 節子

港外の静かに見えてうねる浪

父も猫も昼寝 私も仲間入り

大都会 猛暑に挑む蟬の声

三十五度 汗みずくとなりカレー食う

演歌です港と酒と涙あり

寝屋川市 岸野 あやめ

達筆も乱れて病重りゆく

上げ底で渡る世間の風当たり

夢ひとつ買うのに財布軽すぎて

甲子園一球入魂青春記

鍵穴に女の鬱を閉じ込める

宝塚市 丸山 よし津

隣人のお互い様という情け

サングラスはずすと品の良いお顔

菊作る苦勞は知らぬ菊人形

酸欠の金魚たやすく紙に乗る

新幹線 羨ましい子の一人旅

大阪市 北 勝 美

三十八度三分さすがに齡を争えず

病妻に八十路の体頼られる

からっぽの頭で心経空覚え

夾竹桃 素通りしてるサンングラス

送り火の線香が燃える苛立ちさ

岸和田市 原 さよ子

茄子トマト 自家菜園の朝の膳

母子 孫一つの輪にいる盆踊り

昇段へ心新たに筆を持つ

反核の名簿はきっちり署名する

鷺草をほめて鉢植えもろてくる

和歌山市 桜井千秀

福引きで当てた自転車又故障

核心に触れると煙草吸いに出る

凝り性が嵩じて暇と見なされる

鬱の日はこころもパツクして眠る

顔ただけでも数に入れておく 和歌山市 木本朱夏

縫い針が錆びておんなに長い雨期

好きなひとの釦が今日もとれたまま

眼鏡ふききっぱりあなた凝視する

化けてでるほどの未練もないおとこ

足して二で割って玉虫色にする

和歌山市 山川克子

雑学の知識が生きる処世術

性格は治らなかつたが快復期

無口でも我が社一番すぐれ者

それなりの暮しの中で生んだ詩

人生ってそんなもんですよとお酒

和歌山市 福井桂香

束の間をあくせく蟬も人間も

どないでもしてよクーラーまた故障

白蓮になりたし泥沼にも健気

点線を辿ればあなたの胸に逢う

海苔ふっってお好み焼も恋も出来

和歌山県 寺田裕美

掌に掬う水が素直に逃げる日よ

無口から暑さがもれた通夜の席

親は親 娘は娘で別れ言いそびれ

よそゆきの言葉途中で置き忘れ

御見舞のはしごいのちが重くなる

岡山県 小林妻子

ライバルと呼んで友情温め合つ

挑戦へ可能の二字が横たわる

豊作へ獅子も祭りの笛に酔い

楢山もクーラーつけた跡がある

年金を受け取る月はよく覚え

岡山県 矢内寿恵子

語るべし聞くべし八月敗戦記

四十五年ケロイド心にまだ疼く

生き抜いた青春 飛行雲に乗る

潮騒に一夜一会の旅ごろも
Uターン過疎に灯ともす農日記

岡山県 千原理瑛

捨てた過去もう後戻りはしないだろ
単身赴任コインランドリーに通ってる

そもその話をするのに酒がいる
余白には秘めた心を伏せておく
やさしさごっこ元気なうちにしておこご

岡山県 松本元江

見逃がした幸運追うて秋に入る

面倒な事は嫌いな赤トンボ

もう一度渡ると切れる縄梯子

いつまでという目標のない命

よごされたものの懺悔の積る秋

尼崎市 奥山美智子

もの干し竿にひとりの鬱が揺れている

知らぬまに恋の銃に向けられる

高ぶりを夜の鏡に覗かれる

愛されて愛して西陽やわらかに
旅をしてゆっくり秋に溺れよう

西宮市 秋元てる

目くじらを立てるな淡い老いの恋

長い目で見てやりたいが子も五十

目を閉じて待つ亡夫からの「もういいよー」

しんがりに駅を出る癖 一人住む

お父さんと息子と呼んで同居する

岸和田市 岩佐ダン吉

停年までとても待てないことがある
人生のゴング遠くで聞こえます

村おこしの名で緑また消えてます

掬われてさてそれからの金魚です

情脆い男がいます新世界

出雲市 園山良子

ごめんなさい胸の火種はまだ消さず

湯煙は教えてくれぬ善後策

火種まだ消さずやけどもしいない業

ぼろぼろと涙 更生する証

結局は夜景も見ずに寝てしま

出雲市 久谷まこと

ほめ言葉 子の足どりを軽くする

見栄張った親の思惑振向かぬ

脇役の出番にライト届かない

古を語り尽きない埴輪の目

赴任地の独りに四季の情届く

藤井寺市 福元みのる

後一人 後一球が逆転打

子の世話にならんと親父ほけている

耳遠いくせに噂は聞いて居り

締切りが迫ると時計進み出す

忙しい人だが暇も良く見付け

西宮市 西口いわゑ

歯がきれいい信用しなくなってくる

さりげなく母の部屋には花がある
からっぽの頭で花火眺めてる

朝顔が無数に朝の散歩道

笠とれば托鉢僧の涼しい目

東大阪市

崎山美子

浴衣がけ背なのうちわがきまつてる

盆の灯を守る老母の手のうちわ

一鉢のみどりを買って満ち足りる

スーパ一のバックが並ぶ共稼ぎ

ポケベルを夫に持たせてあるゆとり

十和田市

斉藤 荔

結論が直ぐに出ましたワイングラス

教室の窓から入る笛太鼓

津軽夏 ねぶたねぶたの顔になる

死刑誤審 草野球なら済ませそう

見る立場 見られる立場 胸リボン

高槻市

竹内 花代子

灰皿が明るみに出る法事膳

スーパーへ寄り道猛暑の冷を取り

頓狂な声とかげが走った直指庵

四階の腰痛 三階で話し込み

扇風機また私を泣かす七回忌

羽咋市

三宅 ろ亭

霧の朝こころの翳りみてしまふ

ちよっとした言葉に本心のぞかせる

誘いきて金がきて過疎揺れる

飽食と暖衣強さが蝕まれ
老醜を見せたくはない腰伸ばす

静岡市 渥美 弧 秀

晴着きた孫の仕種の神妙さ

手料理でちよっと一杯本音吐く

詩に音楽にひたむきな日々老いを生き

ふところに夕陽 明日へ掌を合わす

陽に向う散歩道から朝の詩

守口市 野呂 右近

土を踏む足に自信の無い空虚

神経痛治療決め手もないままに

茲に来てもう占いの灯は訪わず

八人目からは味方もある筈だ

六甲の水でお茶飲む日のおごり

大阪市 北山 悟郎

頑固者後ろ指なら判ってる

それからは力を入れて大事にし

演歌まで外人狩り出す人不足

身障者心で泣いて顔笑う

裾野から天辺目指す蟻の列

岸和田市 高須 賀金 太

手術台 往復切符買うて乗る

お世辞でも良いハンサムと言われたい

冗談に月が浮いてるビルとの街

定年後へ火種すこしは残しとく

松茸のうわさを聞いた神無月

海南市 三宅保州

濡れ落葉でもよい腐葉土になろう

旅先の妻 朝市へ主婦の顔

明日昇るために沈んでゆく夕陽

もうこれで止める煙草が旨すぎる

刀差すようにネクタイ締めている

鳥取県 羽津川 公乃

絵日記のトンぼ飛行機みたいだな

敬老の一日 善意胃に重い

万病に効くやさしさを身につける

最高のムード温めの酒するめ

雪月花 思慕の深さは伏せておく

岡山県 二宗吟平

夏祭 祝詞は汗の声でなし

通院は強行軍の汽車の窓

席譲る思いやりなくカバン置き

病院は満員御礼の札がいる

掘削機の音が暑さに輪をかける

広島県 藤解静風

得たものと失ったもの子供部屋

直らない妻へ癖など言わぬよう

死に水をとる妻だから従いてゆく

辞めた社の儲けた話聞かされる

花嫁の父にライトはあてぬよう

竹原市 岩本笑子

いつか分かるいずれ分かる年を取り

中一の不思議 父ちゃんのゴルフ熱
残暑キリキリ雨ん中歩こう

勝負する顔から消えているゆとり
通りゃんせ貴方も歩く細道じゃ

感激が下手な祝辞へ薄れて来

宇部市 平田実男

押し売りが呆け老人へ負けている

惚れている人を知ってるイヤリング

株買うてから原発を容認し

立秋の暦へ逆らうように照り

欠伸びしい青年の唄を聞く

岡山県 荻野 鮫虎狼

結局はうさぎに負けた亀の見栄

凡人のつらさ馬鹿にはなりきれず

ハミングは童謡でした祖父の庭

仁丹にガム 飴禁煙いそがしい

松山市 谷 真風

私にさわらないでネ店の桃

安かったのよと輝いて着て見せる

パーゲンのイミテーションがよく光り

儲からぬ事ばかりして忙しい

ひまわりのつむじ曲りがこちら向く

鳥取県 江原 とみお

集まったものを味方と思ひこむ

鼻ぐすりが効いているから動けない

逃げの手を考えながら席につく

刺ぬきの地蔵の前で仲なおり
ぶらんこに背中合せて乗ってます

七尾市 松高秀峰

大安吉日 式をあげたがもう別れ

不渡りは承知で年金 孫へ貸し

左遷地で錨を降ろす人情味

衣食住足りて真心逃げてゆき

お中元 今日も隣を呼んでいる

神戸市 仲 どんたく

期待した月の冴えなし重い夏

竹の園 ロイヤルカプルが窓をあけ

力こぶ仁王修理の間も抜かず

あいびきを御破算にして星の雨

仮名手本 切腹してからかきくどき

大阪府 坂口公子

下車駅がふつと気になる絶好調

どんでん返して運ばれてきた吉報

ひと駅が短か過ぎます彼と居て

トラブルに関りもなし蟬しぐれ

かぶと虫 留守頼まれて里の駅

竹原市 信本博子

乱筆とあるが自信の見える筆

筆で書く便りへ心ありったけ

筆達者ますます墨の彩冴える

真剣な筆 人形の眼が生きる

仲良しになれば素直に動く筆

父の忌にのうぜんぼとりまた一つ

野の暑さあざみの棘が強くなる

ぜいたくな悩みを言い若夫婦

昼寝して覚めてもやはり一人なり

磨かれた女になって益がえり

納得へアメとムチとを使い分け

にこりともしないマルサの持つ靴

我が校の誇り昔の落ちこぼれ

旬の味分け合う路地が好きで住む

身を削り磨いた子等の振る反旗

鉛筆の芯と孤独を対峙する

雑草の強さに初秋拍手する

龜の歩に三度目の職生きてます

満天の星皆善の心かも

喝采は無くとも俺は綱渡る

風の音にねむれぬ女になって居る

花芯までぬれてはならぬ水中花

本音一つつつむ情けに迷わされ

十六夜の月に迷うて千鳥鳴く

ふり向けばまだついて来る旅の風

豆腐屋のラッパも昔の物語

柳井市

弘津柳慶

静岡県 藪田 猷 杏

青枝 鉄 治

和歌山市

西岡 洛 醉

和泉市

山本 玉 恵

岡山県

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

岡山 山 本 玉 恵

待合室若い娘のハシヤグ声
選手とは別に応援太鼓炎上り
孫達をめぐね越しににらみあげ

呉市 横田英詩

癌告知できぬ無念のお茶をいれ
合掌が様にならない修業中
天を仰いで駄目な男の溜息よ
覗いても防犯カメラが見てくれぬ

大田市 藤田軒太楼

熱帯夜過す男の友は酒
世故に慣れ老いていよいよ客も増し
酒だけが生甲斐などと艶自慢
善人に戻れば円い声となる

仙台市 川村映輝

怖いのは歩行者恐ろしいのは車
銀行強盗 偽札束をつかまされ
出稼ぎの余裕がある米作り
孫からも来る父の日の贈り物

唐津市 仁部四郎

アルバムの笑顔を回す一周忌
出来心でしたと燃やすラブレター
出来心 昨日もやって押さえ込み
両親へ財布を買った初賞与

唐津市 浜本義美

横文字のマワシも混じる土俵入
食膳も半分残る古希の夏

同病の悩み分け合う四人部屋
死にたい顔が思い直した波の音

唐津市 山口高明

天国へ近道出来るグイエット
黄泉の客還る潮路に夜光虫
付箋が付いて戻ったラブレター
宿坊の一夜 菩薩が夢枕

唐津市 筒井朴竜

お勤めへ未だ健在の筑肥線
機関車が前後で喘ぐ阿蘇列車
車社会なれどSL未だ人氣
高架線走る防音壁の中

大阪市 井上白峰

酸欠の部屋で会議がはかどらず
サーブ権妻が握って譲らない
捨て切れぬ欲をベッドで持ち続け
糸切れの凧がとびだす巷の灯

倉吉市 野中御前

わたくしに素顔で話す友がいる
お互いに惚けないように長話
夫婦ゲンカ惚気のように去に
新聞の占い今日は出歩かぬ

出雲市 石倉美佐子

たったひとりに吹いて聞かせる秋の笛
笛蕭々と浮き世のことは思うまい
明るくて半宝石は浮気者

黒揚羽 詮無いことを悟りきる

岸和田市 清野 ころう

新盆に人の情けを積む仏間

階段のきしみ気にして午前様

留守番を引き受け夫婦送り出し

嫁の留守ちよっぴり心につつゆとり

鳥取県 土橋 はるお

寝室にホオズキほどの灯をともす

荒れるから古い傷には触れまいぞ

とんぼスイスイ孫は女の児が五人

学校帰りの子供に好きな赤とんぼ

鳥取市 小谷 美つ千

酔ったふりしてさびしさに耐えている

石ひとつ投げた波紋を確かめる

先生の声に追われて秋になる

酸欠の街で噂に耐えている

八尾市 山下 美津留

炎熱が覆う職場を逃げだせず

土用餅おたべと老母が持つてくる

雷に馴れたか息子また深夜

若者はローンたよりに旅の空

高知市 北川 竹 萌

無人駅故に出られず雨宿り

ことごとと歩む全開老いの坂

お祭りの団扇貰いにしゃしゃり出る

よいことは日頃のつとめ死は確か

出雲市 板垣 夢 酔

飢餓救う祈りが神に通じない

はずむものあつて一日ピイヒヤララ

月に恋こがれて蟹が瘦せてゆく

借金に似た出戻りの娘が一人

大阪市 榊 本 蔭 児

しなびても女 乳房を持つ強味

飯茶碗その温もりが味となる

カトレアの好きな女で意地悪で

鬼の手が温かいからぞつとする

吹田市 栗 谷 春 子

暑いあつい口に出さねば顔に出る

日記帳 去年とおんなじことしてる

花博も行かずに茶蕎麦で納得し

ベルの音にやんでびくつくことあろう

鳥取県 津 村 八 重 子

遠くても母の荷物の香は失せぬ

古都の旅 栄枯盛衰しのびつつ

庭石よここはあなたが主役です

胸三寸あらたな空気つめておく

河内長野市 井 上 喜 酔

老眼鏡忘れ無様をさらけだす

ひまわりの全滅狂った村おこし

誘惑を留守番電話で肩すかし

一人だけ笑わず抵抗するつもり

和歌山市 内田結実

土用波ふと冒険がしたくなる
あつけなく恋をさらった土用波
迎え火が若い亡夫を妬いている
極楽の土産ばなしをききもらし

和歌山市 田中輝子

血の通う話が出来るスベアキ
相槌に疲れ公園散歩する
一卷の名作でしたある出会い
寂しさを分け合う人と風の中

寝屋川市 平松かすみ

献血記念日 十三日の金曜日
ハイハイは抜き手に変り狙われる
表情を読んでふりまくお愛嬌
恐い程似てる頭の渦までも

大阪市 中西兼治郎

保険屋は二言目には万が一
信心の石段 孫の手を借りる
猫長く寝てる風の通る道
先見えた命へ禁煙もう言えず

岡山市 直原七面山

茶柱を心に秘めて靴を履き
万人の讚美を浴びて師匠逝き
音に聞く浄瑠璃寺に妻を連れ
良い年をしてと妻にいびられて

倉吉市 渡辺菩句

虹が立つ岩に立ってる人がいる
七月の森で「真夏の夜の夢」
地球の芯に住んでる僕である
美しい空箱なんて捨てるんや

諫早市 原田メイシユン

ゴキブリが仏壇に逃げ叩かれず
石橋を叩けば杖も折れてとび
順番を待たず俺より先に逝き
片足を突込んでから長く生き

岸和田市 福浦勝晴

諍いのあとで眼鏡の玉ぬぐう
チンドン屋みたいなシャツで夏を生く
いたずらっこねえとテリアをそつと撫で
公僕の美名の蔭で甘い汁

岸和田市 芳地狸村

校柵を紅で染めてる夾竹桃
炎天を汗をふきふき一万歩
バス待ちの時間を嫌う足達者
たのまれた釣書カバンの中にある

有田市 松井かなめ

久し振り娘と枕 虫の声
蒲焼の匂い食欲をくすぐるよ
外孫は宿題おいて水遊び
子のよいとこ俺に似てると言う夫

和歌山県 天満 三千代

柱時計もうつらうつらと鳴る真昼

奈良県 中原 比呂志

五尺の身 情けはいらぬ打たれ滝

手鏡の中で見つけた亡祖母の顔

悲劇にも喜劇にもなった一秒

世代交替ときどき昔わりこんで

目を覆う処置にもなれて載帽式

拍手して後輩に付く老いの足

満点のパパも電気はやや苦手

大阪市 富上 光代

島根県 藤原 鈴江

待望の雨だが明日は行事あり

鏡拭くあきらめきれぬ鏡拭く

片隅に息を潜めた鬼が住む

平成や軍歌なつかし亡夫返せ

隅からの狼煙が命とりとなる

捨て猫よ生きる希望は捨てるなよ

その気持大事に別れ道をゆく

生き抜いた自信が時々邪魔をする

伊丹市 山崎 君子

岡山県 岩道 博友

里の盆 亡母の浴衣で輪に入る

綺麗事スコップ一杯投げてみる

夕涼み浴衣美人に囲まれる

観音の古い噂を島便り

日記帳 猛暑の二字がまだ続く

うなぎ割く包丁安易にすぐ磨げず

里帰りプライド捨てた酒に酔う

ライバルが踊りの輪にいた豆紋り

弘前市 真喜内 實

箕面市 椎江 清芳

ジョークから若者一人やる気出す

一軍と二軍 次元の違う汗

孫に來た電話でしようと婆が出る

泣いて済むことは女房に任せとく

居眠りを誘う神様読書好き

故郷にまだ泣きに行く膝がある

父来れば肅然とみなりんこの樹

書き入れのお盆 僧侶のミニバイク

大阪市 塩田 新一郎

寝屋川市 堀江 光子

未来とは善なる人のものであれ

泣きごととは言わぬ星空あるかぎり

男には家の中にも敵一人

約束の時間が迫る雨宿り

ゴルフ場の中に日本が点在し

遠くまで見えてはしゃぐ肩車

蟹の描く砂絵が消える波の音

がまん会 一等賞は女の子

黒石市 相馬 一花

声美人連れて津輕に凱旋し
不整脈 医者の前では鳴り潜め
母危篤スピード違反で逮捕され
石けんで落ちる恋なら止ましよう

大阪市 板東 倫子

ハンサムな医者が噂の診療所
民主主義の理念のレール曲り出す
秋なすびきらいな嫁で口が立つ
良識のボーダーライン下降する

吹田市 茂見 よ志子

毛皮ショー案内がくる蟬しぐれ
言い訳を暑さ寒さにしてさぼり
主導権妻にゆずってから平和
愛されるドクダミブーム世の変り

守口市 結城 君子

コマージュルに出たとて猫よ高ぶるな
水俣の猫は時効を考えず
猫化けという筋書も作られて
国籍の違う毛並が幅きかす

和歌山県 山田 高夫

一歩後歩いて影のような妻
無抵抗主義を理由にして無策
職安でハイこれまでと失保切れ
八月忌 風化してゆく戦災碑

岡山市 井上 柳五郎

無職だと気兼ねもせずに書ける古稀
残ったはドングリばかり三次会
コーヒーの砂糖の量でまたもめる
定年後へ妻の指揮棒でかくなり

茨木市 堀 良江

ケーキセツト ケーキとうとう来ないまま
車椅子押しして踊りの輪に入る
聞こえない振りしてしっかり聞いている
変ってないね 後はだまっている二人

弘前市 小寺 花峯

皮を剥くりんご娘に話しかけ
食べている夢が平凡の日々にいる
野良犬は糞する場所をわきまえる
手を握るだけなら許す月明かり

米子市 茂理 高代

聡明なおでこにリボンよく似合う
額の花昨日の事も知らず咲く
良い事がありそう淡い花選ぶ
夢積んで夢の裏切り抱いて生き

静岡市 安本 晃授

安請けのつけが真綿で首を締め
呆けはじめ知能指数の血が騒ぐ
団欒の席へちよこまか母の独楽
肝心なところで抜ける父の釘

大阪市 渡部 さと美

つまずいた背をなでてく父の風
萩が散る秘密を抱いているうなじ
キャンプ場 童話の世界星が降り
いらんことしゃべってくれている五歳

鳥取県 乾 喜与志

連れて来た孫をまかせて娘は昼寝
曾孫らは無線でくるま追いまわす
足老いて水虫にさえ逃げられる
街のシンボル城に名君いたらしい

倉吉市 淡路 ゆり子

一日が短い事は達者な証
捨て石の一つが敵に味方する
イベントの赤字はみんな市民税
幸せと言う一日を抱いて寝る

和泉市 岡井 やすお

外交は土竜叩きのゲームかな
捕られぬと判り這入って来る鯨
とりあえずビール枝豆出しておき
おさつよりカードでふくれゆく財布

島根県 北川 民子

メルヘンの泉の水は枯れていた
梅雨晴れやお経まともに読み上がる
ごもつとも寝る子は育つと夫は寝る
上る月ああ老いらくの恋に似る

米子市 小村 てい子

私にも少しは出来るボランティア
柿の種譲る話が帰省する
トイレにもレースのカーテン自己主張
もののはずみで不要な試供品もらい

豊中市 吉田 あずき

泣きに来ることを待つてるさとの母
泣いているうちに馬鹿らしくなってる
ライバルの言葉が励みになっている
切り札を今日もこっそり磨いてる

守口市 森川 まさお

あいまいな長い一日蟻地獄
ひと処ばかり雷駈回り
向日葵のお盆は精一杯に咲く
帰り着き大阪弁で食ううどん

堺市 柿花 紀美女

一人負い一人手を引き里帰り
頂点を極めた日から負う重荷
良妻を演じ続けて夫婦の和
近くまで来たと立ち寄る嫁の父

大阪市 町田 達子

花期過ぎてても元氣印の胡蝶蘭
立秋の暑さの中に雲は秋
人面魚が小瀬とおもうよく似てる
男の世界を筏下りのスリル感

出雲市 小玉満江

言い訳を考えている眠い朝
十八の浴衣は父の目にまぶし
朝顔がとなりの花と手をつなぐ
居直って暑さと仲良くしています

出雲市 小白金房子

斐伊川の歴史と生きる砂鉄舟
花博で泳ぎつかれた夏ぼうし
戦線で命もやした兵の墓(四十五年に思う)
ほめられた孫の笑顔を見て笑顔

大阪市 寺井東雲

足元が鼠火花で祖母踊る
雷の音が気になるゴルフ場
ゴミのよに金が貯まるとおもしろい
駐輪が邪魔をしている白い杖

境港市 細木歳栄

お寺にも書にも感動永平寺
木の葉散りちよつとセンチになる私
翺びたくても翺びたくても大地が離さない
聊かの後ろめたさよ赤電話

十和田市 阿部進

よそ行きの相撲とるから負けが込み
急がずにゆつくりのぼる古稀の坂
死に神にあわずに無事に帰還する
山彦を返さぬ程に山が荒れ

豊中市 辻川慶子

カレー皿 少年の夏駆けてゆく
冷やそうめん微熱の後の喉すべり
点滴も作句していると苦にならず
感情はとうに捨ててる自動ドア

倉敷市 田辺灸六

受け容れてくれぬ他人の面構え
生きているが上手時どき馬鹿になる
軌道修正 妻の笑顔が見えるまで
黄昏の夫婦二の味三の味

豊中市 一瀬福一

せっかちの癖に覚えのよい女
愚痴言うて自慢も言うて呑むノレン
矢をつがえ私のねらう的がない
住所不定だから雑草たくましい

松江市 竹内すみこ

自転車に乗ると少女の顔になる
コーヒーがくるホテルとの打ち合せ
犬の影に私の影を重ねている
待っているのは月見草と私

豊中市 上田登志実

鎮魂の花火を上げるハバロフスク(ある花火師の執念)
電線も過負荷で燃える猛暑ぶり
夏の夜の大饗宴に酔う花火
病床の父に呼ばれた不肖の子

岡山県 花田 たけ志

庶民には悩みが解せぬ桁違い
様子見て八方美人が乗り換える
いたずらも許容限度なら楽し

老いの尻叩いてくれる梅雨晴間

西宮市 瀬尾 六郎太

マドンナがイーゼルたてて中之島
子育てはカルガモ親子に教わろう
どこからも等距離おいたおつきあい

たこ焼の列の後ろにつく暑さ

大阪市 西森 花村

地球儀よ我が家の裏はワシントン
和尚さんにも二号三号やもめも居

今日の顔 裏か表かお月さん

富田林市 松本 今日子

奥山でなくても紅葉もえている
鈴虫のメスが二匹で生き残り

この坂は殿様蛙に逢うたとこ

富田林市 片岡 智恵子

呼びこんだ悪魔は今も出てゆかず
天の川逢いたい人を想い出す

賑やかに別れて空は曇り勝ち

貝塚市 行天 千代

風のない日の風鈴の間抜け顔
猛暑つづき夕陽沈むを待ちかねる
食事抜き採血の日の時間長し

鳥取県 田村 きみ子

ベテランの耳大きくて覗きたい
主義主張ベテランらしい嘘も混ぜ
ふるさとの夕陽に母を浮かばせる

殺人のドラマで競う視聴率
ローカル線で知る方言と人情と
飽食で野性の消えた犬や猫

岸和田市 三輪 通彦

無二の友ライバルとなり敵となり
四次元の世界で逢いたい人が居る
平凡を積んで女房は幸とする

郵便屋ロボットのようは無言です
海遊館待ち時間へは海の風
長屋にも誇る我が家の健康美

出雲市 竹治 ちかし

混浴のポスターで湧く旅ごころ
ゆつたりとすこしリッチな船の旅
旅疲れわが家に勝るものはなし

花博で夫を探し妻さがし
手を引いた訳を知ってる空財布
相槌を打てばわたしも共犯者

大阪府 松永 すすむ

影で糸ひくものが居て強気なり

和歌山県 西口 忠雄

大阪市 松永 すすむ

鳥取県 田村 きみ子

出雲市 竹治 ちかし

和歌山県 西口 忠雄

影となり日向にもなり庇う姑
灯が消えて影も形もなくなつた

奈良市 米田恭昌

ふんざりをつけた娘の荷が帰り

捲土重来期して酒酌む負けた夜

泣き顔が美しすぎて嫁き遅れ

鳥取県 谷口次男

ヤケ酒をあおりランバダ踊りだす

熱帯夜開き直って毛布着る

中東は弾薬敷いた熱い国

大阪市 神保拓生

ヒロインの泣くところでは目をつむり

蟬しぐれ止んで昼寝の保育園

次の人待たせテレカの長電話

米子市 木村富美子

飛行機で飛んだ話をして回る

いらいらの虫に時々誘われる

浅い色重ねて私の色にする

弘前市 村田善保

師の翳を忘れはしない今日の地位

底辺で流す汗でも悔いは無い

団欒の笑顔が絶えぬ兎小屋

川西市 松本ただし

十戒を守ると遠くなる星座

糠味噌の魔術に掛つた茄子の艶

温々になったメロンの宅配便

大阪市 富岡温子

口紅を濃い目に友と夜の街

キラキラと心を洗う朝の海

結局は子等と遊んだ盆休み

岡山県 池田半仙

遠足のお握り母は大き目に

厭味ある言葉も反省材にする

満月の深夜勿体ない明日

島根県 松本はるみ

メンバーの中のひとりがけつまずく

マンションの十階に住む風鈴さ

胃袋へクスリがたまり秋になる

出雲市 金村青湖

歩道橋気ままな風をふとこころに

月に恋い演歌に咽び老いていく

炎天に負けぬルージユを描いて出る

吹田市 井上照子

千鳥の曲 野点の茶筌リズム乗る

逢いたいと謀反の夢に酔う月夜

初恋の人とよく似た運転手

河内長野市 植村喜代

朝焼けのきまつたように雨が降り

極楽の風が吹いたよ北の窓

和歌山県 岩崎瑞穂

合格の子へ広々と青い空

諍うて晒す心の裏表

自選集

正本水客

波多野五樂庵

訪えば家人の帰り待つように
庭の老樹はみどりの深き語りかけ
湯けむりも一客一趣の彩を持つ
静寂のむこうから安らぎを聞く
自然の吐息がかたまっている庭の樹々

辻 白溪子

そうなれば死後の裁きに逢うのです
私一人の思い上りを笑う風
縄跳びの足が故郷の方へ向く
むらさきの擬態を読めぬもどかしさ
また妻を泣かせてしまふ茄子の馬

水粉千翁

逆ろうてみても家裁に通じない
幹事から唄うてみても座が沸かず
カニ缶を開けてもてなし行届く
左遷地の空地に野菜よく育つ
素人を手品師舞台へ呼び上げる

藤村 女

炎熱へごめん遊ばせ百日紅
静けさへ水は涼しさだけ動き
小指噛むほつれ毛だけが知ってくれ
朝顔の会釈涼しさふり返り
そよ風が訪うて淡きを語るべし

野田素身郎

朝顔と蜻蛉の町の顔が消え
老い猫と私が見てる鱗雲
町を練る祭太鼓と笛の音と
寺に来て木魚を叩き無我にいる
出しゃばりが過ぎて波紋の渦となり

かつては僕もわざと混んできるとこへ乗り
食欲旺盛 無職の爪がよく伸びる
夜更けの電話眠いなどとは言うとれぬ
花活ける妻の目 真剣勝負の目
オイもぐら今度の地主は手強いぞ

本田恵二郎

起されるまでは断じて起きぬパパ
わが寝相 孫のカメラが盗み撮り
学がありとぼけた味も兼ね備え
釣り狂と言われ基仇とも言われ
晴雨兼用の傘のようだと調法がり

金井文秋

後戻りしたい老化の道を行く
八十年まだ使ってる足のバネ
お供えは見せるだけです仏さま
ハワイより故里を子は樂しがり
長生きの秘訣無理せぬ時刻表

大矢十郎

勝てば官軍いつも力は正義とや
経営の一部 お寺の出す料理
何時何処で見ても札束 人の物
恩に着てますといやしき弁に慣れ
齒の抜けた顔よいつわり多き世に

八木千代

あわあわと激しく合歓が咲いている
合歓は真深い湖でわたしは吸いこまれる
合歓の実は合歓のまわりで森をなす
しずかに咲けるちからは合歓の内なる火
花合歓のゆれて短い手紙書く

遠山可住

宇宙から指令みの虫ぶら下り
野性とのふれあいルールはかたくなに
留守にする間の西瓜穫っておく
制限速度守るのがいて渋滞し
老いらくの恋で好物送り合い

有働芳仙

夢のない話に暮れるシルバー族
欲のない顔を不思議に見つめられ
校門を出る先生の肩が落ち
くされ縁 金婚式が来て終い
露草や恋打ちあけぬまま別れ

野村太茂津

父の轍語んじ無人の境地ゆく
訊うときは父の遺した真繰る
頁捲る宝が埋めてあるように
樹の下で幹撫でる人叩く人
茶番劇終わった秋の旅恕せ

久家代仕男

向日葵が咲くとゴッホの絵を思う
ほろ酔いに風もほどよい萩の道
竹筴の中で一匹蟬むくろ
あげまんの尽くし足りない拒食症
氏名より屋号通りのいい田舎

松川杜的

宣誓の分からぬままのそれでよし
○×がころころ変わるカレンダ―
ありがたい朝の法話へ初発バス
インスタントでよし二人で飲むコーヒ
まんぼうが此方向くまで待つカメラ

小林由多香

いさり火の彼方戦火の国がある
やさしさを取ればなんにも無い女
君が代を唄えば背すじ伸びてくる
真似にだけ頼り個性が欠けてゆく
にんにくを匂わせ女よくしゃべる

小出智子

洗濯の山をたたんで夢がほし
善いところわるいところもお付き合い
年毎に頷くことが多くなる
誰がために咲くのでしょうか 夾竹桃
感性のわるい玉子を焼いている

月原宵明

再会の握手それから叩き合う
永続する友情で寄れば飲む
今の世に一徹生きる余地がない
針通す糸諦めている余生
肩書を捨てた屋台の酒の味

工藤甲吉

相撲満員野球満員 平和なり
青柿が一つポタリと 静寂
家中で出資して買う宝くじ
性は善されど貧乏しています
厨房で男子二人が合作し

藤井明朗

健康が自慢 初期診断へ悔いる
検査がつづくと病人になつてくる
退院へ仕事が待つ川柳が呼ぶ
上景気つづく日本へ矢がささる
二十一世紀へ望みはうすくなる長寿

児島与呂志

私には頼ってくれる人が居る
幸せな日々で茶漬けのある暮し
これでもかこれでもか半世紀前のこと
あきらめて遠出をしない日の長さ
急ぐこと無いのに朝の五時に起き

岩本雀踊子

仕合せを知ってる男の弁当箱
ワルになる勇氣なかつた苦い酒
どたん場の祈り私もするだろう
人間臭い話を風呂屋できいている
ああ正義 舌が少うし短くて

黒川紫香

捨て猫に従いてこられて困る夜
窓際に毎日勤め孤独です
旨いねと言えば土産にくれる里
行つて来い言うた尻から用をさす
土壇場の顔は流石に男だな

西田柳宏子

直線で結ぶ愛想がなさすぎる
稚魚逃がす網の疏さをもっている
本当の愛が歪んだまま過保護
のり効いた浴衣に亡母が生きている
波がしら言いたいことがありそう

阿萬萬的

あんだ眼鏡を拭いて見たらと妻が言う
薬害の本を夫婦で読んでみる
弁解はいいよと妻の眼が笑う
二人暮しても別々の趣味を持ち
秋ですねエグルメの旅の御案内

高杉鬼遊

地球儀をひっくり返すつむじ風
にんげんが人間らしく生きれれず
地価高騰ゴキブリ小屋に人が住み
孝行をせずに孝行してもらい
生きるのも死ぬのも覚悟ひとつだが

河内天笑

病みつきの趣味を情熱だと言われ
読みづらいうように書かれる約定書
ときどきは我儘言うて目を引こう
いたわりの目で年寄りには侮られ
ピアノが運び出されて離婚劇終る

川柳塔・水煙抄投句についてのお願

。投句される時は、川柳塔所定の柳箋、または縦21cm×横15cmの用紙をお使いください。
。できるだけ10句作句し、1枚の用紙にお書きください。
。句の頭に数字または〇・のような符号をつけないでください。
(編集部)

西宮市民文化祭協賛 川柳大会

とき 10月28日(日)
正午開場・13時締切
ところ 西宮市立勤労会館3階会議室
(阪神西宮東口下車、徒歩2分)
会費 600円(作品集郵送)
兼題と選者(各題2句)
「くどい」 中村 東角選
「美人」 西口いわゑ選
「したたか」 萩原金之助選
「微妙」 赤松 隆男選
「闇」 黒川 紫香選
「薔(ねぐら)」 小松原爽介選
「東の間」 石井 冬魚選
席題なし
投句締切 10月15日・投句料(62円切手5枚)
宛先 〒662 西宮市城山町12-8
水無瀬富久恵宛

川柳太平記 (149)

川柳の群像

小宮山雅登

東野 大八

パンを掌に 脳に色なき川ながる 雅登
遺句集「昏れて」(昭和52年刊)より。

雅登は大正6年(一九一七)10月30日松本市に生れ、昭和51年8月12日に58歳で同市で亡くなった。

昭和12年20歳から作句に入り生涯を印刷工として、病身と暮しに追われる中から佳句を残した。(中略)前掲の句は、戦後間もなくの30歳頃の作と推定される。敗戦後の混乱した世相のなかで、黙々と働き、毎日の糧を得ていた労働者であった。戦時中の青春には華やかな色彩はなく、日々を食うために働くのであった。無味乾燥の生活の川が、これからもおれの中を流れつづけるのであろうか。

文学や月の切尖われに向く

文学すること、作句に打ち込むこと、それが生甲斐だ。文学との対決である。蒼白く光る三日月の切尖(切っ先)を見上げていると、おれの心臓をねらっているような気がしてくる。文学は自己との対決だ。おれはあの鋭い

三日月の切尖との対決に堪えてゆかねばならぬ—青年らしい決意がここに窺える。(『現代川柳の鑑賞』—山村祐・坂本幸四郎編、たいまつ社刊)

この本にはこのあとつぎの作品が掲げられている。(解説文省略)

銭貰う うかつなお叩頭してしま
金持の肩へゆたかに雪降り

紙幣になぶられた真貌やはるのあめ
低賃金の いまも脳裏に蟹筍ふおと

作業服に手を生やし 遠いたそがれを創る
月光掌に 面 剥げそうになる

雅登は「私」特別作品一席。「せんば」特別作品一席。「腕」今井鴨平賞一席を得ており、『人間派』『鴉』『でるた』『創天』『現代川柳』『地上派』『天馬』『馬』『川柳現代』『鷹』『不死鳥』『川柳ジャーナル』などに精力的な投稿に励み、傾向としては、抽象より凝結にあると評価されていた。

「私(河野春三)」が「敏 啓二」が小宮山雅登であることをよく知らなかったが、彼が他誌へさまざまな仮名を使っていることを知るに至ったので、そんな投書家めいたことはやめて、小宮山雅登の名に統一して、いわば表芸として作家精神に通じるよう懲憚したが、すぐきき入れてくれて『私』誌9号からは雅登の名で投句してくれた。(中略)

「私」は25年1月終刊となり、代って「人間派」が誕生し、特に雅登は同人に迎えられる。この柳誌が『天馬』と変わっても同人になってもらった。

『天馬』で彼の作家的精神はもの凄く、幾多の佳吟を残した。『私』時代の素朴なリアリズムから、より深く自己を凝視した作品。プロレタリアートとしての自覚から出発する告

発等、特に表現上に空間をあけて、自己独自のリズムを創り上げた等、その精神は目覚しく一般の認識するところとなった。(『川柳しな』小宮山雅登追悼特集号・河野春三)

「雅登作品を読んで感じられることは、雅登氏の資質のなかで、特に著しい自意識のつよさと、弱者の意識とである。そしてこの二つのものは決して別ものではない。

詩人の精神のなかで、車の両輪のように常に働いているこれは、精神的幸福感を満喫している人間には書けない(満腹のブタは詩人にはなれないのである)。つねに自意識によって苛まれているのが詩人という不幸な人間なのであろう。そして弱者の意識をもたない者には、すぐれた詩は書けない。

詩の本質は訴えであり祈りでさえもある。弱者の意識をもつ者には、つねに訴えの気持が烈しい。またその意識なくしては反骨の精神も生れてこない。(中略)

雅登氏の自意識の強さ、弱者の意識の深さが彼のすぐれた川柳を生み出したことは疑いない。詩人はコンプレックスを起爆剤に転化させる魔術師である。

そして弱者はやさしい心を持つ
雪に沈む 一つのまことや妻の眉 雅 登

雅登氏の奥様から今朝届いた手紙に、次のように書いてあった。

『二月末頃から人工腎臓のお世話になり(中略)八月十二日甲子園の高校野球をききながら「苦しいなあ」と一言静かに言っただけで、もの言わぬ人となりました』(同上。山村祐)

「振り返ってみると、小宮山君とは随分古いつきあいで、うちの工場に勤めた時は昭和の初め、紅顔の美少年と申すほど若々しく、こまめに働いてくれた(この間、戦争進捗し召集、即日帰郷、再応召あつて終戦)。

小宮山君はお世辞ではなしに印刷技術は優秀で、機械の故障も要領よく処理し、よその工場からも引っぱりだこだった。(中略)
私(石曾根民郎)は、若くして川柳を知り、他府県の川柳仲間と交際するところから、東京、大阪、名古屋、遠くは弘前などの川柳誌の印刷をひきつけた。そんなわけで川柳の原稿をまず活字で拾う文選工、それを組む植字工、それらを印刷する機械工たちがいつか川柳を習い覚えて、私のところは川柳工場というレッテルで全国の川柳仲間知られるようになった。(中略)

私が『川柳しなの』を創刊したのは昭和12

年1月号だが、それ以前、小宮山君は川柳の呼称になじんでいたはずだ。工場の同輩達が川柳に手を染めていたので、誘われるままに関心をもつようになっていた。小宮山君は特に読書欲が盛んで『川柳しなの』を発行してから交流として全国からくる交換誌を読みあさった。私は何んでも言う通りに自由に貸し与えた。川柳雑誌や川柳句集だけでなく、私の蔵書からは手当り次第に借りて行った。小宮山君はそれらをムダにせず、よく生かして川柳作句への指針としたものである。(中略)
彼は私のそうした蔵書を憎いほどわがものにし、崩れないでキチンと築き、また築きあげていった。

小宮山君の句は、重く沈んだ言葉との闘いに全精神を傾けるといふことが基調になっている。そこに主情的な心の触れ合いに奏でられ、独自の温容さが光っている。作品の数は少ない。寡作家である反面、創り上げた作品は掩いかぶさるような肌のぬくみを感じさせてくれる。対象を放しておいて、またこれを引き絞めていく手法を持つ。じつくり、じつくり歩き、ひらめきを瞬時にとらえて、わが葉籠中のものにして離さないのである。(後略)』

▼今回は「金泉萬葉」

柳籠裏二篇研究 (五丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博

岩田秀行・紀内恒久・西原亮

大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

75 紙代六文やたら出す暮の文

紀内「暮の文」は女郎が暮に客に出す手紙のこと。内容は年越しの金の無心であり、柳句にも多く詠まれている。

暮の文何がどふでもよこせ也

八17

暮の文二百両程書いて出し

拾七21

句は、いくら手紙を出しても、紙代はたかがしれているし、「下手な鉄砲も数うちや当たる」式に方々へ無心の手紙を出すというのであろうが、紙代六文の裏付けが見つかりません。

西原「贊。宝暦五年版の『禁現大福帳』に

文」の略語と思ふ。
76 ずつと上カると明部屋へ先ッ入る
紀内「不明。
西原「ずつと上がる」という表現は、相当に横柄な態度である。これは座頭金の取り立てと思ふ。

青木「至文堂八解釈と鑑賞」
鈴木倉之助氏担当の「遊びの諸々」に、登樑初会の句となっておりませう。

同じ十七音でも七・五・五の破調でスツパリと言いつつ切つているところに、引き付け前の緊張した空気がちよっぴり感ぜられますが……
七久保「青木氏引用の「引き付け座敷」を詠んだものである。

岡田「吉原、引き付けの部屋説に贊。
77 亭本立のちもミぢへはつれがなし

紀内「江戸近辺の紅葉の名所は下谷の正燈寺、品川の海晏寺、そして真間の弘法寺。

正燈寺の近くには吉原、海晏寺の近くには品川と遊廓がひかえており、帰りの楽しみが多い。ところが真間は紅葉以外は何もないところゆえ、連れもなからうとの句。また紅葉だけに、それを一本立と洒落たのである。

真間の宵断わり手紙二三通 第一一六

見物は真間へ売り人は正燈寺 二四一

うどんより外に思案の無い紅葉 拾一 20

西原〓贊。真間・弘法寺の楓の句である。礎

稿のように「一本立と洒落た」けれども、楓

は本当に一本なのである。江戸より五里もあ

り、真の風流人の訪れるところであつた。

真間の寺面白くない紅葉なり 第一一六

見る人のないが紅葉の名所なり 一一五

岡田〓贊。今は紅葉、桜の名所です。

78 一ツ葉も咄シの合ぬもミぢ也

紀内〓これも前の句と同様、真間の紅葉と思
うが、よくわからない。

西原〓朝帰りをして、叱られている。出かけ
る時に紅葉を見に参ります、と言って出かけ

た。追及されたら、紅葉見のつじつまが何ひ
とつあわないのである。それを「一ツ葉」と

洒落た。本人は全然、紅葉は見いてないので
ある。

花を見てそしてと親父のむづかしさ

一一三六

青木〓贊。真間の紅葉ではなく、正燈寺か海
晏寺と見るべきでしょう。

七久保〓西原氏説贊。南北に魔所あり、正燈

寺・海晏寺とも限定せずともよい。

岩田〓贊。限定する必要はないと思つ。

息子の紅葉やき直し〓 二二 37

けふこそ八本の紅葉と母へいひ 二二 30

岡田〓贊。

79 鹿しいをくらい水をのミ金を溜

紀内〓『論語』述而篇に「飯蔬食飲水 曲肱

而枕之 樂亦在其中」とある。「鹿しい」は

粗末な食事。守銭奴の生活を皮肉つた内容で

あるが、ただ単に文句取りの面白さをねらつ

たもの。

西原〓贊。同じ守銭奴でも、伊勢屋などでは

ない。座頭である。左句が証する。

勾当のうち汁と飯〓 傍四 41

願いある身だと勾当しいはいなり 九 42

青木〓贊。礎稿の如くとつた方が句の広が

りを感じられますが。

佐藤〓贊。

六月ハほしいをくらひ水をのみ 六 31

岩田〓礎稿贊。

ひとさかり鹿食を喰イ水を呑み 三〇 1

また、「近代世事談」に「飲食門(いんし
もん)」とあり、「しい」と訓んだ事が知れる。

岡田〓贊。

80 百萬ハ加賀の国迄子をたつね

紀内〓『柳柳大辞典』百萬の項にこの句を挙
げてある。

謡曲「百萬」、奈良の百萬という女が、失つ

たわが子との再会を願つて、嵯峨の大念仏の

場に詣でて法楽の舞を舞い、ついに子供にめ

ぐり会う。

佐藤〓贊。加賀をとりこんだのは虚構。

岡田〓贊。つまらぬ句なり。狂句は、こうい

うところから発生した。

摂津市文化協賛

第二回川柳大会

とき 11月1日(木) 正午開場

ところ 摂津市総合福祉会館
(JR千里丘から南東200m)

宿題 (各題2句)

〔似る〕 辻 白溪子選

〔誘う〕 坂本 晴美選

〔時事雑感〕 柏原幻四郎選

〔雑詠〕 森中恵美子選

会費 500円(投句料も同じ)

※投句は10月20日までに左記へ

摂津市南別府町。1-3-807 板谷 明子

主催 摂津川柳サークル「くすの木」ほか



ああ夫婦

おんなじ時に胃が痛む

西宮市 奥田 みつ子

奥田みつ子柳歴

昭和56年6月 西宮北口川柳会に入会

同 57年4月 『川柳塔』誌へ初投句

同 57年7月 翠洋会に入会

同 58年4月 高島屋ローズカレッジ西宮教室で橋高薫風先生に師事

同 58年10月 川柳塔社同人

でんでん虫角ひつこめてから頑固

佐藤 奏月

〈推薦句〉

ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む 奥田みつ子

橘 高 薫 風

いつの世か秘書の埴輪が出土する

林 露杖

ひとり者みたいに妻が旅に出る

藤解 静風

空腹がはじまりだった大喧嘩

垂井千寿子

影法師ときどき黒くなり過ぎる

奥田みつ子

古希過ぎて孫と同年じ手本書く

松川 杜的

見えた日を点滅させるのは軍歌

堀江 正朗

魔女が杖振ったか春の野の緑

吉田あずき

町内会風呂敷ぐるみ引きつがれ

高橋千万里

いのちふわふわ五七五になりませぬ

山内 静水

路郎賞準優秀作第一席

雲に来て

ひばりはやつと巢を想う

大阪市 栗 谷 春 子

路郎賞候補作品

西 田 柳宏子

奔放に生きたし時計まず捨てる 三宅 保州

貧しくて時計進めたまま昏れる 宮西 弥生

裏方で終る誇りの柁を握る 中川 滋雀

辛せは鎖の範囲しか知らず 神夏磯典子

つまずいた石の言葉を抱いて生き

嘉数兆代賀

これも幸ふつくら豆が煮えてきた

羽津川公乃

鶴を折りだまし舟折り人を恋う

西山 幸

〈準推薦句〉

一人言上手になって丸く生き 松川 芳子

あかねの炎ゆる中

尼崎市 春 城 年 代

わが恋は褪せず

〔推薦句〕

雲に来てひばりはやっつと巢を想う

栗谷 春子

評 今、川柳塔に欲しいと思うのは、麻生

路郎の精神で、殊に作品に関して標榜された

「いのちある句を創れ」の遵守であろう。

山内静水七月号自選集の作品

嘘の句の出来てた頃はまめだった

いのちふわふわ五七五になりませぬ

この以後、作品がない。静水の開眼のよう

に思える。路郎の真髓が感得出来たのだ。

ここに並べた十句は、すべてのちある句

だが、自身にひきつけた杜的、正朗、春子の

作品に切実さを感じた。夫君を亡くされたあ

との春子作品を推薦句とした。

野村 太茂津

針の山越えた人なら任せよう 片上 明水

一遍は怒鳴って妻の言う通り 内海 幸生

夫婦とも頭に馬鹿がついている 寺田 裕美

何も彼も一途な馬鹿で生きている

松原 寿子

讚美歌がなぜ破調になつてくる

破れ大鼓打つ虚しさは何だろう 喜数兆代賀

棚に上げたわたしを下ろす場所がない

舟渡 杏花

二の腕を女もまくることがある 佐藤 奏月
見えた日を追う愚かさを知りながら

堀江 正朗

〔推薦句〕

わが恋は褪せずあかねの炎ゆる中

春城 年代

黒川 紫香

いかに孵化漫画のように生きている

結城 君子

旅人の肩のあたりに月のぼる

林 荒介

お茶の好きな保険屋さんがやって来た

本音しか言えぬころの振りです 江原とみお

西山 幸

音沙汰があれば消化が悪くなる

春城 年代

悲しい金がなければ義理を欠く

奥山美智子

赤ちゃんの笑いへ笑うほかは無い

信本 博子

逆立をすると乳房が若返る

松川 芳子

ためらわず行かねば私の日が暮れる

永田 俊子

〔推薦句〕

ことごとくに夫を貶す愛しよう 林 はつ絵

正本 水客

秋風のどこかに亡父の祭笛 春城 武庫坊

夫婦になる前の手紙が笑わせる 小野 克枝

単身赴任不倫のように妻がくる 小池しげお

春の気をいっぱい吸うて上る月 都倉 求芽

吾が肩も花野の涙も月に濡れ 林 露杖

身内の話する時夫が他人めき 門谷たす子

無人駅ほんとに列車来るのかな 小玉 満江

〔準推薦句〕

雑踏の中で別れが言いやすし 西口いわゑ

生きていてやろうじゃないかと励まされ 谷 真風

〔推薦句〕

手作りを贈られ返すものがなし 奥田みつ子

奥田 みつ子

昭和60年から三段跳びのような受賞で
本当に嬉しく、有難く、いまだに夢心地
です。これもひとえに諸先生方のご指導
と数多くの素晴らしい先輩、柳友に恵ま
れたお蔭と心から感謝しております。

この賞を未熟な私に対する励ましと受
け取り、心新たに勉強してまいりますの
で、よろしくお願い申し上げます。

どうもありがとうございます。

平成二年度 川柳塔賞



泣きに来た
海が他人の顔をする

今治市 野村京子

川柳塔賞準優秀作第一席

人並という

幸せがありがたい

鳥取県 石尾 かつ乃

川柳塔賞準優秀作第二席

桐箏笛のしみは

おんなの夢のあと

大阪市 清水 絹子

川柳塔賞候補作品

板尾 岳人

愛という文字を正しく書けますか

裏口に話のわかる鬼がいる

ピノキオの足の軋みよ外は冬

くすり屋に恐ろしいほどある薬

どの川も海に流れて行くつもり

だまし舟蜜はたつぷり積んである

脇役に徹し切れないかすみ草

〈準推薦句〉

ひとり言聴いて下さい置時計

西浦 小鹿

桜沢あかり

藤井 高子

堀畑 靖子

岸 桂子

小山 悠泉

上田 柳影

中尾まゆみ

野村京子柳歴

昭和57年 汐風川柳社入会

同 59年 川柳塔誌友

平成元年 汐風川柳社同人

腹立ちは私の不覚髪洗う

尾宮 弘治

〈推薦句〉

泣きに来た海が他人の顔をする

野村 京子

宮口 笛生

舌の先こぼれたウソが拾えない岸

桂子

大皿に盛るとパーティーしたくなる

菅田かつ子

馬鹿正直に歩んだ母がよく似合う

福原 悦子

青空がつづいて油断してしまふ

山口三千子

どう化けてみてもすすきの穂の軽さ

高田美代子

傷口をだんだん深くする他人

松川 芳子

限界を知ってる亀のマイペース

河合 時弘

秒針もつらつらと花時計

藤井 高子

奥の手があればとつくに出している

堀畑 靖子

〈推薦句〉

人並という幸せがありがたい

石尾かつ乃

小出 智子

ポーナスが出たとどの子も言うてこそ

上田 柳影

分け合つて重荷にならぬように生き

松川 芳子

雨やどり小犬に礼を言つて出る

山崎 君子

遠花火人の噂は直ぐ忘れ

中村 三良

両隣それぞれ違ふ二時を打つ

山北三三三

なつかしい顔が集まるおとむらい

新 正子

二賞雑感

西尾 栗

路郎賞の奥田みつ子さんは、大変、真摯な作家で、確実な地歩を進めている。

六十三年度の路郎賞準優秀作第一席を得て本年度路郎賞を獲得された順序を踏んで進んでこられた立派な作家である。

川柳塔賞の野村京子さんは、これまた奥田さん同様、不思議にも六十三年度の川柳塔賞準優秀作第一席を得て、本年度川柳塔賞を獲得された順序を踏んで進んでこられた立派な作家である。ご両人の健康とご清吟を祈つてやみません。

〈準推薦句〉

吊り橋でふたりは落ちてみたくなる

内田 結実

〈推薦句〉

桐箆のしみはおんなの夢のあと

清水 絹子

高杉 鬼遊

叱られているのは犬と夫です

木下 道子

大相撲だけは見ている受信料

井上 大

サイ銭は妻と一緒にございます

滝北 博史

年金を上げて下さい戎さん

小熊 江美

両隣それぞれ違ふ二時を打つ

山北三三三

吊り橋でふたりは落ちてみたくなる

内田 結実

消えるまで待てずローソク消して立ち

中居 武士

どう化けてみてもすすきの穂の軽さ

高田美代子

〈準推薦句〉

よく切れる刀は側に置いておく

山口三千子

〈推薦句〉

鯛雲おからを炊いてみようかな

芦田 絢子

すこし疲れて紅白饅頭食へている

高田美代子

泣きに来た海が他人の顔をする

野村 京子

母さんの気合で朝がやって来る

新 正子

木の瘤のごとし被爆は風化せず

渡邊伊津志

一日のまばたきをするカレンダ―

大橋 政良

鯛雲おからを炊いてみようかな

芦田 絢子

夢がまだいくつもあつて煮こぼれる

酒井 靖子

冬浜 影ひくものは何もなし

岸 桂子

起承転結 割れた皿など飾らんか

小林 一夫

この度は栄ある川柳塔賞を受賞させて頂き、身に余る幸せをかみしめております。

これひとえに川柳塔社諸先生方のご指導のお陰と心から感謝申し上げます。に、この受賞を大きくはばたく一歩にしたいと思っております。

何卒、今後とも倍田のご指導ご鞭撻を下さいますよう、切に懇願いたします。本当にありがとうございます。

野村 京子

水煙抄

黒川紫香選

大阪市 新井朋子

溜息は二酸化炭素を吐きすぎる

洗濯機に放り込まれた気分です

回ってるほうがきれいな風車

暗号が解けたら返事下さいね

ありがとう あなたは夢の配達人

静岡市 小木久子

ゆっくりはしてられないと小半日

拗ねて見せ可愛い女演じてる

カーテンを替えてこんなに変わる部屋

二十年八月六日生れです(長男)

眼を閉じて浮ぶ一つの風景画

羽曳野市 芦田絢子

句読点たどればきみに突き当たる

夏痩せかしらスカートが回る

六甲の水も提げてく墓まいり

お誘いがないまま花博終りそう

する事がないから肩が凝って来る

静岡市 三浦つね

青い目に挨拶されて照れている

鬼の留守 今日 ゆっくり昼寝する

食い過ぎて締めたバンドを緩めてる

耳掃除するのが好きな孫と居る

目医者には漫画の本が置いてない

浜田市 中尾まゆみ

正体がかめぬままに受話器おく

珈琲を両手に包み人を恋う

都市砂漠 人情素通りするばかり

行間へ脈を残して封をする

父の樹にわたしの主張叩きつけ

今治市 野村京子

あれ以来 亀勝ったとは聞いてない

サラダ丸かじり少女の歯がきれい

寺にある小石に仏の顔がある

自分史に朱線引くこと多くなる
傷心への受け皿も小さ過ぎ

尼崎市 児玉歌子

砂浜を別れ話が歩かせる
陰になり日向になつていて他人
自慢する子と酌み交わす祭り酒
あつさり口にして億の金
お祭りの席で出馬を匂わせる

熊本市 宇野昭代

心配をされてふて寝が起きられず
寝そべったところへ姑が顔を出し
ダイエットの話などして喫茶店
真剣に孫と議論をする達者

ブランコに一人で乗りたい反抗期

佐賀県 寺中三枝子

気散じの旅で疲れがまた溜り
咲いてよし枯れてまたよし野のスキ
キモ吸いが恋しくて候 病み上り
イントネーション北国らしい宅配屋
ビューティフル花博のこと聞いただけ

名古屋市 藤井高子

日めくりを割いで忘れてあげましょう
夕焼けを纏うてトンボ秋を舞う
人はひとと語らう 海はまだ広い
気が付けば言葉少なに聞き上手
コレ科学 月の兎は追うまいぞ

後悔をひとつ残して海の町

八尾市 高杉千歩

球根が重なりあつて秋を告げ
嫁と飲むビールのうまさ秋一番
中流で落語に負けぬ暮しむき
裸電球いくさに耐えた語り草

富田林市 池森子

裸足でとび出してゆく恋ごころ

炎天下 靴の先から水を恋う
陽炎に責められている夏の逢瀬
野心があつて風船も高く翔ぶ
ふる里の小川は真ん中を流れ

広島市 流奈美子

温い風ばかりと出会う里の道
定位置に軽いランクの椅子がある
追い風に協力もらう勝ちゲーム
肩の荷を下ろし振子が欠伸する
道しるべ外れて気儘な旅帽子

静岡市 沢田きん

通り道 地蔵へ軽いお辞儀する
暮参りコップの酒がまだ匂う
和服着て鏡へ見るまだ女
戸を叩くいたずら風に騙される
年金の許す範囲へ趣味と旅

熊本県 大川幸子

停年の余暇付き合ってくれぬ妻

ルーツ等聞いて旅の舌つづみ
赤い爪 金の成る木の親が居る

もしかして逢える予感をふくらます

夜市からオカメの面で子が帰る

尼崎市 的場 十四郎

合鍵をもつと女は強くなる

入院の友 点滴で静かなり

香水をふって殿方掌にのせる

豊かさに慣れて車を乗りすてる

躰いて恋しくなった亡母の膝

堺市 楊井 二南

お守りが多くてどれがどこのやら

郵便を心待ちする退職後

勝つまではあの手この手を出せば良い

家元について踊ると倍の汗

人材を上座に据えるそつの無さ

羽曳野市 麻野 幽玄

無事だったから怒鳴られている交叉点

寄り添うて歩幅を合す一つ傘

呑む話遊ぶ話はすぐ決まり

六地藏同じお顔に風化され

欲を言えばと痛い所を突いて来る

東予市 小山 悠泉

鳩時計 新居へ甘い音で鳴り

首横に振って張り子の虎の意地

真直ぐに生きる父の背見て生きる

ホステスの甘い言葉に愛がない
上向いた生活へ嵩む交際費

久留米市 鶴久 百万両

やがて秋 花は懺悔の詩つづる

白寿とは思えぬ 父の心電図

往きはよいよい 客引きに背を押され

異端者の烙印 それもええじゃないか

潮騒に わたしの思慕を訴える

大阪市 亀井 円女

謀反ではないちよつと孤独が欲しいだけ

理不尽も互いに許す凡夫婦

愛があり夢もあるまだ生きられる

盆を待つ亡母はおめかししてらるだろう

善人だと言われ喜んでいいのかな

尼崎市 森安 夢之助

電柱の天辺へ月が引つ掛り

自叙伝でも書こうと思う余生です

久方に枕を並べ老姉妹

女房も飾ると捨てたものでない

砂川市 大橋 政良

汗ながす金にならない汗ばかり

音痴にも酔える自分の唄がある

とつときの顔をいくつも持つてゐる

追い抜いたとき人間を狂わせる

堺市 宮本 かりん

愛犬もホテルに泊る夏期休暇

おみくじの吉を信じている自信
童顔は童顔なりに老いの顔
ガムシヤラに泳ぎきつたら波がたち

大阪市 新井泰子

試行錯誤 荷物の山と対峙する
青畳 ふすまは多少軋もうと
小遣いの行き先違う姉妹
夏帽子ゆれていい事あつたげな

大阪市 上田柳影

美しい妻 美しい文字を書き
叱られて小猫はいつも隅に行く
気持だけだと友情を置いてくる
泳ぐのが下手な夫の靴揃え

鳥取市 萩原美雪

脱ぎ散らし着て行く物が決まらない
十七文字にたくした愛に気が付かぬ
手作りと言えば男は満足し
ごめんなさいと妻に言われた事がない

島根県 高野律子

シグナルの赤が一番永すぎる
好き嫌い言わず路傍の石となる
糊ピンと効いた浴衣の亡父を見る
安楽死祈って遍路の鈴つづく

岐阜県 渡辺杏村

ふるさとが宅配便で近くなる
捨て犬を抱いて時雨の中帰る

話題集中それでも米はよく出来た
秋空に今日も満員ゴルフ場

藤井寺市 高田美代子

等身大の鏡と向い合う若さ
知らない人と言葉を交す一心寺
泣きぼくろあの日のままの女に逢い
心の隅の何処かで憎い人待つ

和歌山市 堀畑靖子

面接で落ちて方針変えました
夏季賞与だけは夫の自由です
笹竹の答えまじめに聞いている
茶がゆ炊きすつかり紀州人になる

兵庫県 森脇和子

いい出逢いでしたと頬へ風の私語
愛されて哀しい過去が星になる
限界に来て芸に泣く冬帽子
平和への道順にハトがいてくれる

米子市 新正子

お互いの生活がある交差点
ふる里のスケッチ ポチも蟬もいる
散り急ぐ花に言いたいことがある
議事堂にメダカの声が届かない

鳥取県 西浦小鹿

横顔の写真を全部焼きつくす
飾らない言葉に友がいてくれる
ふるさとを慕って雨に書く手紙

酔うほどに土の匂いが恋しくて

姫路市 松本一郎

深々と自信の椅子が軋み出す

残された余生あなたにまだ賭ける

さりげない言葉にあつた深い愛

夏休みにバイトしますと子の便り

尼崎市 明壁敏之

雨宿り昔の女とよりもどす

畏の道のらりくらりと若い寡婦

香水もいくらかはありまだおんな

預かった子犬が隅でふるえてる

堺市 神原文

妻としかせり合う相手ないゴルフ

不倫願望 遠雷を聞きながら

虫干しの小紋に浮ぶ亡母の顔

歌舞伎へも何度か行つた江戸小紋

和歌山市 谷口信子

母さんの素手がおいしい握り飯

誇つた奥歯がポロリ落ちた朝

湯上がりのビールの味がわかり出し

嫌な話題へ狸寝の美容院

守口市 森川春子

としよりに金魚の世話をさせて旅

隣からのどかに聞こえる鳩時計

うきうきと里の土産を開ける時

旅プラン多くて人の言うままに

寝屋川市 井上すみれ

死に土産死にみやげとて旅に出る

君ヶ代が好き日の丸が好き大正生れ

暑かつた暑かつただけの日記帳

ガソリンスタンド家族みんなで地図広げ

尼崎市 尾宮弘治

久方に母と並んで米を研ぐ

終い湯の平和レモンを遊ばせる

許すとは言わぬが裏を開けておく

旅終えて狭い風呂場で髪洗う

八尾市 向井しづ子

おさなさが滋味懸命にピアノひく

亡き友の経木流して亀の池

四天王寺高校 娘二人の無事を謝し

芋洗う人出だろうな遠花火

枚方市 中山おさむ

幕下ろすことは出来ない夫婦劇

顔ぶれが変り定年後のゴルフ

旅先で出来た仲間と手をつなぐ

マスコミが狙上に乗せる幸不幸

鳥取県 石谷美恵子

冷戦を解凍させる孫の声

熱心な信者が狂気じみてる

金余る国と世界の目に射られ

油染む帽子は亡夫の勲章だ

加古川市 吐田純子

久し振り我が子にもどる嫁の留守

ささやいた愛へ萌えたつ夾竹桃

幸せの星を射止めた赤い靴

夏祭り御輿に男の汗が舞う

尼崎市 鈴木良征

瘦身法にうつつをぬかすオジンギャル

自画像に過去の秘密が秘めてある

古寺の沼に人食う人面魚

そう言えば居酒屋俺の性に合い

貝塚市 池田寿美子

カンカン帽飛ばした顔がなつかしい

フランス料理のサーモンに血統書付き

霧囲気に溶け込んでいる別の貌

さいはてに花の語らい夢のまま

三木市 岡本蛮拙

八さんと隠居のような付き合いで

この齡で大器にならぬと気がついた

風呂一緒 爺のチンチンさわる孫

新婚も金婚も又二人きり

熊本市 黒田緑

悔いること胸にたたんで草の揺れ

カルチャーはママ 父ちゃんは木守柿

親指と人差し指で作る欲

音もなく枝を離れた葉のうれい

旭川市 朝倉大柏

花暦 器用に織っている孤独

コーヒーに触れず自説を崩さない

悪役へ先ずは一献注いでおく

定刻にポストを過ぎて万歩計

西宮市 菊池トミエ

小錦の浴衣はきつと二反分

歯が浮いたような祝辞に座がしらけ

口数の少ない人と居て涼し

風鈴の音色が変わり風も消え

尼崎市 木下義嗣

別れ際涙をこらえ握手する

耳元で隣の悪口今日も聞く

習い事覚えが早い孫娘

流れ行く我が人生に悔いはなし

尼崎市 住谷石舟

愛想よい外科医でたよりなく見える

故郷捨てた訳は地蔵にだけはなし

独身寮マンション並みで嫁いらぬ

公園のトランペットがもの悲し

尼崎市 中澤向西

香水に縁ない妻と五十年

ここだけの話にしてはよく喋る

振り向けば独りポッチの風の中

故郷の駅 山の緑が目にしみる

京都市 渡 辺 圭 坊

台風がそれで長引く熱帯夜

御詠歌の音が漂う妙心寺

陶器市うっぶん晴らす皿を買う

年中行事参寧坂で七味買う

酒田市 永 澤 裕 子

追われている仕事ばかりのくらし下手

リゾート地 田を売り客になれず生き

凡人でよしと決めこむ修験場

光陰を止めたい趣味が多過ぎる

静岡市 片 平 静 代

親は子を花は蓄を期待する

心境の変化おんなは髪を切る

ご免ねとやさしく言われ我慢する

中流を維持する妻の手内職

岡山県 後 安 ふ さ え

妻の肩かりて嬉しい試歩の朝

町の店 世間話も買うて来る

深呼吸して静めてる腹の虫

花風にしばし遊ばす洗い髪

熊本市 北 川 一 進

あの猛暑吹き飛んで居る秋祭り

庭の木が少しもゆれぬこの猛暑

浮上した利休 映画に小説に
レイアウト余白がなくてほっとする

青森県 福 士 ト キ

平穏無事 孫の寝言が聞えます

誰だろう頭を下げてくれた人

西瓜メロン南瓜ごろごろ夏盛り

夏休み孫三人のペースです

鳥取市 岩 原 喬 水

執念の暑さに負ける窯睨む

耳よりな噂に女姦しい

外人の方が日本語上手です

珍しく妻のお世辞が気味悪い

鳥取県 上 田 俊 路

平凡に生きて自叙伝まだ書けぬ

恋をして二人の夢の彩変わる

誘惑に負けぬ清さを持って余す

友達でいたい女と落ち着かず

鳥根県 菅 田 かつ子

ストレスを洗ってくれる縄のれん

大声の貴男まだまだ頼ります

黙々と傷口洗うとき独り

亡母さんがもどる気がする迎え火よ(亡母新盆)

和歌山市 森 茜

夕ぐれてお使いをする子供見ず

片便りやっぱり読んでいないらし

魚の目はやわいわたしに似ず頑固

姫路市 谷 清 柳

花博にもう三度目の夏休み

夏ばてと云ってはおれぬ小商人

まだ流す涙があれば耐えられる

摂津市 もちづき 遊 美

赤い自転車 昔のお嬢さん行く颯爽と

青い道池ればピンク似合う季

愁い気の姉に似ている花桔梗

岡山県 杉 本 伊久栄

嫁の出来我が家の自慢一つ増え

目ざましに起こされ新聞配る孫

一株の朝顔 朝を楽しませ

十和田市 阿 部 喜久江

嫁がきて捨てる残飯多くなり

脇役で満足してるカスミ草

周波数 夫にあわせて丸く生き

熊本県 高 野 宵 草

これ以上言うまい蛇口にお湯が出る

エアコンのタイマー切れたら熱帯夜

ズブ濡れにさせたお詫びの虹が立ち

熊本県 岩 切 康 子

バイト額聞いて年金縮こまり

目刺しと蕎 戦時の味を思い出し

長電話切るに切れない悩み聞く

尼崎市 山 田 保 蔵

消費税どうしたなどご銘酎

セールスのお世辞に猫もほめられる
霧が舞う棧橋で別れの握手する

鳥取県 乾 隆 風

大八ぐるまふたりで引いたこの坂よ

腹立ちの炎は消し壺に入れて良し

くすり代にもならぬ老後のひと仕事

鳥取県 西 川 和 子

エンジンを止めれば視野が広くなり

一本のわらにすがってついて行く

同居して甘い二人を見て暮らす

和歌山市 山 口 三 千 子

美辞麗句並べて話ずれている

努力せず左団扇にあこがれる

ジャンプしてみても翔べないカベがある

八尾市 片 上 英 一

どんなどこ芦屋市打出小槌町

熊の掌はまだだが肉は食べました

精霊流し ためらう舟も二つ三つ

寝屋川市 河 合 時 弘

凡人は凡人なりに描く構図

ひとり居の寂しさ無駄な灯を点し

筋通す話の裏に嘘すこし

摂津市 木 下 道 子

記念品と粗品で埋まる玉手箱

ふるさとの螢に夢で逢いに行く

古本屋 昼寝の枕がたんとなる

寝屋川市 宮崎 菜月

筆持てば遊びごころの書に溺る
重みなきわが名はすぐに棄てられる
寡黙は金キンキラキンの仏さま

鳥取県 西原 艶子

珍しく素直になれた日の愁い
いい母になろう静かな港見る
彩競う花の国籍など問わぬ

鳥取県 松本 聖子

治療機をいろいろ揃えて医者通い
立秋と言われてみれば空の色
孫去んで広くなったがもの足らぬ

尼崎市 佐野 六浦

横文字で書いてある娘の日記帳
茄子の花咲けば一つも無駄がない
バッグから女文字の請求書

和歌山市 田中 みね

ある時は兄とも思う柳友が好き
諸肌を脱がせて迫る聴診器
半開きのお口が並ぶ終電車

佐賀市 古川 一徳

耳よりな話とにかく金が要る
生き方を変えねば壁は破れない
真相をよく知らぬからよく喋る

枚方市 山崎 彩子

言うまいと思えど暑いと猫に言う

みのお虫をぶら下げたまま木の枯れる
半円の月に団地の盆踊り

静岡県 宇佐美 寿美

フルムーン夫に誘われはずむ夢
おはようが朝のリズムを軽くする
孫の歌外れたリズムに座が和む

京都市 小林 英子

早替り裸で走る舞台裏
大文字終わると風も秋の彩
花博の話つきない市場がこ

花婿の父も泣いてるお立ち酒
植木鉢いきいき母が元気です
盆まわり夾竹桃に迎えられ

兵庫県 酒井 靖子

ここに一人バカ正直が靴をはく
無記名と聞いて気楽に本音書く
人差し指うっかりすると火傷する

鳥取県 中村 幸代

人恋しワイングラスも秋になる
許された二人で歩く星あかり
ささやかな幸せ二人分にする

出雲市 岸 桂子

活気ある訳をしってるトビの群れ
茄子の馬 母は達者になりました
ただ今の声を迎えてやる役目

鳥取県 山内芳江

四季の花活けてやさしい妻になる
野仏も帽子がほしい炎天下

ふるさとの訛りが抜けぬまま老いる

大阪府 小糸昭子

原子炉を持つばかりにむつ迷い
大浪が引くごと帰る夏休み

一本釣 海の男の意地を見る

鳥取県 黒田くに子

鉢巻きキリリ若さがもえる秋祭り

石段の高きご利益ありそうな

新任の医師へときどきするナース

豊中市 三宅つえ子

辞書を開くそれだけで満ち足りる

隣の犬迎えてくれる仲になる

一病息災 企画の中の車椅子

宇部市 中村三良

命ある限り喝采なら聞こう

爪噛んだだけで止めとく小さい賭

もう一軒涙をしぼる義理があり

鳥取県 幸家單車

千の絵から夢が一杯こぼれてる

ゆたかさの中でローンが追いかける

どさくさにまぎれ女の手を握る

尼崎市 吉永伊三郎

年金担保に銀行貸すと言っ

風呂上り可愛い女に眉が無い
赤トンボ西陽を受けて地藏盆

藤井寺市 武部敦子

三世帯カレライスの夕仕度

一寸した国の喧嘩で株がゆれ

旅の宿期待はずれた露天風呂

鳥取市 西村黙光

押し売りにしゃっぽ脱がした二枚舌

また一本 目尻にしわが増えました

求人難 高齢者ならたんといる

河内長野市 大西文次

うどん屋で待ち合せする共稼ぎ

老いらくの恋に期待をかけている

寝ていても起きておつても皺のこと

高槻市 芦田静江

本丸庭園 庶民に月はのぼらない(二条城)

ドライブに若狭三方の五湖を抱く

バスツアーに古刹の和尚話し好き

静岡市 永倉柳華

ライバルが消えて上座に居るわたし

窓際の風が眠気をよく誘う

紀子様となつて古里遠くなり

枚方市 森本節子

夏ばてで人より贅沢してる大

一番星 蟬とりの少年いつか消え

二度三度郵便受け見る空虚な日

熊本県 増田 一 乗

世は平和〇〇博が目白押し

父さんのふるさと駆ける夏休み

甲子園カチ割りのんで声からし

泉佐野市 真崎 浪速子

血圧に悪い扇風機で夏過ごす

映像も暑そう甲子園球児

欲しい雨されども降れば酸性雨

岡山県 江口 有一朗

プライドを捨てた演歌が座を沸かす

古里も山を削った住宅地

鳥取県 石尾 かつ乃

悲しみへ胸のピアノがよく響き

肩の荷が下りた夫婦の共白髪

ほころびを繕う針がさびてきた

鳥取県 大角 正道

手抜きせぬキャッチボールを始めよう

不細工な西瓜おいしく熟れていた

岡山県 牧野 秀子

白い歯を見せて彼女がやってくる

夏草のしげみでも早や虫の声

暑い寒い我がまま言える平和の世

岡山県 富坂 志重

黙禱の頭の中を走馬灯

ばあちゃんにお喋りという呆け菜

さわやかな汗 退院の子を背負い

年中忙しがって趣味押売りし 新潟県 高野 不二

人手不足倒産嘘でない話

うまいはず友達の家で呑む地酒

鳴門市 八木 芳水

説き伏せたあとおだやかな顔となる

受話器から攻めて来るのは今朝の客

奥歯まで見せて女がはしゃいでる

大阪狭山市 桜井 莊次

終章でぐずつき出したボールペン

も一人の自分が本気になっている

泣きじやくる子に手古摺っているマイク

松江市 原 長三

あきっぱい友も今日 金婚式

三日間家族もふえて墓掃除

天国の気分になったしまい風呂 堺市 井上 たかし

山と川 過疎まで褒めて旅の人

あの頃の君が代姿勢正してた

ジョギングのメンパー欠けて秋の風

箕面市 中嶋 民子

人間がカードに選別されている

ワンルームりんごひとつの香が満ちる

摺みどり壺から欲の手が抜けぬ

島根県 福岡 博利

冷戦の女房 他人行儀なり
流行と噂は風に遅れない

大阪市 尾崎 黄紅

書展みる人の目きれいに澄んでいる
糸トンボ二人いっしょに立ち止まる
草取って茄子も枯らしただけのこと

広島県 森川 抜智

犬も不機嫌三十六度越えている
ただ顔を出すだけという席にいる
洗濯機ひとり減ったを知っている

芦屋市 根来 敬

八十をなんだ坂こんな坂越えてゆく
何をする気にもならぬと飯を食い
ビールなら横から手を出すおばあちゃん

寝屋川市 北岡 波留吉

見せられぬ日記が棚の奥にある
物影に私を狙う鬼が居る
頼みもしない影が私を追って来る

八尾市 松本 芙美子

王様は帽子飛んでも走らない
陰の女が側に埋めてと言うけれど
だんじりに命をかける城下町

大阪市 今西 静子

日焼した肌が自慢の姉妹
家族みな冷房のきく一部屋に
玉の汗樹々あおおと上醍醐

島根県 加本 義良

逆転を望んで居座る甲子園
由布岳が見えると誘う露天風呂
喧嘩する相手があつて今日も暮れ

茨木市 藤井 正雄

一たす一 二にしかならぬ妻と老い
日の丸はどうせ日本の旗印
土壇場にならぬと燃えて来ぬ男

出雲市 伊藤 寿美

電話口こちらは雨がやんだとこ
再会は海の香りと肌の焼け
さよならの後ろ姿に舞う枯れ葉

静岡市 中西 雅

古い家だが座って見える揚げ花火
先頭がくずれて海が見えた声
片減りの靴そのまま二度の職

静岡市 浅子 まつゑ

千年の夢のあとみる吉野ヶ里
伊万里焼魅力にひかれ無駄を買う
柳川の橋桁くぐるすげの笠

和歌山県 森 三枝子

ひまわりの影夕暮れに長くのび
旅疲れ矢張り我が家が安住地
空腹へ鰻が匂う夕餉時

寝屋川市 豊 福 路 子

妻海外はく日本の旅が好き
連休は峠の茶屋が忙しい

ペチュニアの炎暑にめげぬ愛しさよ
その人にとっては魅力あるおひと
花びらの降る日に他界したい自我

神戸市 岩 田 信 義

帯解いた女は時効をじっと待つ
女連れよう降りまんあは照れ隠し
善意の傘皆出払って雨宿り

大阪市 川 原 章 久

大寺にしみじみと聞く蟬の声
姐のリズムへ家族動き出し
風に乗り霧笛未還の島へ哭く(最果ての旅)

静岡市 増 田 扶 美

香川県 木 村 明 人

今治市 渡 邊 伊 津 志

海の色した目で漁夫のカジキ漁
順風逆風気にせず雑魚の群れに居る
沈黙の石に充実教えられ

鳥取県 野 口 重 富

相談といわれて酔えぬ酒になり
候補者のうちは笑顔絶やさない
花凶鑑開いて花に迷いこみ

富田林市 山 原 昭 水

自画像の目鼻をちよつと修整し

妻海外はく日本の旅が好き
連休は峠の茶屋が忙しい

妻の顔近づく程にまわる酔い
騙されてプランコ独り風に揺れ
長電話 荷物と受話器持ちかえる

下心見抜いて肩を叩かせる
冷奴崩しいくとせ夫婦箸
職業欄 無職と書いて趣味多彩

人間の値打ちは年齢とは別らしい
それぞれに悩みもチラリ同窓会
真夏日続き郷里の友の訃報受く

慰めはじいさんどうしたと孫が言う
汚いと思つたお金に泣かされる
足跡は薄いが父は懸命に

花博へ花は無理して咲き終る
食って寝て遊ぶ週休二日制
呆けそうな母が気になる敬老日

兵庫県 奥 野 テ ル

はめられて生れ在所を言いそびれ
ひと言が解けず重たい箸を持つ
うれしさが顔いっぱい酌ぎこぼし

大和市 増 山 恒 子

静岡市 大 村 正 雄

大阪市 増 山 恒 子

八戸市 島 田 昭 治

鳥取県 中 西 智 恵 子

和歌山市 北山好笑

祖母も私も同じ名前の墓洗う

冗談を真に受けられて友失くす
七彩の薬を飲んで腹空かず

畳あと頼にくっきり昼寝の子

出雲市 森山健歩

若い母ショートパンツがよく似合う

視察済むもとの汚れた工場なり
才能はピカ一ですが嫁き遅れ

大阪市 清水絹子

雨やどり忘れてしまう地下の街

気まぐれに料理を作るイヤリング

赤飯炊く何もないけどおついたち

鳥取県 今本早苗

雑巾の格下げタオル手になじむ

争いの渦にまかれて生きている
手に汗を握る試合を見せてやり

広島市 中村要

目覚しがやる気なくした古電池

ひこうきに乗って夢遊びをしてる
荷物乗る座席横目につり皮を

切り札は時効となって老い夫婦

米子市 小塩智加恵

用意した嘘は三途の川へ捨て

几帳面過ぎる妻にも物忘れ
曲に酔いジェスチャー大きいピアニスト

豊中市 みきわきみ

下剋上 十八史略読み終えた

南国市 窪田和広

創作が事実なのかと詰め寄られ

少しかじるだけにしておく青リンゴ
退院してから続く不眠症

富田林市 浦田トシエ

水着つけ行水する孫嬉しそう

楽屋では喜劇役者が皆無口

麦蘖をストローにしてシャボン玉

鳥取市 武田帆雀

余命知る蟬は大声張り上げる

パチンコに注いで鰻食いそびれ
つつかけを裏にしてまで電話取り

鳥取県 美浦美代子

目が合うと好きになるから横をむく

外面は妻を飾ってやる不憫

母の日に娘のくれた傘翔んでいる

鳥取市 小西五十鈴

頭から怒鳴るお方と古希となる

板壁で囲い世間を狭く生き
思春期の悩み人形聞いてくれ

唐津市 浜本治幸

事なかれ主義に重たいつけが来る

夫には刺身わたしはあらを食う

鳥取市 森山豊子
おしゃれた貧乏神がまたねだる
後ろから時計の針が追って来る

和歌山市 前田美子
せみしぐれ浴びて先祖の背を流す
見ない振り出来ん気性も親譲り

岡山県 福原悦子
土壇場の祈り神様留守らしい
愚痴一つ吸うて掃除機動いてる

箕面市 岩津ようじ
先に惚けた方が勝ちだと老夫婦
一等地の横のたんぼでみゆる稲

唐津市 山口ふさ子
夏休み主婦にとつては地獄です
目も鼻もない人形だが捨てられず

広島市 森田文
自分史を昔話にして聞かせ
親子して机にむかう影法師

松江市 佐野木みえ
熱帯夜明日逢う人の事想い
宅急便開けてる孫の顔浮かべ

河内長野市 岡崎実
新聞にのつたと友のはずみ声
新築に入ったとたんに床につく

青森県 波ただお
カラフルな水着で海辺歩くだけ

洋食の席へ割り箸持って行き

相生市 中塚礎石
籐椅子を反対に向け気分変え
床柱に座す長男が父に似る

岡山県 土居ひでの
風鈴に吊す一句を考える
点滴が続く夜明けの待ち遠し

鳥取県 中藤俊子
虫捕え凶鑑ひろげて夢を追う
かなかなの声に送られ墓参り

吹田市 山本希久子
人生観こんなに違う朝と夜
雨やどり女が女らしくなり

岡山県 後安江山
命ある限り無視する事出来ず
得意顔 父が自慢の磯節を

島根県 渡部好栄
頭から湯気を噴いてる男の子
犬と猫 終日ごろりごろりです

今治市 和田宏
結論へ氷の解けたコーヒ飲む
臨機応変 時々違う父の辞書

藤井寺市 田中孝子
若さへの未練か派手な夏帽子
逢えそうな気がしてゆっくり散歩する

岡山県 大石あすなろ

割り切れぬままに妥協の気の弱さ
エリートの鬼で森へは帰らない

鳥取市 中居 武士

手抜きした夜は不安で寝つかれず
新築の木の香肴に妻と飲み

八尾市 榎 山 隆

海の幸 日本人とにぎり寿司
打ち上げはカレーライスの研修会

大阪市 平 井 露 芳

打水が温められてるアスファルト
クーラーに頼り打水ほつとかれ

東大阪市 大 平 太 一 郎

虫の音につい誘われて妻と酌む
悲喜こもごもあの一点が甲子園

静岡市 青 柳 金 吾

熱帯夜 南方戦線夢を見る
白黒の写真の妻の若い事

香川県 工 藤 吟 笑

旅先で浮気の話 座がモテル
底積みになつても変えぬ頑固者

鳥取県 前 田 一 枝

真似をしてみてもやつぱりわたしなみ
わたくしの選んだ人は見せられぬ

京都市 本 庄 福 子

非行というものを目の前に見ました
盛り場へ行く娘の靴をそろえてる

主人似の犬が引つ張る散歩道
帰省の子にかきまわされる夏休暇

高知市 山 崎 一 求

部屋の鍵預けた人に逃げられる
東西の壁を破つて愛もどり

鳥取市 谷 口 侑 里

流れ星手紙の返事まだ来ない
少し遊んだらと勉強叱りたい

今治市 渡 辺 南 奉

熱帯夜もう剥ぐ物も無い裸
橋叩く響きで杖は安堵する

唐津市 野 田 旭 恒

社長の虫の居所 秘書に聞く
立志伝 嘘も交じつて面白い

藤井寺市 中 島 志 洋

中元に初なり茄子も添え送り
花訪わず我にまつわる揚羽蝶

鳥取県 木 下 芙 葉

行水へ螢一匹迷いこみ
待つ辛抱 病院通いで馴らされる

藤井寺市 菊 地 繁 男

早口で大事なことをてきばきと
幸いに手足が動きわがままも

米子市 服 部 朗 子

中仙道コーヒーが匂う峠茶屋

八尾市 橋 本 信 江

嫁の事決して言わぬと決めたけど

大阪市 家村 高雄

ポツクリ寺近々増築計画中

病みあがりそろそろほやきではじめる

広島市 名和 喜一郎

用意万端 相続税のわかる本

一線を越えたおんなにある不遜

東大阪市 岡田 寿美礼

暑いとき熱いお茶のみすつきりと

紀子さまは暑さにめげず微笑みを

大阪市 森崎 忠 禄

原潜が敵とは知らぬ深海魚

サイレンがひっかき回す熱帯夜

鳥取県 美田 旋 風

眼のきつい刑事 笑顔で問いかける

お喋りができるローカル線に乗る

静岡県 柳澤 たま

真似事の上手な孫に困ってる

老いてなお鏡が好き身だしなみ

唐津市 福島 紀 一

土用うなぎつられて買って二人前

すず風は秋台風がもって来る

和歌山県 三原 三 究

黒々と髪染めて九十には見せず

逆転を願ってテレビ消して待つ

鳥取市 松本 伊都子

キャンプ村ずらり高級車が並び

子守唄浅い眠りが聞きたがる

鳥取市 中澤 正 恵

独り旅 雀の宿の和へ入り

病院を抜けた時点で紅を引く

出雲市 原 章 峰

トイレでは自分のことを考える

保安帽一番似合うのは社長

羽曳野市 徳山 みつこ

酷暑猛暑酷暑 活字が踊る朝

寄り添って歩む二人を見るふたり

岡山県 伏見 すみれ

ほどほどにしとけと徳利とりに上げる

肩車 父の匂いをなつかしむ

泉南市 坂根 流 水

墓地前の池に菱咲き回向して

墓地で逢う他人慰勸言葉かけ

弘前市 肥後 和香子

七回忌まだ新鮮な涙出る

息子達夢エッセンスまき散らす

鳥取県 鈴木 芙 美

忍と従 夫婦で古希の坂を越え

敬老会すすめ百まで歌います

豊中市 田中 道 胤

時々は親が覗きに来る下宿

川柳が教えてくれた愛の色

兵庫県 倉垣恵美
とぼとぼと無言で見歩く干害田
空間へ苛酷な炎暑 墓碑の立つ

岡山県 三村美恵子
知恵袋しぼんだ妻へアドバイス
孫のくる日までいてくれ庭の蟬

大阪府 山北三三三
夕涼み一人で見てる遠火花
子よすまぬ借金だけの遺言書

東大阪府 松山隆
追伸にさりげなく古希報せてる
血の強さ娘が妻より父叱る

広島県 岸田武
この男寝ている方が頼もしい
泥酔は何でも喋る恐さもつ

吹田市 西岡豊
原稿紙生きた証を書きつづる
二姫を真ん中にいれ若夫婦

鳥取県 伊吹富恵
何時飯を食べよとままよ一人もの
基本料金しつかり払い生きている

大阪府 岡田一枝
鳴く方もさぞ暑かろう蟬しぐれ
風鈴がなんにも言わぬ熱帯夜

東京都 山口新子
今日の運かけて口紅赤をさす

夕暮れのガラスたたいて送る汽車

寝屋川市 坂上高栄

恐々と人垣のぞく事故現場

餌場にも先輩という序列

大阪市 喜多佐津乃

水の都おいしい水の届く夏

せせらぎの横で添い寝をしたい旅

豊中市 滝北博史

校門を閉じて教育する日本

国道をサッカーボールころがった

池田市 林すて

夏休みとっかけひっかけ孫が来る

どこもかもあけっぱなしの暑い午後

泉佐野市 大工静子

三条で彦九郎真似た亡き夫

路傍にもあるよな伊良湖の記念石

大阪市 清水利武

台風に助けられてる水資源

戦争を知らない人の平和論

和歌山県 吉田武治

看護婦の笑顔闘病湧いてくる

ステテコで男大の字ひる寝する

大阪府 乾哲静

コメコメと敵の如く狙われる

祖父ですと挨拶もする孫が出来

静岡市 大石 たき
 ぐれた子に言い聞かせても嫌に釘
 歩きつつ親の後から拗ねてる子

今治市 藤本 のぶ夫
 母子家庭生きる余裕のアイシヤドウ
 このマンションで死のうと決めているひとり

姫路市 福本 好花
 宵祭 太鼓響けば児が急かす
 あの日から子供も連れて行けと言う

島根県 岩田 三和
 いつまでも齢をとらないマンガだね
 小川にはかっぱ十匹およぐ事

檀原市 西本 保夫
 朝刊も朝のタッチにある順位
 角の家に住んで植木の鉢並べ

唐津市 野崎 ハル
 漁夫はうなぎ食べたと病む我に
 風鈴は私の川柳下げて鳴る

羽曳野市 福田 悦子
 盆休み昔の友に会いたくて
 蟬しぐれ耳にテレビは甲子園

京都市 山海 友照
 モデルですよとカマキリのそり身
 水墨につのる思慕あり若葉道

米子市 中井 ゆき
 長い坂ひざも少しは愚痴を言う

逝かなけりや金婚式になるものを
 唐津市 入江 喜久亭

思慕つゝのるあの一言が忘れ得ず
 池田市 岡本 吉太郎

切れそうな絆しめたか夫婦仲
 池田市 岡本 吉太郎

悪い子感ほどよく当る私です
 大阪市 武田 昌三

OB会死ぬまで会社と共に生き
 大阪市 武田 昌三

口コミに踊らされて医者梯子
 奈良市 井上 大

長持ちの秘訣はおかめひよっとこさ
 奈良市 井上 大

グメ虎もたまにすかっと勝てばよい
 鳥取県 谷岡 寛陽

吹き飛ばす汗もお色気ギャルみこし
 鳥取県 谷岡 寛陽

仕事師が老いてわびしく家のもり
 岡山県 平田 たけよ

ほれてます銀婚式にいうてみる
 岡山県 平田 たけよ

一枚の葉書で絆温める
 鳥取県 田村 千嘉

吉運信じきってる母気楽
 鳥取県 田村 千嘉

ようもないのに友達電話かけてくる
 大阪府 福西 範子

ピアノひくと心静かになってくる
 大阪府 福西 範子

勉強より遊びの方がおもしろい
 大阪府 福西 範子

水あそび幾つになっても楽しいな
 大阪府 福西 範子

◆ジュニアの部

一人 吟

秀句鑑賞

—前月号から

西山 幸

空振りに終った今日の帽子掛け

林 瑞枝

でも、明日はヒットが打てるかも知れませんが、今日よりは、すこしでも上手に終わりたい。明日へ期待を持つことにして、草臥れた帽子を、ゆっくり休ませてあげましょう。

道草をした人間で幅がある

春城 武庫坊

それはもう……細い一本道しか知らない私が、いつも痛感していることです。横道裏道も知り尽くして、上手に遊べて、そしてそれらをもみんなプラスに出来る人なのです。

むすんでひらいて恋は沢山することだ

小島 蘭幸

ああ、そうですねえ。生きていく限りは恋をしておきたい、なんて遠い夢を私も追いかけているのですが。恋は沢山することだ、と言いきれる自信が、人生を豊かに美しく彩ってゆくことを信じて疑いません。

自動ドアばかりで進む子の行方

吉田 あずき

誰にでも安易に開く自動ドアに馴れすぎている現代の子供たちが、狭い門に立たされる日が来ることへの恐れと祈りでしょうか。うつむくと見えるとはまだ気がつかぬ

林 はつ絵

有頂天になって上ばかり見ているのでは何も見えませんよ、足許をごらんなさいな、と言ってくれているのですね。

蟻の列その一匹は僕だろう

安平次 弘道

大宇宙から見れば、私たち人間も蟻とおなじです。所詮は蟻一匹なのです。けれども、その後の言葉は秘めている作者です。かき捨てた恥を覚えていた枕

若宮 武雄

そうです。枕には忘れたいことや忘れてしまったことが詰まっているのです。自省するのは、枕の上に頭を置いた時ですから。猿よりも少しかしこい猿回し

石垣 花子

そうでなければ猿をうまく使えません。油断大敵、猿回しよりも賢い猿め

嫁の愚痴聞いて貰うて気が済め

岸野 あやめ

それで安心しました。愚痴を聞いて貰うて気が晴れた、のではなくて、気が拾めたのですもの、やっぱり優しい人なのです。

蛭螭の動き程でも善を積む

小林 妻子

本当に善を積むことの貧しさよ。それでも善人であった証のために、思い直しては積むことをくり返す。そんな平凡な毎日。大きな受け皿で安心してこぼし

本間 満津子

幸せというテーマの絵の中にある大きな受け皿です。割らないように、ひびきを入らせないように大切に、いつまでも大切に。

こんな世にこんなきれいな茄子の色

長谷川 春蘭

喧噪、公害、うす汚れたこんな世のある朝露に濡れた茄子の紫のつつましい美しさを見つけたのは、長く生きてきた作者の眼が、汚れていないからです。

私と同じ深さの水たまり

竹内 すみこ

ときどき、私という名の水たまりに溺れて脱出できなくて、跳き苦しみます。意味深長な水たまりに、とび越える勇気を問われ、試されているよう……。貧乏な頃は情けを持っていた

裕福になり、偉くなって、友でなくなり、遠去かって行ったひとを思い出しています。経済大国になり、驕った毎日に安んじている昨今、私たちがすこしずつ情け知らずになっているのかも知れませぬ。

高須賀 金太

裕福になり、偉くなって、友でなくなり、遠去かって行ったひとを思い出しています。経済大国になり、驕った毎日に安んじている昨今、私たちがすこしずつ情け知らずになっているのかも知れませぬ。

銀河系

河内天笑選

青森市 工藤 甲吉

人間を 烏 一日中喰う
残業と称して酒を飲んでくる
横綱の町で花火がまた上がり

大阪市 小出 智子

神妙に仏と過ごす孟蘭盆会
取って置き若さで八月を越える
生き伸びて近頃涙もろくなり

米子市 沢田 千春

裸足になると逢いたい人に逢えそうで
この道をゆけば味方がきつと待つ

鳥取県 土橋 螢

洗っても消えぬ五十歳の体臭
許すとは言わない美しい瞳

堺市 小西 小雪

塗下駄を鳴らして素足うかされてる
セールの粘りに負けてなりません
和歌山市 桜井 千秀
二足の草鞋履くのも楽でなさそうだ

口紅の吸い殻 気炎吐いて去り

米子市 八木 千代

蜃気楼のように花お飲ゆれている
旅を重ねて無宿のおもいしてならぬ

米子市 林 荒介

朝毎の日課で替える褒の水
ひまわり絶唱 蟬時雨も届かない

堺市 高橋 千万子

世渡りをずるい女に教えられ
单身赴任男ざかりを宵寝する

名古屋市 藤井 高子

車間距離こえたところで散る火花
このごろは香りの弱い花言葉

今治市 矢野 佳雲

そこそこにせいと夜業の灯を案じ
指輪など要らぬきれいな指を持ち

西宮市 奥田 みつ子

身の隅の蝨が悪さしてならぬ
ビヤホール菌に衣着せぬ人と酌む

西宮市 西口 いわゑ

笑い上戸だったと知らずすめ過ぎ
一言を頼る外なし風の中

大阪市 藤田 頂留子

電子手帳を句帳がわりにして夢中
街路樹に保険かけたい排気ガス

鳥取県 上田 俊路

さだかではないから尾鰭つけたがる
休もうか旅の終りがみえてきた

唐津市 仁部 四郎

陽炎に食わせてやろう古日記
陽炎の中に正座の赤とんぼ

尼崎市 春城 武庫坊

入念に髭剃りませ墓まいり
旅の写真に自分ではない僕がいる

羽曳野市 徳山 みつこ

校門の重さが胸に沈む夏
よそ事の経済大国じつと手を見る

和歌山市 木本 朱夏

たこやきに企業秘密があるそう
バーゲンに出され洋服淋しから

岸和田市 三輪 通彦

両眼になると強気になるゲルマ
法事でもない兄弟そろわない

豊中市 田中正坊

古本屋やろうと思つたことがある
シルバースhirt座つたことはありません

和歌山市 堀畑 靖子

雑念を流すひと雨待っている
気前よく噂の種を蒔くわたし

川西市 松本 ただし

五線譜のように浮き出たあばら骨
よい声の間違い電話気にかかり

和歌山県 三原 三究

父ちゃんの足が短い肩ぐるま
郵便はまだかまだかと蠅たたく

松本市 小池 しげお

橋本市 岸本 木魚

松山市 谷 真風

押入れの中は死なねば片付かぬ

鳥取県 土橋 はるお
どこからとなく白バイが湧いて出る

岡山県 小林 妻 子
かあちゃんがんばあちゃんになりいよいよ強し

和歌山県 福本 英 子
イエス・ノーはつきり言えて出て行かれ

大阪府 神夏磯 典 子
甘え方上手になった車椅子

大阪府 松尾 柳右子
親切を誤解されてるようですわ

広島県 森川 抜 智
八月十五日にわれ生き残れたり

岡山県 山本 玉 恵
普段着でコロコロ笑う母が好き

鳥取県 江原 とみお
森はいつも集まるものを抱えこむ

熊本県 立道 善太郎
幸せになろうなろうと生きて喜寿

倉吉市 渡辺 菩 句
明日は咲く朝顔に声掛けておく

熊本県 増田 一 乗
家事こなす限界来たとき妻笑う

大阪府 北 勝 美
八十路生きままだまだ弾む好奇心

和泉市 西岡 洛 醉
生きる欲どっさり持って朝を出る

和歌山県 西口 忠 雄
卷寿司を頼張る妻に白髪ふえ

西条市 片上 明 水

白い靴履くと走ってみたくなり
豊中市 辻川 慶 子

不揃いのおはきが出来て盆集う
尼崎市 奥山 美智子

お隣もおんなじ繩をなうている
大阪府 亀井 円 女

お月様 亡母は元気でおりますか
尼崎市 春城 年 代

入門書ばかり漁って来たんだな
米子市 光井 玲 子

真夜中にわたしの音をたしかめる
和歌山県 田中 輝 子

傷口が広がるような雨の降り
鳥取県 新家 完 司

雪隠の中にも神はおられます
和泉市 中川 楓

夢気球ぶかり少女の夏休み
倉吉市 野中 御 前

気がつけばだあれも居ない枯野だな
芦屋市 根来 敬

明日まで待てないことがある浮世
静岡市 渥美 弧 秀

少年を追う風 塾で屯する
守口市 森川 まさお

掃省した日から時計が遅れた
唐津市 浜本 治 幸

一言が取り消されず禍をのこす
静岡市 永倉 柳 華

おんなにも振り返らせるほど美人

愚痴ばかり並べ男の値を下げる
唐津市 浜本 ちよ

最後まで男は嘘を通すもの
熊本市 有働 芳 仙

父の傘大きかったと死んでから
岡山県 矢内 寿 恵 子

痩せたから貧乏神がつきやすい
河内長野市 岡崎 実

いつだって門扉が開いている母校
米子市 政岡 日 枝 子

計算の下手な女の丸い鼻
羽曳野市 吉川 寿 美

雑音で両耳遠くなつてゆく
西宮市 林 はつ 絵

人生劇場ラストダンスは妻と組む
唐津市 久保 正 敏

円やかに惚けてみようかと鏡拭く
唐津市 田口 虹 汀

肩書の割に小さい名刺出す
唐津市 野田 旭 恒

あちこちに父のものさし突き当たり
堺市 宮本 かりん

お隣の落ち葉はうちで掃き集め
茨木市 茨木市 堀 良 江

石庭に禅の心が秘めてある
弘前市 村田 善 保

借りてきた傘の気になる花模様
寝屋川市 堀江 光 子

和歌山市 山口 三千子
裏道を歩いて温い風に会う

寝屋川市 岸野 あやめ
選択をされる仲間の輪の中で

大阪市 今西 静子
偶然に会い古傷がうずきだす

鳥取県 小谷 美つき
水鏡 女の業を映しだす

出雲市 吉岡 きみえ
流れ矢に当たるはわたしかも知れぬ

大阪市 榎本 露児
振り向いた女の顔に恋がある

出雲市 園山 多賀子
縫りたい薬一本が見付からぬ

米子市 石垣 花子
嘘一つ胸にたたんだまま送り

佐賀県 寺中 三枝子
待つ人があり色を増す花ザクロ

米子市 小村 てい子
おかしくてまた切なくて指をかむ

米子市 茂理 高代
逢えそうな駅に降りてる淋しい日

藤井寺市 高田 美代子
けんかなら何時でも出来る種がある

鳴戸市 八木 芳水
お別れの言葉はあっけないがいい

出雲市 森山 健歩
マンネリの海へ沈んだままでいる

町田市 竹内 紫鏞

銭別は図書券アルバイトへ拍手

寝屋川市 平松 かすみ
コンクリート詰めには軽い刑だった

今治市 渡辺 南奉
老人大学皆出席をして淋し

堺市 井上 たかし
朝刊がむかつく話持ってくる

奈良市 井上 大
刑罰が重い軽いうい他人

堺市 近藤 豊子
社員寮 洗濯物も似ています

鳥取市 美田 旋風
過労死の男あの世で休暇取る

羽曳野市 福田 悦子
MVPやりたい夏の洗濯機

唐津市 筒井 朴竜
融通が利かぬ婦警の白チョーク

砂川市 大橋 政良
毒舌が好きで辻説法を聞く

広島市 中村 要
ピカピカに包丁研いで冷奴

兵庫県 遠山 可住
俺の肝臓だあれも貰うてはくれぬ

有田市 松井 かなめ
どうするのかが気になる他人の退職金

和歌山市 堀端 三男
怪談話する縁台が見当らぬ

出雲市 竹治 ちかし
大物も金も動いていた和解

広島市 森田 文
言うことを半分へせばいい男

鳥取県 谷口 次男
虫けらの意地を社長に見せてやろ

出雲市 園山 かおる
自由化の波紋いずれは我が田にも

仙台市 川村 映輝
露天風呂のムードを壊す水泳着

大阪市 藤森 小雅子
戎橋 昔のネオン懐かしむ

鳥取県 乾 喜久志
原爆碑 平和の路のふりだしに

八尾市 片上 英一
八・一五あの長い日を忘れまい

八尾市 山下 美津留
無神論だけどお盆は休みます

伊丹市 樫谷 寿馬
戦争を知らぬ児を連れ原爆忌

黒石市 相馬 一花
童謡がいつも流れる養老院

吹田市 西岡 豊
屋上の提灯揺れて客を呼ぶ

京槻市 川島 諷云児
花道をおりても幕と限らない

京都市 松川 杜的
蟬しぐれ水車びくとも動かない

弘前市 波多野 五楽庵
じつとりと猛暑三昧しています

飛行雲 平和な空がありがたい
米子市 青戸 田鶴

一気呵成に雷雲鬱を吐き捨てる
姫路市 大原 葉香

仏壇にメロン食べ頃まで預け
和歌山市 古久保 和子

夏の蝶 昼餉の部屋を通り抜け
豊中市 田中 道胤

墓石にももの言いたげな赤トンボ
姫路市 丁坪 サワ子

療園の夜のコーラス キリギリス
岡山県 江口 有一朗

蟬しぐれ命のうたげ切なかり
岸和田市 古野 ひで

燃えつきてひまわり重く首を垂れ
岡山県 松本 元江

朝早くテレビ見るなど蟬しぐれ
堺市 神原 文

水一つ入れて仏の花の水
羽曳野市 芦田 絢子

土用ぼしかぞえるほどの梅を干し
唐津市 福島 紀一

腰すえて休めば虫が鳴いてくれ
今治市 越智 一水

健康のためと昼寝もはばからず
和歌山市 北山 好笑

宿の下駄軽い浮気の人が履く
今治市 月原 宵明
米子市 新 正子

母さんに替わってという子の電話
大阪市 板東 倫子

歯抜けですすサ行の言語障害です
七尾市 松高 秀峰

うすうすは知っていましたか
倉吉市 奥谷 弘朗

借金は恥と信じている頑固
大阪市 町田 達子

三猿に忠実すぎる困り者
出雲市 小玉 満江

腹一杯食べて暑さと勝負する
和歌山市 山川 克子

愛おしく我が人生をふり返る
和歌山市 内芝 登志代

一長一短僕にもいいところあるのだぞ
高知市 北川 竹萌

挨拶をこちらから先して安堵
岸和田市 島崎 富志子

脳からの伝達おそくなった指
出雲市 板垣 夢酔

鏡よ秋だ すこし美人にしておくれ
八戸市 島田 昭治

びくびくの内心かくし悟り顔
香川県 辻 上よしみ

スイミング始めて年齢を感じとり
唐津市 野崎 ハル

いやなこと早々過去のものと入れ
香川県 工藤 吟笑
先代の家が過疎地で眠りこけ

神様にそっぽ向かれた得手勝手
笠岡市 松本 忠三

難産の一句ストレス吹き飛ばし
唐津市 中村 弘

浅はかな言葉で出来た水たまり
米子市 服部 朗子

セールスにわたしの寸暇乱される
鳥取市 武田 帆雀

いざという時を思っけて片付ける
和歌山市 上西 幸子

嫁勤務わたし炊事場ピカピカと
鳥取市 行天 千代

神よ仏よ私の罪をお許しな
鳥取市 田村 喜美子

激流の黒い川ありわが胸に
東京都 山口 新子

尾骶骨 力の限界知りはじめ
米子市 小西 雄々

わが道を行くなんとでも言いなはれ
倉敷市 田辺 炎六

郡上太鼓のひびきに負けてない軒
羽曳野市 福田 満州

▼投句は、毎月15日までに川柳塔事務所へ。

お知らせ 表紙裏掲載の川柳塔鹿野み
か月10周年記念大会に京阪神方面から参
加希望の方は、バス予約の都合上、黒川
紫香か、本社事務所にお申込ください。

尚香のむ 八木千代選

裏山のくぼみを知っている裸足

米子市 政岡日枝子

正面に山が立ちはだかつていけばこれは大変なことで、生きて行くために越えねばならない難関だと思うのですが、裏の山には優しき、なつかしきがあります。今の私を支えてくれている大きな愛があるような気がします。気の遠くなるほどの長い年月をかけて培われてきた真実の味方だとももえるのです。それは幼いときから馴れたしんだ友達であり、家族でもあり、先祖の祈りでもありましょう。その山ふところに庇われている今の私だと気がつけば、山の成り立ちも山肌のくぼみも知ろうとするのは当然のことでしょうから、じかに素足を触れさせて呼吸を共にしてこそその裏山の愛だと考えた裸足です。この裸足は動くことはありません。

太陽が今日も怒ったまま沈む

西宮市 奥田みつ子

柔らかく書いてはありますが、純粹で激しい心が届いてきます。太陽はまいにち燃えて沈んでゆくのですし、それによって人はそれぞれ今日の業の終わりの感懐を抱くのでしょうか、「怒っている顔」と感じ、それも昨日も今日も自分の無為が怒らせたのかと済まながっている背姿にひきこまれてしまいます。技巧を超えている真摯さにひかれて、私も同じ太陽を視てしまうことになりました。これでは立ち去ることはできません。作者自身の言葉でしかも懸命に書かれていいるからです。

張りつめた糸がわたしの中で鳴る

和歌山市 西山 幸

水が沸きそうであわてているのです

島根県 松本 文子

群れて咲く花よひとりで生きられぬ

和歌山市 後藤 正子

哀しみが薄らぐように正座する

堺市 板野 美子

丁寧な詫びても水は減るばかり
よんどころなく順番の列の中
はずされて貨車いっからか痴呆症
わたくしの思いを吐けば濁る川
これだけは孫に遺しておく言葉
真直ぐに釘が打てたら合格だ
きんぴら牛蒡買って墮ちたなと思
物を捨てて程の勇気が欲しくなる
犬にエサ毎日やるも努力している
刺されても平気 抗体出来ている
好い事のあとは悪いと決めぬよう
神さまも一緒に降りてくる雨だ
身のほどは私の影が知っている
パスポートの写真がすこし気にいらぬ
裏舞台知らずスキップ踏んでいた
種蒔いた人は知らない花の首
鳥の言葉わかるおとこを好きになる
洩らさずに聞くのは耳が遠いから
門限は俺がチャイムを押した刻
わたくしを守る私に舌がある
定形を外したがるも硬い虫
とげのある言葉にいたずらしてみたい
たかぶるとよく物忘れしてしまう
ゆっくりと敵の出方待って秋
不器用なわたしにパスは定刻に

倉吉市 淡路ゆり子

兵庫県 倉垣 惠美

名古屋市 藤井 高子

和歌山市 堀畑 靖子

富山県 舟渡 杏花

米子市 新 正子

羽曳野市 芦田 絢子

大阪市 鈴木 節子

寝屋川市 宮崎 菜月

米子市 林 瑞枝

西宮市 門谷たず子

和歌山市 田中 輝子

大阪市 西出 楓楽

藤井寺市 高田美代子

大阪市 新井 朋子

倉吉市 野中 御前

和歌山市 木本 朱夏

吹田市 栗谷 春子

佐賀県 寺中三枝子

和歌山市 山川 克子

大阪市 田中 弘子

岡山県 富坂 志重

和歌山市 桜井 千秀

尼崎市 児玉 歌子

羽曳野市 吉川 寿美

いい角度あなたの町を見ています
 身内にも右と左の見舞い客
 傷ついて帰ってきたな花の種
 炊き込みの中できれいな彩守る
 八月の空よ どうぞやさしい瞳のまま
 分水嶺に竹つあきらめることおとし
 解決をすれば小さな点となる
 身の丈に合った暮らしてはみだせぬ
 曲がり角一つ違えたまま添うて
 修整液使い消したいことがある
 合わせ鏡の裏に疲れが少しずつ
 あと足の砂が重くて逃げられぬ
 夕焼けを見つめていと涙出る
 シンバルを叩くことしか知らぬ母
 紙コップあんまり弱音はかぬよう
 部屋ごとに時代錯誤で鳴るテレビ
 眠ってる時がわたしの好きな顔
 海に出る川は無口でいい顔だ
 糸車 今はしずかに回ってる
 あと十年 時間割表埋めてある
 手水鉢のぼうふらだつて生きている
 霊まつる早やちははの歳を越え
 片手で洗うわたしの顔の広いこと
 そのときの喉の乾きを終戦日
 こんな私を選んでくれてありがとう

松江市 竹内すみこ
 有田市 生馬美美子
 鳥取市 小谷美つ千
 西宮市 林 はつ絵
 富田林市 池 森子
 大阪市 富上 朝世
 大阪市 神夏磯典子
 米子市 青戸 田鶴
 和歌山市 福本 英子
 富田林市 片岡智恵子
 米子市 小村てい子
 和歌山市 古久保和子
 松原市 佐藤 奏月
 米子市 石垣 花子
 岡山県 土居ひでの
 松江市 安食 友子
 八尾市 宮西 弥生
 米子市 沢田 千春
 豊中市 辻川 慶子
 米子市 小塩智加恵
 堺市 神原 文
 西宮市 春城 年代
 寝屋川市 平松かすみ
 東屋川市 堀江 光子
 大阪市 亀井 円女

朝顔の蔓 触れるものみな信じ
 アホになり通した過去を大切に
 追い抜いた歩幅だんだんゆるくなる
 かいま詠む川柳 私が私になる
 過去型の言葉でそつとささやいた
 百合の香で部屋の空気が白くなる
 私を切なく揺する八月だ
 爪切りの爪に身の程知らされる
 迷い猫しばらく膝に抱くことに
 孫達はわたしの甘さ衝いてくる
 夏さかりいのちさかりを蟬が鳴く
 飽食のも一度我が身つねり見る
 さまざまな出逢いがくれたアイデア
 本心を明かしてくれぬコスモスよ
 愛すこし微笑みかえず日日草
 夫より高い定食食べている
 オレンジ色の月が暗示をかけてくる
 不作法へすこし変わる眉の位置
 多情仏心 母の念いの限りなし
 今日の日を無事に踊ろう指人形
 秘密という三文字に既に酔っている
 あの人々が持てばイミテーションには見えず
 まん丸い害虫憎む気になれず
 背負うのは生きる重みのかすみ草

和歌山市 坂部紀久子
 堺市 高橋千万子
 和歌山市 森 茜
 東京都 山口 新子
 出雲市 園山多賀子
 竹原市 信本 博子
 米子市 光井 玲子
 大阪市 小糸 昭子
 米子市 川上より子
 有田市 松井かなめ
 堺市 山本 半銭
 和泉市 中川 楓
 和歌山市 内芝登志代
 西宮市 西口いわゑ
 大阪市 津守 柳伸
 茨木市 堀 良江
 大阪市 町田 達子
 鳥取県 西原 艶子
 岡山県 矢内寿恵子
 出雲市 石倉美佐子
 弘前市 肥後和香子
 大阪市 本間満津子
 守口市 結城 君子
 吹田市 園田 文子
 八木 千代

投句先 干 683 米子市花園町14-8



秋祭の思い出

春城年代

氏神である御香宮神社の表門は、伏見桃山城から移されたもので、重要文化財に指定されています。

境内に香水が湧き出ていたことから、御香宮と名付けられたそうです。その美味しい湧水が町の至るところに流れていて、酒蔵が今より多く立ち並んでいました。

ごっくんさん（私たちは、そう呼んでいました）の祭は十月九日でしたが、戦後、「体育の日」ができてから十日になりました。

私たち夫婦は、小学校の同級生だったので、その頃の祭が秋風の訪れとともに思い出されます。

武者行列、神輿、花傘などが町なかを練って、参道の両脇に栗やきんなんを炒る香り、アセチレン灯の匂い、かるやきや、みたらし団子の店など祭を語り合う時、昭和初期の幼

い頃が彷彿として、秋はたしかな足音を立てて来るのです。

その頃の中学生・女学生は、現代のような交際は禁じられていて、その中を逢うのでずから、境内の裏道ばかり選って歩き、ひよっとして逢えるかもうろうろして、教護連盟（校外の風紀を取り締まる先生たち）に呼び止められたことも、秋を余計にせつないものにするのです。

今の祭は、年々歳々、派手になっていきますが、昔のような情緒は消えました。

そして今、二人は七十の坂を越えなんとしています。

妖しき光

林 瑞 枝

私の心のふるさと―鳥取県淀江町には、千古の謎を秘めた二千年前の遺跡と言われる古墳群が数多くあって、古色蒼然とした昔を偲ばせる「石馬」は、横穴式石むろと岩屋とともに、今なお大切に保存されている。

また約四百年前、主家の興亡をかけて、尼子軍と戦ったつわものどもの夢のあと「北尾

城趾」があつて、その近くには、「天の真名井」と呼ばれる清らかな名水の湧き出する森の中に延命の澄んだ泉があり、生きて行く私どもの心の疲れを癒してくれるのです。

この今なお血まぐさい風が吹くような古戦場跡には、春から夏にかけてこの辺り一帯に光芒陸離として、妖しき光が遠い山なみから出沒してさまよう。

この正体は、今なお分かっていないと父に聞かされ、ある夜、父と兄と私は、この正体を見究めようと、勇を鼓して探険に出掛けたところが不思議なことに、近付いて行くうちに、その光は急に見失ってしまうのだ。

鬼火か、狼火か、夜光虫か、螢火か、狐火か、この妖しい光を見た人は、地下の何処かに宝物やダイヤモンドでも埋蔵されているのではないかと噂し合う。

そんな昔話を、秋になると思い出す。その兄も戦死し、父も逝って語り合う人もないが、少女時代を泳ぎ渡る秋の星空へ向って、咬いてみるのも、ふる里は私にとって生涯の生きる心の砦なのかも知れないと思う。

面舵いっぱい漕いで夕陽と昏れゆくか

瑞 枝

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

神谷 凡九郎

無位無冠 首はまつすぐ立てておく

藤井 高子

そうですナ、お互いにむずかしいことは避けて通りたいものです。けれども頭を下げてばかりじゃのうて、物を見る時くらいはシツカリと見させてもらいましょう。無位無冠でも、私たちがって人間なんやから。さよならを呑みこんだ日の片えくぼ

中尾 まゆみ

「さよなら」は、別れる時に必ず口にする言葉ですネ。今日はその言葉を口に出せなかつたけれど、えくぼは見えたし、手も振つたでしよう。私、うれしかったノ。

お味見ぐらいで味はわかない

大川 幸子

味もいろいろで、食べ物の調味ってホントにいやになるくらい難しい。それなのに通りかかったキッチンでつまんだだけで、お上手だなんて。世の中のこと万事そのとおり。

恥ずかしき事のみ多しでのひらよ

流 奈美子

その時その事に応じて目を耳を、そして口をおおったり、頭や額をたたいたり。ホントにしんどい目をさせて、てのひらさんに謝らなあきまへんナ。

一日一善よその子を叱つとく

木下 道子

これも一善。私かて何も好きで他人のお子さまを叱つてのやおまへんで。アラ、うちの母ちゃんは、こんなことで私を叱らないのに：なんて、子どもが思つてるかも。

生きているしるし涙が出て困る

西原 艶子

何も意識せぬうちに、涙が先に出るのにはホントに困りますネ。しかし、それが貴女なんです。そういう自分を大切に生き、あとで良かったネ：と笑えたら。

ドック入り結果聞くのがおそろしい

松本 聖子

誰だって検査の結果は、恐くて聞きたくないもの。自分の年齢や病歴、そしてアレコレで逃げたくなる。だが、どんなに恐くても、それは私のこれからの「道中御注意書」だと自分に言い聞かせて、いさぎよく承ることにいたしまひよ。

過ぎ去った過去を白紙にもどす罪

西浦 小鹿

ソレは過去の話、もう済んだことです。今

ごろ言つたかて仕方おまへん：なんてことがあまりにも多すぎる。そして、ソレが今の問題として取り上げられても、当然のようにもみつぶされてしまふ。いくら白紙にもどしても、過去があつての現在なんでつせ。

大げさな拍手 欲求不満だな

窪田 和広

割れるような拍手なのに、何かが欠けているような雰囲気：というようなことがある。どこかに問題があり、こんなに協力してるのにもつちよつという叱咤が欲求不満につながる大げさな拍手になっているのでは。

七夕にこより作つてくれた人

森本 節子

思い出に残る人は、いろいろとあるが、口マンチックな七夕にまつわる人と言えは、おのずから限られてくる。まして笹に短冊をつるすコヨリを作ってくれた人なんて。近所のお姉ちゃんか、小母さんか、それとも幼なじみのお兄ちゃんかも。逢いたいですネ。

簡単に騙せる母が苦手で

新 正子

誰も覚えがあるでしょ。母親を騙すのはいちばん簡単ですネ。あたりまえや、なんて悪いのときえ思っているが、それが積み重なると、いつかはやはり重荷になり、苦手にも思うようになるものです。お母さんは、ピエロのように軽やかにふるまい、またアンタはと笑っています。

法 律

阿萬萬的選



法律をはさんで人と人がいる
 お猿にも法律があるボスがいる
 法律を楯に瘦せてる怒り肩
 法規無視オバタリアンのバイク行く
 法文に書いてなかった愛の文字
 法律は知らぬが恥じぬ汗の日日
 蛆虫も生きる権利の法がある
 法律のことは縁ない束ね髪
 法律はないけど乱れぬ蟻の列
 神様の死角で潜る法の網
 不動産屋知ってる法だけよく喋り
 法律のことはうといイヤリング
 判決は白でも青春もどせない
 九条は九条として防衛費
 法律がつぎつぎ変る休耕田
 蟬しぐれまた読み返す第九条
 法改正もう抜け道が出来ていた
 右翼にも言い分がある法律論
 法律をテレビドラマで聞き習る
 法律も少しは習る詐欺師です
 法律をかざし遺族に波が立ち
 法よりもまだまだ怖い村八分

大店法庶民も少し知りはじめ
 法律が怖くて妻と離婚せず
 法律がどうあろうとも捨てぬ意地
 六法へ泥舟の櫓が軋みだす
 リゾット法過疎の泉が涸れてくる
 小六法繰って隣の枝を伐る
 真直ぐに歩く法律知らぬまま
 法律では解けぬ近所と溝が出来
 たく短く法の死角を選つて生き
 少しだけ法律犯し生きてます
 法律を知らない母が温かい
 ここだけは治外法権父の部屋
 長閑さは法律いらぬ島暮らし
 法律が妻の味方をして困る
 法律を少し知つてた口答え
 住
 法律の鑄型をきらうコップ酒
 裁判官四角い顔に見えてくる
 お役所に印籠に似た法があり
 法律つて四角四面で攻めて来る
 法律は庶民の物差し受けつけず
 人
 商法は読むこともない蛸焼屋
 地
 法律をかじり調査を手こずらせ
 天
 法律にうとい夫婦でそれでよい
 軸
 アメリカへ気兼ねゆらめく第九条
 新造
 一花
 二南
 雄々
 喜与志
 寿美
 英子
 明水
 宵明
 よし津
 規不風
 杏村
 一乗
 希久子
 一進
 テル
 度
 たつみ
 英美子
 あやめ
 正敏
 可住
 木魚

降 る

松本元江選



雨男いるなど旅に降られる
 棺の降ることもいとわぬ恋の路
 雑音を避けた海辺の宿は雨
 山陰の旅へ明日も降る予報
 雨降れば雨もまたよし京の寺
 降りしきる雨へ心を遊ばせる
 雨男やっぱり雨を連れて来た
 愛猫の墓へ小雪の降るしじま
 小さな秋どんぐりころり降って来た
 どしゃ降りの中もいとわず走る義理
 降って泣き降らねば困る農に生き
 降りかかる火の粉試験の身に受ける
 星の降る夜を濡れると二人連れ
 女なら降る程あるとぬかしたり
 降るほどの星へ水がめ飢えている
 降る雨へころころ男臭い部屋
 降り止まぬ雨の宴をひとり聞く
 灰の降る島から苦勞の史実汲む
 星が降る川の流れが止まってる
 黒い雨降って戦後がまだ続き
 降る霧の深さに妻の手はなさない
 末席の方から降って来る皮肉
 兼治郎
 鉄治
 章久
 雄々
 明水
 博子
 高夫
 路子
 喜美子
 豊
 秀峰
 保州
 白峰
 弘朗
 笑風
 たつみ
 有一朗
 博友
 智加恵
 侑里
 隆
 伊津志

路 集

逆縁にまだ降り止まぬ冬の雨
 縁談は降る程あった嫁き遅れ
 いつ何が降るか解らんビルの谷
 なれそめは傘さしかけた俄雨
 雨降って帰りの道に借りが出来
 思い切り降ると崩れてゆく日本
 降れば愚痴降らねばぐちになる野菜
 流灯が母の浄土へ降りてゆく
 古ぼけた日記に雨が降っている
 逃げ腰の男に雨が降り出した
 降りそうであらぬ東の雷光備英子
 通り雨 母の小言のように降る(備悦子
 面捨てて帰るピエロに星が降る 宵明
 ファイナーレ舞台上に降らす紙吹雪 静子
 相傘の二人へ真珠の雨が降る 杜的
 酸性雨降って地球が病んでいる 文子
 雨よ降れ今日の俺には傘がある 弘
 両手広げて降る幸せを受けている 彩子
 どしゃ降り遮断機ゆっくり降りてくる 志重
 自意識が過剰で火の粉降ってくる ひでの
 さよならの肩へ余情の星が降る 大柏
 正論は槍が降ろうが押し通す 清柳
 愛燦々夢さんさんと降るわたくしに 理瑛
 降る度に秋を深める遠しぐれ 軸

鉄 道

菫田 猷 雀 選



鉄道の火の粉に燃えた過去がある
 平行線たどる鉄路に似た政治
 廃線と決まりマニアが押し寄せる
 鉄道の長さへ喜寿の旅重ね
 なつかしい詩の生れた汽車の旅
 親子二代鉄道マンでめしを食べ
 花博へ義経号に乗りに行く
 中国の旅情たのしむ火車の旅
 全線純行 鉄道マニアの旅行案
 夫婦旅 何処まで続く平行線
 鉄道の歴史に尊い事故の跡
 待避線 泡立草の中で錆び
 想い出の積荷大きいミニ列車
 鉄道があるばかりに回行道
 鉄道馬車 祖母の話の良き時代
 鉄道のことはまかせと言え人
 駅弁につられ純行選って見る
 国鉄のままのレールで黒字出し
 銀河鉄道 少年の夢消えやらず
 鉄道も震度4にはみだされる
 乗せてやるを乗って頂く鉄道歴
 廃止線のレールは錆びて月見草

山峡を縫う鉄道で暮参する
 鉄道唱歌 車窓の景も移ろいぬ
 子のくれた金で鉄道旅樂し
 背を向けし故郷の駅通りすぎ
 線路脇住んで駅まで遠い道
 夢追って線路に耳をあてている
 新幹線パントマイムのある別れ
 D51とひねもす語る父であり
 単線を引いて行きたい国がある
 車線のレールの先にある故郷
 D51と言われる人に従ってゆく
 急がないので各駅停車の汽車に乗る
 在来線 母によく似た人が乗る
 鉄橋を渡るSL待つニコン
 鉄道がたなぐ山河の遠い緑
 特急の音だけ貰う過疎の駅
 鉄道マンの祖父を継ぎ父を継ぎ
 父の敷くレールに乗りぬ子の列車
 鉄道の一度は設計された過疎
 野山越え海を潜った鉄道網
 乗ってこそ鉄道唱歌口に出る
 コーヒーより景色が旨い展望車
 汽笛一声もう百年を越えたのか
 計らずも鉄道に生く停年後

初歩教室

題 — 倦きる

辻 白 溪子

今月の題「倦きる」は、あきる、いやになるという意味で飽きると同じ言葉です。句の内容は、聞き倦きるが多いようでした。題が平凡なためか、着想がせまく残念でした。

- 多すぎる玩具とうとう寝てしまい 春 子
- (多すぎる玩具に倦いて片付けぬ)
- 手仕事の倦きることない工芸品 姫 女
- (手仕事は倦きない趣味の手芸品)
- 倦きる程やらされてやっと芸一つ 富喜子
- (芸一つ出来てそれから倦きず凝り)
- 抜けられず倦きる程聞く子の自慢 ちづ子
- (子の自慢始まり倦きて席を抜け)
- お互いの悪友五十年倦きもせず すみれ
- (悪友で通して倦きぬ五十年)
- 倦きる程見ても飽きない嬰兒の寝顔 はる子
- (赤ちゃんの寝顔決して見倦きせぬ)
- 倦きっぱい男の胸がまたゆらぐ 豊 子
- (倦きっぱい男の言葉がすぐ変る)

聞き倦いた声を背にして塾通い

太一郎

(頑張れの声聞き倦いた塾通い)

花と人見あきて帰る花の博

洋

(花博の人に見倦いて帰る汗)

毎日を倦きる事なし飯の種

章久

(暑くても食事に倦きることはない)

お迎えは倦きもあかれもせんうちに

円女

倦きられぬうちにお迎え待つ長寿

欲張った願いに神も聞き倦きる

芳水

(聞き倦いた願いへ神も背を向ける)

しつこいな倦き倦きしてこの気持

吉太郎

倦きられてゐるのを知らずひつこすぎ)

清流の音のさわやかに倦きす

蛮拙

(清流の音のさわやかに倦きす)

七年目の浮気を作る倦怠期

隆

(三年目浮気をしたい程に倦き)

何しても歳の精だかす倦きる

茂章

(倦き性を歳の所為だと諦めぬ)

もう倦きた着物やっぱり捨てかねる

一枝

(派手気味の柄に倦いても捨てられず)

倦怠期なんともあつた老夫婦

志重

(倦怠期なんともあつた老夫婦)

器用だが仕事に倦きる癖のあり

轍

(倦き性と思つ器用な腕を持ち)

倦きる程風呂で教えた孫の九九

好花

(九九に倦く孫と一緒に湯に漬かり)

妻倦きず写経一〇〇枚書き続け

春風

(写経する正座の筆に倦きがない)

先生の言い訳聞かば倦きてゐる

美代子

(言い訳が同じで教師倦きてくる)

ほめられた料理三日目倦きられる

金吾

(三日間コロッケ続いて食べ倦きる)

機嫌よい歌だがまわり聴き倦きる

静子

(倦きられてゐるとは気付かない音痴)

老夫婦活け作り二泊で倦きる

隆

(活け作り二日豪華な宿に倦き)

雨恋つて暑い毎日倦きました

ひさ子

(連日の暑さに倦いて雨を恋い)

倦きる程夫婦付き合い相似する

ふさ子

(倦きる程連れ添い夫婦どこか似る)

ロボットにこき使われるのも倦きる

保夫

(ロボットに使われそつな職に倦き)

勉強にあきてファミコンにはあきぬ

敬

(ファミコンに夢中勉強すく倦きる)

倦きたれたペット自由を与えられ

時弘

(好きなことさせて貰つてペット倦き)

蝶は飛ぶあの花倦いたらこの花に

秀香

(花から花へ蝶は倦きずに飛び回る)

聞き倦きる訓示へそつと時計見る

繁男

(聞き倦きる訓示へそつと時計見る)

住所氏名倦きて来るほど書く役所

和子

広く浅いそこそこなし倦きる癖 しづ子

(何にでも手を出しすぐに倦きる癖)

倦きるほど帽子をもつて帽子買っ 小 鹿

(倦きる程持つてて帽子買っおしやれ)

医者通い倦きると命しそんじる 武 治

(まだ命要るので倦きず医者通い)

金儲けにもう倦きたとぬかしたり ようじ

(金儲けに倦きたと嫌な奴が言う)

オツパイに倦いて乳房をもて遊ぶ 絢 子

(乳房をもて遊んで母乳飲み倦きる)

倦きられても柳をあがめる蛙 友 子

(倦きがきて柳を離れている蛙)

倦きる度相手を変えて独りです 侑 里

(また相手変えて男にすぐに倦き)

中位の幸で倦きずに二人居る 彩 子

(中ぐらいの暮しに倦いたと思わない)

倦きるまで一人で遊ぶ母のそば (三美恵子

(滑り台倦きずに遊ぶ母のそば)

倦きませずテレビゲームに奇声あげ 一 乗

(テレビゲーム食事へ呼ばれても止めず)

老妻の愚痴にも倦いて背を向ける 呼 風

(老妻の愚痴聞き倦きている背中)

まだ続く自慢話に聞き倦きる 君 江

聞き倦きた自慢にあくびかみ殺す 高 栄

(あくび噛みころして自慢聞き倦きる)

待望の慈雨も二日でもう倦きる 和 枝

(待ち兼ねた雨が二日も降って倦き)

毎日のそつめん倦きない年齢になり みつ子

(そつめん倦きない年齢を淋しがり)

倦意期そんな時代もありました 義

(倦意期あったと笑い合う夫婦)

細い指倦きませず折るだまし舟 (三美恵子

(倦きませず鶴折るベッドの細い指)

いじらしい捨てて犬の世話倦きませず 高 雄

(捨てて犬の世話に倦きない優しい娘)

青山高原倦む孫あやす蟬しぐれ 明 吉

(高原の夏聞き倦きぬ蟬しぐれ)

今月も倦きたと思う給料日 忠 禄

(差し引きの多い給料に倦きがくる)

倦きられたプランコ余韻ゆれ残る 志華子

(倦きるまでプランコ譲り合つて揺れる)

喜怒哀楽のはげしい妻でまだ倦きぬ 彩 子

(すぐ顔に出るが美人で倦きぬ妻)

夜もすがら倦きぬ音頭に下駄の音 章 久

(音頭の下駄が倦きない踊りの輪)

倦きるまで迷惑かけず旅に立ち 織

(倦きられる程に迷惑かけてない)

倦き性が二度目の妻とおりあわず 春 風

(再婚の妻にも不満を言うて倦き)

何回も聞いた話を聞いている みつ子

(聞き倦いた噂 隣も知っていた)

寿命延び倦いてきますよ折り返し 隆

(人生の五合目古希にまだ倦きず)

あきる程一度寝たいと言わっしやる 敬

(倦きるほど寝たいと無理なことを言う)

汗のない椅子へそろそろ倦きがくる 時 弘

(窓側の椅子が倦いてる午後のビル)

使命感暑さに倦きず靴をはく 武 治

(暑さには倦きずノルマをあげる靴)

テレビにも倦いてひとりのコーヒ飲む 絢 子

(テレビにも倦いてひとりのコーヒ飲む)

倦かれても元もどすと言いきる娘 好 花

(同居して嫁には倦きることばかり)

倦きた証提派手に女が翔んで見せ ちづ子

(流行に倦きる女をもてあまし)

フリータイム鏡のヒゲを剃り落とす 隆 雄

(見倦きてる鏡の髭を剃り落とす)

着想と表現が巧みな句 富喜子

隠れんばに倦きた女が強くなる

すぐ倦きのおもちやを孫へ与へ過ぎ (三美恵子

青春の遊びに倦きて道は秋 小 鹿

私の句

同居して今更倦いたとも言えず 白 溪子

倦き性が良人に似てるから困る

◇ 題「末 席」 10月15日締切(12月号発表)

宛先 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19

辻 白 溪子

こんぴら詣で

(その一) 四国

布施 幸子

讃岐の金刀比羅宮は、象頭山の中腹二五メートルの高さにある。

石段下には、時代劇めいた駕籠が待機していて、「負けときますよ」と声をかけられたが、はたけにどうあれ、まだまだ若いことにしている私たち夫婦は、杖を頼りにがんばることにした。杖は、琴平駅前のみやげ店で借り、その代わり帰りにはみやげ物を買う約束をした。

ケーブル反対派と聞く店々を両側に見て、石段に挑むこと三五五段、駕籠もここまでという大門にまで登り、書院、旭社の立派さを感じ入りつつ、さらに四二〇段を登って本宮にたどりついた。松造りの堂々とした社殿である。

金刀比羅宮は、かつて金毘羅大権現とよばれ、厚い信仰を集めてきた。

コンピラ信仰のルーツは、古代インドである。サンスクリット語の「クンピラ」が、日本に渡って「コンピラ」に変わった。

クンピラとは、ガンジス河のワニを神格化したものだそう。なんでも中インドの象頭山に宮殿を構えて暮らしていて、この山でお釈迦さまが説法された時は、いの一歩に手伝いを申し出たという。

「なんでワニが、山の宮殿に住むのかしら」と疑問がわくが、鯉でも出世すれば天へ昇って竜になるそうだから、ましてや竜に似たワニが山へ登るくらいは朝飯前かもしれない。事実、金毘羅大権現は竜神、海の守り神として栄えてきたのである。

平安時代、讃岐の松尾寺では、本尊釈迦如来の守護神として、クンピラこと金毘羅神を勧請した。

その時、寺の裏山を『象頭山』と名づけ、クンピラさんがホームシックにかからぬよう気をつかった。居心地がよかったのか、クンピラさんは、いつのまにやら金毘羅大権現として松尾寺の本尊となり、やがて象頭山金毘羅大権現に出世して松尾寺の影を薄くしてしまった。

朝廷の崇拝を受け、福の神として舟乗りはもちろん、一般の人々も大いに信心した。明

住田三鈷追悼川柳大会

とき 10月21日(日) 10時開場

ところ 米子駅前「米吾ビル」6F

お話し 「三鈷を語る」 金築 雨学

題と選者(各題2句・欠席投句拝辞)

「妹」 門脇かずお選

「薔薇」 林 瑞枝選

「太陽」 但見石花菜選

「頭」 番野多賀子選

「象」 天根 夢草選

「歯」 小林由多香選

「音」 時実 新子選

席題 1題 長谷川博子選

会費 1000円

主催 わかとり川柳会

ふれあいの祭典ひょうご90

「川柳祭」発表大会

とき 11月3日(祝) 11時開場

ところ 花の北市民広場大ホール

治の神仏分離で『琴平神社』、さらに『金刀比羅宮』と名を変えたが、神威は衰えを知らず、年間数百万もの人が詣でるといわれている。

こんびらさんにまつわって、古くから『流し樽』の習わしがある。

自らお詣りできぬ者が、空樽に金品を入れ、『奉納金毘羅大権現』の幟を立てて海へ流す。その樽を見つけた船は、必ず神前へ届けることになっている。こんびらさんは居ながらにして、金品を寄せ集める結構な神さまなのである。

ご祭神であるが、まずは大物主神、後に崇徳天皇が合祀された。大物主神とは大國主命の分霊で、インド出身の大黒天と習合して七福神の一員となったお方、また、崇徳天皇は保元の乱で讃岐へ流され、怨みのうちに没した帝である。

どちらも力の強い神とされているが、しかば元祖クンビラはどうなったのか、とまたもや疑問がわいてくる。でも、ゴチャゴチャ理屈を並べては信心なんて成り立たない。信者は理屈ぬきで神にすがり、ご利益を授かってきたのだろう。

森鷗外の小説に『金毘羅』がある。たった六か月の命だった息子と、金毘羅信仰とが結びつけて書かれている。鷗外は不信心、鷗外

の奥さんは金毘羅さんを信心していたようだ。

——主人公は、金毘羅さんの近くまで講演に来ながら、参詣をしないで夜汽車で帰る。

その晩、奥さんは、風呂屋で子供が溺れる夢を見る。翌日から、風邪気味だった子供らの容態が悪くなり、はしかと診断されて、男の子は短い生を終えてしまっ——

偶然かもしれないが、なにやら金毘羅大権現の崇り神的な面が見えて不気味である。

私たち夫婦は、ちゃんと本殿で拝み、おさいせんも十円差し上げて、「くれぐれもご利益の方をおたのもうします」と願いながら引き返した。

みやげ店で杖を返し、こけしと置物の流し樽を買った。こけしにも流し樽にも、『こんびらふねふね、追風おきぜに帆かけてシユラシユシユシユ」と書かれていて、私は「おや?」と思った。今までこの歌詞は「お池に帆かけてシユラシユシユシユ」とばかり思いこんでいたからだ。考えてみると竜神の船が、お池をうろつくなんていかにもスケールが小さい。それに「シユラシユシユシユ」は、古代の運搬具「修羅」のごとくシユシユシユと動く意味だとも初めて知った。そんな知識が増えただけでも、ご利益があつたと感謝すべきだろう。

(JR播但線野里駅前すぐ)
題と選者 (各題2句・正午締切)

「椅子」 大西 泰世選
「輪」 原田 北涯選
「移す」 藤本静港子選
「白」 真殿舍吉句里選

豊中市民川柳大会

とき 11月23日(祝) 正午開場

ところ 豊中市立中央公民館1F集会室

(阪急宝塚線曾根駅東200米)

おはなし 番傘川柳本社主幹 磯野いさむ氏

席題 (当日発表) 清水 斗升選

宿題 「煙」 波部 白洋選

「卵」 西川 景子選

「橋」 保木 寿選

「道」 奥山 晴生選

「車」 河内 天笑選

「旗」 片岡つとむ選

「顔」 森中恵美子選

締切 午後1時(各題2句)

会費 1000円(記念品・発表誌呈)

主催 豊中川柳会

本社 九月句会

九月七日(金)午後五時半

メンスフアツションセンター

残暑がつづきながらも朝夕、日ましに涼しさを加える中で開かれた九月句会は、前月より出席者はやや増えて八十人を数えた。

おはなしは塩満敏氏、ワープロを詠んだ句を紹介し、「ワープロの手紙は冷たい」という意見に対して反論、ワープロのさまざまな効用・機能について力説し、「今や保有台数六百万台になったこの機器をもっと積極的に活用しよう」と訴えた。

月間賞は西口いわゑさんが獲得。(正)

(司会―岳人) (受付―年代・月子)

(記録―月子・金太)

出席者―太茂津・十郎・白浜子・幸・諷云
 兄・凡九郎・柳影・紫香・メ女・杜的・小林
 英子・章久・喜風・栞・笛生・利武・悟郎・
 しげお・恵空・狸村・小路・武庫坊・年代・
 達子・満津子・典子・保州・鬼遊・金太・勝
 美・三郎・眉水・晴美・雅文・トメ子・岳人
 はつ絵・いわゑ・みつ子・月子・天笑・美代

子・敏・ダン吉・恭昌・三男・東雲・たす子
 萬の・英一・福本英子・ただし・八斗祿・智
 子・シマ子・柳宏子・透太・洋敏・けんたろ
 う・冬葉・正坊・勝晴・悦郎・重人・文秋・
 楓葉・白洋・比呂志・規不風・頂留子・寿子
 章・寿美・元紀・遊美・庸佑・薫風・美房・
 英王子・白兔

席題「はらはら」 大矢十郎選

はらはらと子の挨拶が聞きとれず 智子
 スピーチを隣の妻ははらはらし 満津子
 はらはらとさせる家計簿睨んでる はつ絵
 はらはらとさせて長生きしてもらう 三男
 はらはらと日本はイラク見てるだけ 三郎
 産油国の謀反ははらはらする地球 英子
 熱帯夜ははらはらさせる電気代 冬葉
 助手席に乗ってははらはらしてる 柳影
 はらはらとするな進路は決めてある 比呂志
 株の街ははらして石油危機 重人
 締切時間がせまりはらはらするばかり 幸
 舞台袖 母がはらはらして覗く 白浜子
 末席の野次にははららする議長 美代子
 はらはらと見守る老父の足捌き 太茂津
 滑り止め受ける入試の綱渡り 恭昌
 はらはらとお手々つないだ丸木橋 ただし
 二百斤はらはらさせるハイウエー 雅文
 はらはらとさせる彼女の黙秘権 みつ子
 はらはらと流す女の空涙 正坊
 秋長けてはらはら落ち葉地に還る 寿美

はらはらの人生 八十路の橋渡る 笛生
 孫の守いつもはらはらして疲れ 女
 はらはらとブレイキのない青春よ 悦郎
 はらはらとさせた娘が嫁に行く 透太
 悪友の祝辞ははらはらさせて済み 萬的
 はらはらせぬ三パーセントになれまし 達子
 子の競技ははらして間に終わる 庸佑
 はらはらとさせてくれる核ボタン 保州
 雨三日ははらさせる崖がある 白洋
 聞くうちにははらら落ちる熱いもの はつ絵
 はらはらとさせる見せ場へ固唾のむ 庸佑

佳
 よちよちの足で表へすぐ走る 備英子
 忍ぶ愛ははらしつつ信じたい 晴美
 はらはらと見守っている父の試歩 敏
 発車ベルははらおつりもらつてる 満津子
 土依際ははらさせて人気呼び 洋敏
 人
 覚悟したものはらはら空の旅 諷云児
 はらはらとさせて水入り取り直し 利武
 天
 レントゲンははらら見たに出た笑顔 喜風
 栞大人ははららせてお健やか 十郎

兼題「息」 奥田みつ子選
 商売繁昌夫婦の息が合っている 理瑛
 猿回しに息を合わせる猿になる 幸

兼題「困る」 辻 白溪子選

生活に困って一つだけの嘘
 長男にうまれて困る事がある
 困った時はお互い様という情け
 カネが要るから困るとは言いかねる
 困ったふりをする演歌の似合っ人
 困った時は困った顔をして欲しい
 困るのはあんたと手紙置いてある
 虎の子を株にしたがるから困る
 困らせてくれたが今は二兎の母
 戦争をしたがる国で困ります
 ほんとうに困ったときは声も出ず
 困ったら押すとか引くとか叩くとか
 いたずらが好きな右手で困ってる
 几帳面 困らぬようにしてるだけ
 あんまりに気の利く妻で困ります
 困ったを口癖にして飲み歩き
 金で済む相談だから困ります
 ライバルに困った顔は見せられぬ
 妻の里 余りに近くても困る
 泥酔を扱うポリス困り果て
 ショークなど通じぬ人で困ってる
 困ったと男の意地が言わせない
 反対をせず困っている無口
 困るから電話手紙をもう止めて
 遺産分け中途半端で困らされ
 ラブホテル困る困るとついて行く
 困るのはお互い様と取り合わず

ダン吉 雀踊子 八斗醜 文秋 失名 冬葉 透太 はつ絵 頂留子 敏 勝晴 シマ子 みつ子 満津子 (外)英子 吸江 保州 楓楽 金太 紫香 いわゑ 寿美 しげお 月子 小路 繁男 柳影

里帰り困る話を置き土産
 先生と呼ばれて困る縄のれん
 地下鉄の風は淑女を困らせる
 音無しで来る霊柩車には困る
 困っても手はさしのべぬ愛もある
 佳
 前列に笑わぬ客がいて困る
 何にでも顔出す社長にも困り
 身の証し立てると困る友がいる
 町内に放送局がいて困る
 困ったと言っておれない性知識
 人
 困るのも羨しげらく見えていよう
 地
 困ったらいつも爪噛む癖がある
 天
 困ってる時ほど陽気な父になり
 軸
 困らせる言葉女は武器にする

悟郎 岳人 元紀 白洋 楓楽 正坊 萬的 十郎 諷云児 杜的 文秋 千秀 柳宏子 白溪子 松川杜的選

ライバルがどんどん追い抜く日のつらさ
 家も田も売ることにした保証印
 逆縁の風があまりに冷たさき
 ガン告知できぬお医者もつらさ
 ほん軽く言ったごんが山盛りで
 お点前の正座がつかない皮下脂肪
 さよならがつらくてしゃべりつけてる
 不言実行つらさを隠す父の背な
 元値切るそんな日もある小商い
 そのつらさ水掛不動に打ち明ける
 つらい時期じつと耐えてた露の臺
 つらい時やっぱり探す亡母の星
 つらいから涙は見せぬ赤とんぼ
 つらい時ブランコを漕ぐひとりぼち
 つらい話きいているのは泣き羅漢
 つらかったことも思い出 珊瑚婚
 B面につらい話が入れてある
 辛いこといっぱい蓄めてる座り肝臓
 秋ざくらつらい話はしたがらぬ
 それからもお薦 主税に似た別れ
 野麦峠のつらさ知ってる絹の糸
 色褪せた造花に四季のないつらさ
 寅さんにもはくらにもつらい恋がある
 つらいこと楽しいこともある夫婦

典子 重人 敏 紫香 諷云児 満津子 悟郎 美代子 萬的 みつ子 柳宏子 小鹿 小美 正坊 透太 柳宏子 いわゑ 美代子 千秀 たず子 白洋 岳人 笛生 月子 恵空 三男

モノリザのつらさは泣けぬことだろう

保州

つらいこと何んにも無いと娘の手紙

備英子

割箸でパンツつまむのでつらい

けんたろう

親友の極がつらいほど軽い

保州

つらかった胸八丁をもう忘れ

杜的

兼題「乗る」

西尾

栞選

乗り物に弱くて仁丹かんでいる

雀踊子

月が出た祭り囃子が風に乗る

道胤

虹に乗る準備に朝の英会話

新正子

尻馬に乗って裸になりました

小鹿

乗りおくれ命拾ったこともある

吸江

乗せられた心地の好さを悔いている

勝美

逆玉に乗って男の意地が消え

利武

相談に乗って下さい花名刺

英一

乗りついで帰って来た娘へ父無口

備英子

カラオケの相談ならばすぐに乗る

恵空

よく喋る人と電車に乗り合わせ

鬼遊

へそくりがうっかり乗った口車

重人

雑談から抜けた噂が風に乗る

寿子

フランコへ二人乗りして夕やけこやけ

備英子

乗せられて振り落とされた口車

保州

アイソよいタクシー値上げの日だった

重人

その話乗るとは欲と道連れか

柳宏子

乗り遅れてもいい先のある話

柳影

それじゃ一丁乗ってみるかとかい橋
終電へ軽い財布になって乗り
誘惑に乗っても見たくなる熟年
行進曲のリズムに乗って万歩計
男ならだまし船にも乗ってみる
鈍行に乗る旅人へ蟬しぐれ
おだてられ少し乗り過ぎたかと自省
片足だけうまい話に乗っておく
札幌の神通力に乗せられる
乗り切った苦勞は言わず夫婦箸
きみと乗る終着駅のない電車
乗りかえて他人ばかりの街に着く
人を乗せ自分は降りる太鼓もち
善人が乗る方舟は沈み出す
水色の風に口笛乗る時
泥舟も裸一貫なら乗れる

年
代
白
溪
子
小
英
子
文
秋
敏
岳
人
庸
佑
十
郎
た
ず
お
金
太
透
太
晴
美
元
紀
達
子
保
州

乗りがえるそこにロマンがありそうで
助手席に心得たのが先に乗り
鈍行に乗ると私らしくなる
時流には乗るつもりない蝸牛
雲に乗ることを夢みる竹トンボ

泥舟に乗る条件がそろい過ぎ
興が乗ると見さかいのない足の裏
あなたから少し離れて汽車に乗る

女
文
幸
坊
人
冬
葉
敬
い
わ
ゑ

川柳塔社常任理事会(8月30日)

▽薫風氏から山内静水氏(参事・竹原川柳会
長)の病状と近況について報告
▽柳宏子氏から昨年11月12日の川柳塔碑除幕
式以降の新合祀者21名を8月12日、過去帳
に追加記入したことを報告
▽平成二年度の路郎賞・川柳塔賞を決定
▽谷垣史好氏の辞任に伴い、川柳塔賞選考委
員に玉置重人氏を決定
▽栗主幹から川柳塔社規約(同人規約改定)
案にもとづく新役員案を提示
▽高野律子(島根県) 幸家單車(たんしゃ・
鳥取県) 井上富子(倉敷市) 渡辺圭坊(京
都市)の4氏の同人推薦を承認

お願
い

10月から11月にかけて大阪府下はじめ各地で開催される文化祭協賛の市民川柳大会や句集発刊などの記念句会の結果を編集部へお知らせください。参加人数、各題天位句(秀句)あるいは各賞の作品・作者名を柳界展望欄に掲載させていただきたいと存じます。

(清記 楓楽)

(編集部)

— 81 —



1人1句、1か月分、30句以内厳守。
 毎月23日締切。
 担当・玉置重人

川柳たけはら 森井 蒼居報

あめだまはいろんな色でおいしいな 小二典 之
 目ざまし時計の代わりをするよ雨の音小五史 子
 花に囲まれてわが句碑誕生す
 因習に少うし妥協して生きる
 安芸の島うまい晩酌ありがとう
 はしやいだ後の淋しさにいるひとり
 あの頃は若葉に燃えていた私
 気兼ねなく趣味に興ずる年金よ
 頂上の望みは捨てぬかたつむり
 付和雷同いくたび乗った騙し舟
 終点へ歩き続ける漏路笠
 同じ名の親近感よライバルよ
 まあちゃん部屋までおもちゃ攻めてくる
 譲り合う孫の姿にやすらぎぬ
 老い二人よき過去を偲び茶がうまい
 パラの門 女王のような気にさせる
 六月のバラのバラたり赤いバラ
 嫁ぐ娘へ贈る言葉がたんとある
 子を叱るとき本性がでてしまふ
 かかる時なんと息子の頼もしい

子 幸 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

夢の中だけでも楽天家ていよう
 出合いと縁とは縁とは雨降りやまぬ
 追伸のあたりで炎えてくる思慕よ
 君と来た砂丘に家族五人立つ
 風吹いて琵琶湖に波の立つを知り
 アンコールやさしい波が押し寄せ
 熱の日に高いすいかを買ってくる
 雨の日のひとり趣味がある救い
 許されぬ恋も千度となる炎
 箸は下手ビアノはうまく弾いている

川柳大阪 中原比呂志報

万歩計つけたら歩く一万歩
 本厄の公私混じった胃潰瘍
 不始末を背負うカバンは秘書が持ち
 慎重が過ぎて逃がした小さい欲
 解禁へしかと包丁研いでいる
 空っぽの心に風鈴返事する
 レンズから覗く素顔は鬼だった
 ライバルは二代目つれて見せに来る
 順不同その裏側も知るところ
 株主はさくらで異議なしくり返す
 使命感持ったグルマににらまれる
 敗戦の責めは一人を負うエラー
 干からびた風は都塵を巻き上げる
 すみません一言いえて朝の風
 日の丸と君が代 平成色分ける
 紀子さんの親父でなくてよかつたな
 プロポーション競う真夏の暑い空
 解禁をまたずに進む肝移植
 解禁日盛大なのは竿の数

一 正 敏 鉄 雅 重 与 洛 亮 希 美 本 一 三 柳 天 三 權
 路 之 心 巢 呂 醉 太 久 津 蔭 步 十 弘 平 吉 八

責任を負う肚づもりゴースイン
 高槻川柳サークル卵の花 辻白漢子報
 一坪の庭のみどりにある余生
 日の丸はくじらにまでも嫌われる
 一坪の僕のカンナを焼く炎やす
 新聞で効能を聞く露天風呂
 常連にゆかぬ温いおすわわ
 何もかも包み隠さぬ荒い語気
 朝市で土の温みも包まれる
 常連のひとりに犬がなついている
 一坪でこんなな句のものごと
 定年になったと常連さんが来る
 常連を迎えるママは声も変え
 坪庭に四季を咲かせて祖母達者
 片べりの靴が知ってる父の癖
 一坪は道にとられた角の家
 鉄道を辞めてもきつちり起きる癖
 一坪の土の値段を忘れない
 香典を包むと蜚飛んでくる
 喜びが包む抑留船が着く
 常連がファミリーで来た夏休み
 常連が黙って座る端の席
 包れ紙の御縁と思う荷を包む
 包装紙 正倉院の御物から
 何の話かビールのせんにぬいてから
 あの癖が入れは機嫌の良い証拠
 一坪がもめる都会の遺産わけ
 くよくよと悩む貴男の悪い癖
 帯芯に過去を包んでいる女
 一坪と言わねば納得しない祖父

比呂志 女 遊 鬼 静 武 飄 二 萬 的 佳 秋 志 子 的 芳 香 紫 し げ 代 年 作 一 郎 英 子 花 代 子 節 子 正 坊 豊 子 真 笑 の り 子 武 庫 坊 勝 一 美 智 子 京 童

浴衣の娘コソキチンの宵祭
笑われてすむ癖だからたかが知れ

川柳クラブわたの花 一片上

英一報

圭坊
白漢子

カタツムリよ梅雨の私は動かない
人生は芝居の舞台するめ味

恋をしていやな癖まで好きになり
終電車 恋のかげりの窓ガラス

老いらく 恋を孫らがふれあるく
苦い恋 戦時を思い惹きざむ

はじらいの十二単の紀子の恋
恋の川 水かさ増して深い淵

酒呑んで約束するとすぐ忘れ
約束のひとつに禁酒の項があり

笑わない約束で聞く孫のうた
約束を果した亡母のいう笑顔

約束はなんば花月という電話
約束を破って借りが出来ました

ねとほけた朝に約束思い出し
針千本こわい約束守らされ

暑さにポー約束の日を間違える
約束を果しましたね結婚式

よろこんだ約束直ぐに取り消され
異議ありと云う約束の吉備団子

エンケージリングになまず震度四
雷が近づいて来る待ちぼうけ

真直ぐに家に帰る途中下車
一票がほしいばかりの空手形

待ち合わせしげきらした伝言板
また来てね指切りげんまん紅葉の手

待ち呆けの男を帰す花時計

章

友甫

神さまと約束をする絵馬を買
鬼遊

正

川柳化粧檣

植村客遊子報

溝掃除済ませて町も夏の貌

独酌の女の流転聞かされる

世の中の流れに乗れぬ父頑固

亡母に似た辻地蔵あり遠回り

もう無いと見たかセールス寄り付かず

底辺の風は無色で温かく

無理すなすななど仕事きつすぎる

水平線はるかはるかの海行かば

聞き合わせあたりさわりのない答え

笛吹けば踊り始めるヤジロベ

雑草と思えぬ清楚な花は白

茶柱に喜んだのも束の間だ

此所だけの話は皆が知っている

昇進へVサインの息子に蓄微届く

老いて子に従うてみたたいがほしい

バーゲンへ女ごころが騒ぎ出す

晩酌が美味いその夜よく眠れ

身に覚え無い日のシャワー強く出し

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

句の種を拾って歩く万歩計

伊久栄

故里へなかなかな飛べぬ竹トンボ

ふさえ

切り口が素直になった詩の味

山人

切らぬまま散った昭和の花の影

山香

平和だな阿呆踊って夜を明かす

志重

病みてな女友のやさしさ深さ知る

江山

川汚れメタカカの学校閉鎖する

半仙

明治嬢ストレス ゲート場に捨て

正

ほどほどにせいと叱った長電話

肩や腰痛い代りに口達者

肩落とす後ろ姿へそつとおり

ほどほどにしとけと諭す里の母

無意識に出た肩書の声の幅

長生きの夫婦へ白慢も悔いもない

おつぱこ川柳会

松村迷観子報

知らんまに顔の広さを利用され

細い腕支えてくれた広い胸

ゆとりある視野の広さが実を結ぶ

人柄の奥に心の広さもち

この広い世界に親は老母一人

買取と意地も手伝う広い家

白柳子

放任

よしみ

マサエ

迷香

ひかり

保恒

吟平

美恵子

邦人

恒心

凡人

贊平

小雪

四郎

凡子

他人

ちよ

消えかける火種煽いでいる

鬼遊

背伸びばかりして足元掏われる

紫香

かたつむり重い荷物と思われない

紅一点女にリードされている

松村迷観子選

喜久恵

八十の谷間で見栄がまだ燃える

山人

しきたりを巧く裁いて来た茶の間

山人

真直ぐに打ってゆるがぬ父の釘

幸子

何も彼も注文通りになる恐さ

菊野

学歴で包帯をする首の皮

四郎

一番好きで一番嫌いで自分

小雪

消えかける火種煽いでいる他人

凡子

背伸びばかりして足元掏われる

ちよ

かたつむり重い荷物と思われない

鬼遊

紅一点女にリードされている

紫香

幅広い支持をバックに打って出る
山ほどの夢を広げたはずれくじ
人間の不信広がる日の恐さ

世渡りは広い心でりたいもの
東京へもってゆきたい広い畑
夜が更けて広い湯舟に身を沈め
種一つ和が広がった花博の庭
もう一間ほしいと思う子の成人

川柳後楽

従野 健一報

ひと盛りの鱗にだつてある主張
我慢する事も覚えて角がとれ
後悔の味は知らないお人好し
飛び越えて欲しい背中を丸くする
夕立にメッシュの靴が泣いている
梅雨空に照々坊主も欠伸する
ひと時の清涼剤となるかもめーる
哀歌が湯煙の中で揺れている
横道へ意欲を出しても使い捨て
一筋縄がぬ男が恐妻家
もつれ糸解けず無駄メシばかり食う
炎天に負けず明治はよく動き
切り抜き帳に入れて頭を空にする
座禪組む余生は我慢と出る暗示
昨夕ビールを注いだ男の通夜にいる
いたずらな老眼その先のぞきこむ
百までも生きる気迫の芸が生き
あるときは無視することも親の愛
突き放す気迫を妻は持っていない
いたずらをして童顔のままの顔
無視されて男は燃える火種抱く

明人 かおり スミエ 迷貫 吟笑 いさむ 千カエ 迷観子
草風 浄美 たけ志 正秀 金吾 拓治 青銅 桃風 博友 柳五郎 健一 玉水 吟平 佐加恵 義親 美智子 哲郎 秋月 鮫虎狼 吉則 照路

川柳東大阪

森下 愛論報

元気元気傘寿を祝う酒の量
一晩も寝れば元気になる若さ
元気出せこれから花を咲かす歳
暴落の株に親父は空元気
傘傘傘だあれも虹に気付かない
八一歌碑を読んでる日傘傾けて
童王へ雨乞いしたくなる傘屋
目のうろこ落とせと親が出すサイン
鑑識で馬脚を出したニセサイン
鑑払い一つで静まる更衣室
負けそうになるとか弱い女です
弱い奴酒で虚勢の軽い口
陣痛を知らぬ男の弱さです
もつ六つまだ六十と紅をさす
野の花を簪にして幼な妻
一瞬の弱気ためらい傷のこる
弱いのが勝つこともあり面白い
洋服が毎日替わる美人アナ
弱点を見せぬ男の笑顔だな

岸和田川柳会

植山

武助報

手を握る先生の目が許してる
もつキッスしてから許すも許さんも
許してと目が言っている象である
許される事で借りが一つ増え
意志弱い自分を許してばかりいる
階段は善意にすがる車椅子
石段を昇るぶつぶつ詫びながら
階段を二段跨ぎの朝の駅

滋啓 信治 寛然坊 猪太郎 孤舟 作二郎 恭太 章久 雅士 勝美 頂留子 愛論 隆 百合枝 慶三 真柳 柳宏子 晋吾 湖風 さよ子 勝晴 恵空 武助 射月芳 通彦 ダン吉 狸村

喝采のない階段男の背がまるく
階段の上に仏の里がある
目配せをして階段を先に降り
階段がこわいと思うハイヒール
階段のきしみ気にして御前様
冗談へ妻が真顔で乗ってくる
冗談一ついつもボツケに入れてある
冗談の言えぬお人と暮している
冗談が通じぬ人でさみしいな
冗談の出やすい風が吹いている
ギンギシと機嫌の悪い夫婦の輪
ご機嫌が斜めで無心言ひそびれ
ワープロの機嫌取りつつ汗をか
ご機嫌の亡父の笑顔が好きでした
骨壺もご機嫌らしい音で鳴る
はすの花妻の機嫌を知っている

倉吉川柳会

渡辺

善句報

もの言わぬ石も石垣守ってる
一日のスタート蛇口から貰う
善人の積んだ石垣崩れない
一日の終りに花子は蝶になる
盆踊り思いおもいの身のこなし
土壇場で投げた石なら持っている
一日に一回ぐらい笑いたい
踊るバカ案山子のように頼かむり
捨て石の一つが敵に味方する
まっすぐにわたくしを見て怒りなよ
言わせとけいずれあいつは石になる
うなずいてイベントはめて参加せず
カマキリの怒りをイラク知っている

萬平 甘平 二南 富志子 こう 浪速子 一弥 小紋 天笑 希久志 みのる 文 白光子 月子 千代子 久子 とめ子 幸苑 礼子 和枝 美智子 ひろし 京子 康志 美由紀 独歩

怒りたくなつたら壺とけんかする
イベントの最後花火でしめくり
蛸踊りはときどき家をやつている
旧家は旧家の漬物店がある
八十路いま一日一歩で前に出る
イベントの割りには人が集まらぬ
女とは哀し一日五面相
イベントが期待をこめるUターン
オーロラの上で天女と踊りたい
ぼくの家は一日自然クーラです

岩美川柳会

羽津川公乃報

そば枕ムードの出ないままねむる
花嫁の母はムードに泣かされる
栄転のムードに酔つて指輪買う
朝露のしたたるトマト籠に盛る
みどりしたたる森に生命の水が湧く
真心にふれてしたたる花の露
仏前へ露のしたたる花を盛る
どさくさの戦後夜いだ母の知恵
どさくさの成金趣味が垢ぬけぬ
農を継ぐ宿命鼻で子は笑う

南大阪川柳会

中川 滋雀報

札束の威力にお地藏さん移転
出るとこへ出れば威力のある名刺
ひたむきな雫の威力が穿つ穴
地上げ屋の威力に押されてはならぬ
子にすれば金の威力が気に入らず
らせん階段ひとりが消えて行く音だ
あの世まで消えない罪を抱いて生き

石花菜 雄々 秋女 満春 かつみ 柳風 よしえ 十六夜 苦句
大漁 さなへ 長治 民子 單車 照子 美恵子 芳子 公乃 美代子
柳宏子 度久 章久 シメ子 久子 作二郎 恒明

まだ本心見せずに消えるシャボン玉
時々は自分を消してみてごらん
尾灯消え明日につづく闇になる
表面は消えてるように見える愛
罪一つ消しに巡つた遍路旅
資格などもたぬが母の知恵袋
口下手な男が持っていた資格
ライセンス男は夢を見なくなる
薔薇はバラの資格でバツと咲くのです
資格取るまでは夫婦でいるわたし
もう一つ資格取つたら脱サラだ
肝移植父の資格をとりもどす
無資格で小鳥は今日も空をとぶ
的を射る目は一点を外らさない
着眼のよさを褒めてる棒グラフ
着眼の読みの甘さが罨に落ち
着眼にこんな違つアマトプロ
着眼に迷いを見せる浮気性
もう笑いとばせる苦渋なき余白
八月を集うて苦い酒呷る
甘言の裏のながさが読み切れず
にがいの経験だつたが賢うなりました

川柳岩出

小倉 アサ報

少年の夢は無限の雲に乗る
美を与え美を愛するも人ならば
心地よい疲れに眠る登山靴
美しい言葉の裏にある野心
朝雲 鱗の数ほよみきれぬ
朝夕に色移りゆく山恋し

頂留子 凡九郎 雀踊子 トミニ子 新造 寿美 萬的 冬葉 智子 柳伸 潔
公一 三恵子 滋雀 重人 悟郎 勝美 寛然坊 憲太郎 章 庸佑 文秋

八十四歳海千山千とはいかぬ
夏山に咲く山百合に涼を取り
受け身なら素直になろう雲の青
逝く水の流れの底が美しい
この道に峠を越せば夢がある
美しい流れ曲けての人生譜
過去棄てて雲の流れに添う夫婦
フルムーン雲の切れ目を恋しがり
山小屋の雑魚寝女を捨てている
善人の旅追う雲が晴れてくる

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

雷が鳴ると可愛くなる女
ところ天しばらく馬鹿になっている
クラーの虜になつて土用越す
島で住み波の話聞き分ける
ふところの深い話を酒に聞く
ヒロシマの悲話に子供が動かない
十戒の姿勢になつた逃亡者
嫁姑馬鹿さかげんが似て平和
土用物サーフィンちやうもんだろか
落日物届け馬鹿にいわれても
話題持つ友が素うどん旨くする
雷が止んでどこかで猫の鈴
レッテルを取つて姿勢をくすずす家
考える葦の姿勢になつている
姿勢からほとばしること誠実味
馬鹿にされながら子供のものを買う
ヒロシマを映した川も土用の風
正しいと信じる父の姿勢よし
きみは立派 自主独立のいい姿勢

喜市 英子 愛子 千代子 正直 アサ 綾子 精子 忠雄 与呂志
夕花 智子 美津留 甘平 欣之 悦郎 冬葉 頂留子 度 喜風 春子 朝子 英一 しんじ 律子 作二郎 白風 白洋

窮屈な姿勢に馴れた意地っぱり
むつかしい話ほしない紙コップ
環状線つきの話で二度まわる
瘦せたくて十九の馬鹿は昼を抜く
いいとこで馬鹿にされてるゴマーシャル
世渡りへ時は馬鹿になるもよし
稲光 修羅の巷を駆け抜ける
雷に負けるもんかとキリギリス
翔んでいる話の背で痛む影
土用餅もどに通らぬこの暑さ
雷に直撃される運不運

三幸川柳教室

桜井 千秀報

一張羅を着て目立たぬ蛙の子
年並みの渋いおしやれが人目引く
目立ちたがりバイク傾けかけ回る
目立たない言葉でチクリ刺すあなた
目立たぬが敵に回せば小うるさい
類を呼び目立ちたがりやが屯する
不規則で目立ち始めた皮下脂肪
目立たねば今日の戦に潰される
ぎくしゃくが目立つ釘のかけちがい
正義派といわれて仮面外せない
勝てばみな正義の旗がついて行く
正義感 火中の栗を拾わせる
正義論なぜか歯車噛み合わず
正義子に教え矛盾に突き当たると
ひと呼吸おくと正義も萎えてたり
正義だとひと合点の旗を振る
早魃に雨を降らせていく正義
せいたくと知れど晩酌欠かせない

柳宏子 重人 雅士 美幸 隆 寛然坊 弘直 シマ子 年人 勝美 春堂 芙美子 道子 利子 精子 鉄治 玉枝 美子 桂香 幸子 好美 親躋 みね 当代 三千子 千秀 靖子 茜子 高夫

今日だけはぜいたく許す披露宴
身のほどを知ってぜいたく近づけぬ
ぜいたくがこびりついて腹まわり
平凡というぜいたくに倦んでいる
綱渡り人間業をこえている
人間は縛る掟で守られる
ロボットに人間さまが頭さげ
飾らない言葉に滲む人間味
逆境に生きて人間丸くなり
人間の業浴びて立つ菩薩像
人間に馴れて野生に戻れない
人間の痛みをもうらう百度石

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

夏大根の辛さよ 文が深くなる
迷路から出られぬ日には文をかく
置手紙名文書いても始まらぬ
文体があやしくなつて巢にこもる
挿れにゆれ文化会館たちがる
文化財に住んで不自由しています
一大事が不精の息子文よこす
合格発表自分の文字が目の中に
今日のヒエロは紫色の文を書く
心開いて素直に書いた謝罪文
文明がいきつく自然恋しがる
追伸を書くのが好きな母の文
文化にはほど遠く住み草の餅
文脈のくらいとところにある生家
文箱の底でいつか湿ってきた火種
美文にはあきて情の字を拾う

孝子 昭枝 育子 保州 嘉寿子 広美 正雄 町子 幸子 可笑 仲幸子 結実 日枝子 千春 瑞枝 寿々子 松子 正子 玲子 八重子 恵子 恵子 ふみ 亜弥 登栄 荒介 千代 より子

川柳ささやま

遠山

可住報

魚心あとは言わずともねえオホホ
あと味の悪い別れが胃に溜る
言い勝った後は淋しい孤独感
どん底の雄叫び自画像塗り替える
水族館釘づけになる孫の守り
指図などいらぬ自由な一人部屋
鯛一枚釣って天狗になっている
行めば幽かな呼び水子塚
後あとの事あり無理を聞いておく
花東への叫びが浮いてくる
こつこつと貯めて手にした夢一つ
こつこつと暑さがまんの秋を待つ
忘れたい過去を捨ててはまた拾い
魚一匹二人でつづく深い秋
ひと粒のゴマの叫びが聞えるか

川柳塔鹿野みか月句会

土橋

螢報

趣味多忙フル回転の夫婦です
弱点があるから夫婦仲がよい
夏の海水着姿の夫さがす
末長くつづかぬ夫婦ともケーキ
忍と従 夫婦で古稀の坂を越え
暖流のおかげ夫婦が壊れない
死ぬるまであなたの杖になるつもり
代がわりして台所歩かない
どん底で代わる明日を信じきる
仏と鬼が代わるがわるに胸に棲む
割烹着母の代わりがいじらしい
甲子園の炎老骨にもつつり

静生 美代子 正恵 くに子 芙美 諷人 みさ子 汲香 艶子 八重子 かつ乃 保子

老いらくのいのち燃やそうつきるまで
 炎天に負けぬ草木のたくましき
 ひまわりも炎天続きうなだれる
 心の炎鎮める風を待っている
 八起き目の炎に鞭を打っている
 背中には戦火の炎まだ残る
 花びらから恋の炎が燃えている
 死に方は修羅の炎と燃え尽きる
 倦怠期ですが炎は燃えている
 ローソクの炎生命の灯に
 ゆずらない炎のような娘の主張
 炎天に案山子不平の口がない
 キャンドルの炎ふたりで守り抜く
 もう一度私に炎くさいな
 夏から秋へ秋を一枚でのひらに
 ピンチからのがれ仏に掌を合わせ
 張り替へもせず傘寿を過ぎました
 白壁の土蔵に酒がおいである

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

トンネルのポールを夫が受けました
 夢背負いトンネル抜けたかたつむり
 トンネルの中で探した結論さ
 トンネルを越せば古里灯が温い
 見直して結果待つ間のいわし雲
 見直しの出来ることなら楽だろに
 ちまき巻く孫の手つきが見直され
 木の家を見直しはじめた日本人
 一人居へ鍋がゴトゴト許しかけ
 こんな時 花の雫が浮気する
 自在鉤 鍋が煮えたつなつかしき

幸枝 幸美 正道 幸代 幸お 小鹿 百合子 三千代 きみ子 隆風 夕峰 智恵子 公弘 和子 美つ千 房志 喜与志 螢

若者の免許左折がでかかねる
 鍋ものに姑の味がこびりつき
 見直しておこうと軽く逃げられる

いさり火川柳会 尾崎三代治報

飛行機に命託して落ち着けず
 飛行機のシートについてから不安
 しゃぼん玉の期待が重過ぎる
 水泡に帰した努力の実を探す
 いらいらへベットも隅に逃けている
 いらいらとしながら書いた字はすねる
 金策のできない頬を汗つたう
 いらいらが胃痛の虫を飼っている

川柳塔とつとり 岩原 番水報

不都合な時だけ耳に蓋をする
 イヤリング背なの子供がもてあそぶ
 耳よりな噂におんな姦しい
 善人の耳で疑うこと知らず
 珍しいこと晩酌をついでくれ
 珍しく早い帰宅だ何かある
 珍しく父胃カメラに黙り込む
 お祝いの酒珍しくよく回る
 筆使いかされたことも真似をする
 変声期大人の直似がしたくなり
 いくら真似しても本物にはなれぬ
 人真似でない自分史に誇り持つ
 姑を真似 姑の氣にいる嫁になる
 富士山もいつか変貌するだろう
 世も変り鮫も指に飾られる
 謝れば変わる事など知っている

世似 清泉 白汀 八重子 三代治 伊都子 豊子 孝人 智恵子 由多香 武士 一步 輪多朗 喬水 帆雀 多可志 智人 山人 旋風 呼里 俊路 圭一郎 由多香 友夫 砂山花 艶子

変り種どんな男に育つやら
 位置変えてみてもやっぱりブスである

川柳塔唐津支部 久保 正敏報

虹駅で下車す領巾振り登山口
 人生のからくり人のそれぞれに
 日本語が下手な外人だからモテ
 家庭内離婚に泣くのは亭主だけ
 土用干し数える程の梅を干す
 母逝きて聞きたいことの山とあり
 一目見て落語家らしい身のこなし
 蛸壺の遺恨がのこる墨のあと
 郷愁を覚え野草を摘み帰り
 遅咲きの花もあるさと口をそえ
 夏休み子供クラブは会議中
 猫のよな恋は知らずに来た明治
 苦節十年漸く締めた重い綱
 親刈れば音たつばかり蘇鉄弁ふ
 新宿でお国言葉の同期会
 ミサイクルを減らす性能倍にして

京都塔の会 松川 杜的報

風味あるうちに嫁りたい親ごころ
 前略も抜きに想いのままを書く
 前略と書いて無心を言うてくる
 冷奴風味を添える青紫蘇で
 繁昌も江戸から続いている風味
 桜吹雪脱げばアリバイ崩れだす
 京料理紅葉一枚添えてある
 新茶の香老母の口もと愛らしく
 時は移る梨も二十一世紀

粗粒 一枝 朴竜 ちよ 治幸 喜久亭 紀一 ふさ子 義美 高明 遊女 剛司 四郎 虹汀 旭恒 弘 正敏 榮 英子 正坊 圭坊 芳子 杜的 美穂 求芽

不動像お滝みまもる霧が晴れ
 保津川の鮎も慣れるる櫓の飛汗
 距離聞いてドライブアイスを割る売り子
 車とめて昨日蟹気楼のみえた浜
 袴を脱げば凡夫の顔になる
 脱ぎ場所を月に尋ねる露天風呂
 スーパーの風味に亭主舌鼓
 しそ風味暑さ負けなどせぬように
 略式で通して温い風に会う
 中略のところに書いてある本音

城北川柳会

神夏磯典子報

いやになるほどに巨人が勝ち進み
 影法師孤独の道をついてくる
 ぎりぎりまで清書が出来ぬ川柳句
 小さい目が父の背中をよく見てる
 星占いの母の思いと遠い距離
 潮からい乳で育って海女になる
 毎日が感謝で暮れる老いの幸
 紀子さんの笑顔あやかり健やかに
 ほら貝の視野にさとり海がある
 影武者を置いて気儘に暮したい
 ワイキキの浜を陥没さす若さ
 年金の範囲で小さいお洒落する
 影法師踏めば幼い絵にもどる
 煩惱の深さ知ってる塔の影
 ひと筆母の涙は祈りです
 家計簿に妥協している冷奴
 一人部屋誰にも見せぬ影をもち
 買ったたく方は小さい疵と見す
 空港の星の一つになる別れ

達子
花代子
英千子
水客
倫子
ただし
福子
年代
武庫坊
飛鳥

午郎
輝子
登美子
秀夫
満津子
静子
久留美
寿美礼
静歩
新一郎
ただし
ふみ
純子
典子
昭子
白峰
公一
史風
春蘭

海ゆかば歌いし君は今いずこ
 小さい芽を一つ見付けた庭の朝
 酸性雨も霧もそもも騎りから
 沖繩の悲劇知ってる星の砂
 風みどり肺まで染めて来た散歩
 緊張感とけて空気のうまさ知り
 居眠りの顔に我欲の影はない
 今日汗誇りに思っポランティヤ
 海鳴りの中に嗚咽の声混じる

尼崎尾浜川柳会

春城武庫坊報

叱つても妻は平気な顔でいる
 誘われるままに平気の厚化粧
 人間が地球を汚し今に罰
 夢に見た月の世界の散歩道
 世界地図くすぶる火種抱えている
 世界中のボスが集まり協議する
 十秒を世界の足が競い合う
 ゴルビーがもみくちやにする世界地図
 世界史のたしかな位置に原爆忌
 妻丈夫感謝どころかこきつかう
 時どきは一服してる蟬しぐれ
 ひっそりと暮し噂は聞かぬ耳
 暑すぎて話の種が尽きてくる
 花博の花お国語で話しかけ
 口角をとばす相手か二時に来る
 香水を夫に聴いて娘の挙式
 外車から降りると香水風に乗る

八重子
温子
達子
倫子
テルミ
さくゑ
佐津乃
文子
右近
向西
十四郎
いわお
義嗣
敏之
保蔵
六浦
修水
定人
石舟
すみ
昌子
美智子
夢之助
弘子
澄子
紫香
保蔵

千羽鶴 減って遠のく原爆忌
 減量が過ぎてフアイトもぎとられ
 黒と灰ばかりが減ってゆく絵具
 すり減った羅漢の像にまるい影
 ダイエットの決意揺るがすスターの死
 夏休暇返上 減点パパにされ
 いま一度老いの火花を揚げに行こ
 いっぺんは怒鳴つてみたい貝柱
 いま一度逢いたたい人が胸に棲む
 アルバムにたつた一度の日本髪
 一度だけなら許すつもりの花泥棒
 寄り道のすつとむこうに塔ひとつ
 寄り道で妻に言えない女に会う
 湧き水のうまさに飢えている都会
 過ぎた日の楽しい事を書き置こう
 向日葵に連れれの女が先に出る
 うそつきの女と歩く霧の中
 ようこける男を起こす束髪
 黒いのを致命傷のように女言う
 蟬しぐれ羅漢さまにもない夏
 灰皿に今日のいくさの跡がある
 しみじみと酒を注ぎたいとき女
 行商のひとりか蟬の道に来る
 娘が二人父を男と見ておらず

西宮北口川柳会

林はつ絵報

試す気になって欲しがるオブラート
 煩惱を試す仏の目が細い
 限界を試しにいった夏帽子
 雨の日の窓辺金魚も動かない
 磯の香の匂う丸干しやいている

正一
武庫坊
佳秋
萬的
園歩
石舟
梨枝
敬
諷云児
芳子
年代
静夢
紫香
文夫
正子
水声
伊三郎
杜的
英子
栄
歌子
作二郎
定人

果し状雑魚にも雑魚の意地があり
魚屋の声で魚がピンと跳ね

正坊

さりげなく咲きざり妻の目が刺さる

春蘭

さりげなく別れ炎の電話する

夜船

最後に笑う切り札持っている

園歩

さりげなく話題を変えてくれる友

英子

ひまわりも夏もゴッホの絵を沸かす

楓子

沸騰点の中で明日を考える

元紀

ふつつと沸くもの抱いて秋に入る

きよ子

コーヒーが人待ち顔で沸いている

みつ子

湯が沸けば哀し水も成仏してくれる

いわゑ

薪で沸かすともぬくもりのある母の膝

晚風

いつ帰ってもぬくもりのある母の膝

武庫坊

整理せず捨てても出来ない写真集

正一

蚊にさされ公園で聴くコンサート

保蔵

遠花火負けじと祭太鼓うつ

石舟

油断して植木を枯らす夏の照り

柳影

策を練る終着駅の缶ビール

圭坊

親子のように三人そぞろ歩きする

佳秋

駅エレベーターパート気分ですう人

江美

八百長の片棒かつぎ病んでいる

昭水

八百長にしてはたいした演技力

文次

八百長をもうけては髭をつけている

維久子

八つ当り犬が悲鳴をあげている

岳人

八つ当りどころではない濡れ落葉

トシエ

八つ当り自分ひとりになっていた

花梢

家つきの息子をさがす娘の野心

花子

手洗いで大事な約束思い出し

智久

近鉄が負けて家中へ八つ当り

一二三

やわらかい壁にはつつかり八つ当り

森子

川柳塔わかやま吟社

緑良報

風船の旅を邪魔したのは小枝

克子

吹きたまりだろつか風が温かい

保州

お迎えに線香花火も焚いてあげ

英子

表面に出さぬファイトが怖くなる

三男

紙風船やはりあなたの手に落ちる

桂香

風船もひとつ越えたい山がある

輝子

羽がたくて風船夢を教くらます

和子

紙風船子供の頃の謎が解け

太茂津

一冊の本が吹つ切る胸の傷

光代

闇の空平和を染める遠花火

三千代

軒下の線香花火にある情緒

信子

もみじの手線香花火放さない

豊太

待つことに慣らされてゆく遠花火

稚代

平和使節花火が海を越えて咲く

萬代

ファイト爆発 男に光る海がある

栄美子

大声で笑うとファイト湧いてくる

登志代

細腕もファイトを燃やす力溜

守

下積みのファイトいつかは実を結ぶ

精久子

秘められたファイト背筋がしゃんと伸び

紀久子

風船の軽さ重宝されている

緑良

川柳塔まつえ

恒松

肩書がそろりと溶ける露天風呂

町紅報

そして朝犬が横切る温泉街

長三

温泉が目当てにプラン出来ている

章峰

湯けむりに傷心いやす一人旅

軒太楼

湯煙の中で本音を語り合い

房子

妻

小妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

妻

夜景より愛たしめめる若い恋
対岸の夜景に心燃えたてせ
すばらしい夜景無言で歩いてる

ピラミッド夜景はきつとブランクだ
夜景の灯新婚の窓しめたまま
ぼろぼろの過去からバラの花咲かす

ぼろぼろの軍服父の念がある
案山子でもうぼろぼろは纏わない
ぼろぼろになって古文書世に問われ

くたびれたピエロが好きなかき氷
薄氷を踏む人生でしたパンの耳
わだかまふ二人に金時溶けはじめ

氷もう切れたボトルで別れよう

なかなかに大河になれぬ小さい川
潮満ちて川は逆流しはじめる
川の字に寝ていた娘もう二十

潤いが欲しいと嘆くネオン川
常識の河は静かに冥土まで
泥川も聖と思えば有難く

夏の空真つ赤な火花母恋し
かき氷幼い夢の色をかけ
高波と遊んで泳げない私

高齡の泳ぐ姿に励まされ
情熱もいつのまにやら夏木立
水漕に泳ぐ金魚に四季あるの

踊りたい相手はみんなねらってる

青春の丘を越えると広い空

南海川柳会

飯田 悦郎報

眉水

サークル檸檬

大澤三四子報

清志

蘭水

きみ子

友子

桂子

文子

寿美子

多賀子

静恵

鶴丸

良子

叮紅

雅子

泰子

千代女

大空を画布にでっかい夢を染め
空の果て尽きぬ想いの鎮魂歌
夕焼けへ今日の戦の矛仕舞う

日本の投資で揺れる世界地図
開発へ投資 豪雨に叱られる
馬券買い馬に人參投資する

欲出した投資の株で鬼に逢う
投資した原野に立つて涙ぶく
耳打ちへ刑事としての眼がはしる

耳打ちが通じて肩をすくませる
耳打ちが少し気になる第三者
ドイツ語の耳打ちどうも痛らしい

消費税廃止叫んでいる弱者
計画へ弱者ひとりごだまり込む
弱者には何時もやさしい仁王の目

弱者には耐える掟が多過ぎる
いつの世も時代にあわずニューモード
蛹から蝶へと少女にある時代

時代の流れへ上手に乗って行く若き
科学の目古い時代を呼び戻す
年代がぐちをこぼしている現政治

川柳泉尾

吉川 寿美報

なつかしい人に会えるか盆の夢
夏祭りこしをかつく若い声
暴走で眠れぬ夏の長い夜

蟬空に聞いて下さい出身地
打水に夏を飾って待つ女
向日葵が夏が逝つたとうやなだれる

入道雲にムクムク關志わいて夏
ほろ苦い想いがかえる夏帽子

真砂

憲太郎

柳宏子

甘平

東雲

志華子

美津留

花仔

二南

しんじ

柳文

真柳

重人

勝美

信博

汗かいて夏とがっぷり四つに組む
ボソボソとかけ口大きな輪を広げ
ボソボソと寝起き顔が揃う朝

東大でぼそぼそ講義して教授
ぼそぼそと愛の告白でしんか
ぼそぼその言葉に正論吐いている

ぼそぼそと蛇口に住んでいる主張
こんな世にぼそぼそしてて乗り遅れ
ぼそぼそと来て特賞攫うて去に

ぼそぼそと言わずいっきに吐けばよい
ぼおずきのたわわに実る里の道
ぼおずきの恥じらい知っている男

海ほおずき海の悲劇に瘦せている
ほおずきが幼い恋の通り雨
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張
ほおずきが真つ赤に熟れて自己主張

一枝

義一

悦子

美津子

美子

まつ子

美子

はつ子

葉子

シメ子

シメ子

洋子

弘子

途子

可愛

期待して一粒の種まいている
私対俺の勝負に期待する
期待して育てた玉が掌から落ち
期待した蕾に白い花が咲く
一粒の孫が神童かと思つ
乞うご期待次は美人を生むつもり
うちの子に限ってそんな悪じやない
ホームラン九回裏に見せてくれ

豊中もくせい川柳会 田中

正坊報

ひさ子
みをき
幸子
小鹿
節子
とみお
螢
弘朗

花博の花がこらえている残暑
残暑呉け妻の言付け忘れて来
まだ暑うおまんなどという残暑
残暑とは辛抱せよという暑さ
相和して仲良く回る夫婦独楽
静かですコスモス揺れる和紙の里
平和とはほんとにこわれ易いもの
建て替への報せに脅えている団地
建てた碑の寄付がぐるりを取囲み
高層ビル建て大文字見るつもり
紅がらを壊して四角い家を建て
阿波踊り帰りは眠るバスツアー
見る阿呆も槽のリズムに踊りだす
わかものがこんなにおった盆踊り
葉ばかりの蓮咲かぬ間に盆がすぎ
和解しようお月様がまるくなる
セピア色の写真に遠いとおい恋
父母逝きて親族の血が薄くなる
水枕どない地球にさせまひよう
踊らされてる顔で結構損をせず
個性派と言われ歪な壺つくる

武庫坊
萬的
紫香
唐委木
圭坊
きく子
吉太郎
富子
明光
寿美子
杜的
登志実
明吉
正坊
登代子
メ女
英子
悟郎
凡九郎
花村
落児

慰める言葉が肩を抱きたがる
台風のを待つてる水不足
校門を閉じて教育する日本
炎天に鈍行なげく車椅子

川柳はびきの

塩満

かき氷西瓜そうめん冷や奴
花博へ二の足を踏む人の波
原爆忌 核実験の記事二行
栓抜けば暑さふつ飛ぶ夏の宵
首の無い仏が座る遺跡かな
郷土史を飾り瓦が光り出す
つますいた石に迷いを醒まされる
往診のクルマお向いの猫危篤
二上山消して向いに家が建ち
妻の背がちよっぴり歳の型になり
バラの花好きな女を信じ切り
花博の花も泣かせる熱帯夜
あの世でも暑いだらうかこの猛暑
びったりと六時に終わる大相撲
青い恋これから赤いバラ咲かす
一秒へ駆けこむ遅刻鉄門扉
ごろごろと回転焼き少熱帯夜
愛のない教育法で少女逝く
目ざわりな男もまじりポーズとる
先生と子供が張り切る夏休み
シャワー散る水も七色若い肌
骨休みする筈だった旅疲れ
紫陽花も拍子抜けして梅雨が明け
あじさいの海でこのまま眠りたい
招き猫悲しい酒も知っている

白漢子
田英子
博史
つえ子
敏報
悦子
昇
ダン吉
たけし
美代子
隆
絢子
重人
吐来
与呂志
ケイ子
末一
利武
志洋
繁男
忠宏
志津江
キミ子
敦子
みつこ
伴子
二南
蛙声
比沙胡
希代司

東大阪市文化祭参加

第18回市民川柳大会

とき 10月7日(日) 正午開場

出句締切 午後1時半

ところ 東大阪市立社会教育センター

(近鉄布施駅北へ5分)

宿題 (各題2句・出席者に限る)

「友達」 中村 孤舟選

「有頂天」 久保田半蔵門選

「鈴」 玉利 三重子選

「夕焼け」 珍斉 源次郎選

「職人」 榎本 信次選

「夫婦」 中尾 飛鳥選

席題 1題当日発表 江口 度選

賞 各題秀吟賞・賞状・楯・発表誌呈

会費 1000円

主催 東大阪市文化連盟

東大阪市川柳同好会

後援 東大 阪市

東大阪市教育委員会

土に耐え暑さに耐えた蟬の声
 マスコット腰につるして富士登山
 招待券もらって行った負け試合
 八月九日あの日も蟬が鳴いていた

葉子 ぎいち
 隆 敏

川柳藤井寺

高田美代子報

十薬を干して女に家がある
 幸運な風に乗って出る出世風
 潮なれば瀬にして涉らん恋の川
 一言の重さを知つた義理の中
 仮面付けるとほらね喋り出す弱い虫
 片足で立つむつかしさわかる年
 ライバルへいつもバランス崩してる
 バランスをとるため夫婦喧嘩する
 蚊を叩く音聞こえてる通夜の席
 足の蚊もそつと払って聞く法話
 蚊やり火を焚いてひとり夜の夜が長い
 血太りの蚊に執念の平手打ち
 パンパンと手の鳴る方へ蚊が笑う
 飽食の蚊は低空で墜される
 手鏡の中で背中の蚊をたたく
 蚊柱を崩すあした天気になあれ
 汗をかき若さ自慢の夏が好き
 勝つために滝の汗出すブレーヤー
 ネクタイの汗七人の敵を知り
 汗と熱意社訓にしてる立志伝
 中流を支えてくれる父の汗
 思いきり汗出したかろ犬の舌
 汗流し働くアナタに惚れました
 冷汗をかいたは内緒にしておこ
 やり直す汗は流れるままでよい

政代 志洋
 ときお 淑子
 美代子 たかし
 繁男 森子
 きよし 治子
 信子 寿美子
 信子 婦美枝
 おさむ 敦子
 和子 悦子
 キミ子 ケイ子
 三郎 てつお
 伴子 紀子
 吸江 修六

汗も出さず意見も出さず漫画好き
 汗かいて親の苦勞がわかる歳
 抑留の熱砂に果てし教えず憶う
 自分史にシベリヤの汗忘れぬ
 悪い奴案外もてるネオン街

川柳高知

川竹 松風報

一人居の厨若さがよみがえる
 頭数やつと揃えた草野球
 仏間の灯好きばかり魅る
 受け皿があると信じて種を播く
 目で追って声にならない片思い
 幻影を求めて孤児の四十年
 影踏みをする子もなくて塾通い
 忘れたい忘れたくない敗戦史
 一日の疲れは靴を脱いでから
 道楽の二字には遠い父の靴
 詩心あればと思う一人旅
 遠回りの幸せがまだ来ない
 見てくれる子供は居ない酒の量

宗一 比呂志
 和美 和美
 紅月 竹萌
 和広 菊野
 健二 一功
 春童 佳風
 千恵子 有佳
 清坊 朱坊
 松風

夜市川柳募集

題

選者

縮切

第5回「叫ぶ」 田頭 良子 10月末
 第6回「拾う」 高杉 鬼遊 11月末
 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-2
 河内天笑方

堺川柳会

両川洋々川柳句集

発刊記念祝賀句会

とき 10月28日(日) 午前10時開場

同 11時縮切

ところ 鳥取共済5F

(鳥取駅南へ徒歩3分)

兼題と選者(各題2句) 投句拝辞

「船出」 河内 天笑選

「山」 土田 欣之選

「枕木」 両川 洋々選

会費 5000円

(句集・記念品・発表誌・祝宴費)

◎川柳句集『枕木の詩』別途ご

希望の方は2000円で頒布

します。

事務局 〒680

鳥取市行徳い802

大坪 天涯方

☎(0857)26-4959

柳界展望

集録一敏・武庫坊

★第14回若人忌川柳大会は8月26日、鳥取工業福祉会館で開かれたが、当日の天位句は次のとおり。

鍵いっばい持つてあなたも寂しいか 新家 完司
指先が炎えて眼を画く人形師 沢田 千春
わたくしが死んだらきつと泡になる 和井 観洋
雑学の叫びも壁はきき分ける 山本 玉恵
うたを書く紙が鏡になつてゆく 高田 芳子
決断の甘さへ靴がまだ履けぬ 西原 艶子
芋虫も蛙も食った二等兵 但見石花菜

★第42回西日本川柳大会は9月2日、岡山県久米南町中央公民館で開かれ、二四七人が参加して盛会であつ

たが、本社関係で次の5氏が各賞に輝いた。

★新家完司(久米南町町長賞) 小林妻子(同町教育長賞) 八木千代(山陽放送賞) 河内天笑(山陽新聞社賞) 田辺炎六(同町商工会賞)

★川柳塔わかやま創立20周年記念川柳大会が9月9日和歌山県農協会館で二三八人が参加して盛大に開かれた。天位句次のとおり。

大合唱はたち輝くものばかり 中井栄美子
いたわりの目に不甲斐なく馴れて来る 遠山可住
手鏡に選び疲れた男運 深日白光子
利き腕の中でときどき亡父に逢う 林 荒介
ふるさとに三尺帯が置いてある 山川 克子
広目天の筆にあしたを書かされる 森中恵美子
足跡は海に流そう貝になれ 神平 狂虎
子の希望聞けば新幹線の運転士 松川 杜的

★白百合川柳社主催の第25

回岡山県川柳大会は平成3年1月27日、岡山県邑久郡邑久町立中央公民館で開かれる。会費1500円で兼題と選者は次のとおり。

恋人▼橘高薫風▼絆▼小松原爽介▼膝▼田中好啓▼寺尾俊平▼追う▼浜野奇童▼偶然▼森中恵美子▼飯▼当日発表▼特別席題▼飯日1題発表(各題2句)、投句は500円を添え、1月25日までに岡山県邑久郡邑久町山手1116・嘉数幸栄宛。

▽同人消息△

■橘高薫風副主幹は8月15日、病氣療養中の竹原川柳会会長山内静水氏(参事)を見舞に訪れた。

■宮園射月芳氏(貝塚市・常任理事)は8月中旬から腰椎圧迫骨折のため入院

■林荒介氏(米子市)は時の川柳400号記念誌上川の川柳大会に第5位で入賞

■石田博泉氏(島根県)は木次町で書の個展を開催

■浜野奇童氏(参事・弓削

川柳社会長)は山陽新聞9月5日号の学芸欄に「調和」と題する随想を執筆

▽ご芳志△

■垂井千寿子さん(和歌山市) 向井しづ子さん(八尾市) からそれぞれ金一封を拝受しました。

▼訃報▲

■塩満敏氏(羽曳野市・常かね)。

任理事)の尊父栄氏は8月21日、郷里の鹿兒島で逝去された。

▽正誤表△

■9月号・P82下段2行目「志い性」↓「青い性」、P84上段3行目「失名」↓「新正子」、P87佳句地十選4句目「おかぬ」↓「お

新同人紹介

高野律子
— 紫香・薫風・代仕男・きみえ推薦 —

幸家 單車
— 紫香・由多香・洋々・公乃推薦 —

井上富子
— 三林坊・炎六・豊作推薦 —

波辺圭坊
— 紫香・萬的・杜的・求芽推薦 —

第37回八尾市文化祭

市民川柳大会

と き 10月21日(日)正午・締切13時

と ころ 八尾文化会館第1会議室

(近鉄八尾駅下車・西武デパート東隣)

会 費 1000円 (作品集・鉢植花呈)

兼 題 (各題2句)

「絵」	河内 月子選
「粒」	中本まさお選
「戦」	杉森 節子選
「明」	大路 美幸選
「師」	田頭 良子選
「雄」	高杉 鬼遊選
「八」	黒川 紫香選

懇親宴 3000円 (希望者のみ)

主 催

八尾市・八尾市教育委員会

八尾市文化祭実行委員会

第17回堺まつり協賛

堺市民川柳の会

と き 10月14日(日) 午後1時から
出句締切2時

と ころ 堺勤労会館

兼 題 「負ける」	河内 天笑選
「壁」	板尾 岳人選
「半分」	桜井 千秀選
「打つ」	大路 美幸選
「風」	長江 時子選
「軽い」	中田たつお選
「帰る」	藤田 泰子選
「影」	中尾 藻介選

席題なし。各題2句

会 費 1000円 (軽食・作品集とも)

連絡先 〒593 堺市堀上緑町3-9-2

堺川柳会 河内天笑

電話0722-78-4706番

富田林市民川柳大会

と き 10月28日(日)

と ころ 富田林市立中央公民館

(近鉄南大阪線富田林駅下車すぐ)

兼題と選者 (各題3句)

「手ふら」	宮園射月芳選
「赤トンボ」	塩満 敏選
「月」	大西 文次選
「柿」	吉岡 美房選
「元気」	西尾 栞選

特別課題 (当日発表) 阿部 柳太選

会 費 無料・各題秀句賞多数

懇親宴会費 3000円 (希望者のみ)

主 催 富田林市教育委員会

後 援 富 柳 会

岸和田市文化祭参加
第40回市民川柳大会

と き 10月21日(日) 正午開場
午後2時締切

と ころ 岸和田市市民会館地下会議室

おはなし 川柳塔社副理事長 西田柳宏子

席 題 当日1題発表 半井 甘平選

兼 題 「予備」 深日白光子選

「相談」 小出 智子選

「得意」 梶川雄次郎選

「頑張る」 阿萬 萬的選

「ベテラン」 野村太茂津選

「名人」 橘高 薫風選

兼・席題とも各2句

(出句は出席者に限る)

会 費 500円 (大会誌・参加賞呈)

主 催 岸和田川柳会

10月各地句会案内

	日/時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	5日(金)午後1時から 熟す・洗脳・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時から 犬・うっすら・叱る・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
川柳塔 まつえ	14日(日)午後1時半から 風・割箸・ペン	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	14日(日)午後1時から 平気・減る・閉口・変更	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
もくせい 川柳会	15日(月)午後1時から 劇・時代・溜める・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	18日(木) 正午から 車窓・庭・宴会・自由吟	高槻市市民会館306号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1-7-7-905 福盛京童 句会費 500円 投句料 62円切手3枚 各題2句
南海 川柳会	19日(金)午後6時から 代表・非難・基本・歴代	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
南大阪 川柳会	19日(金)午後6時から 風変わり・向く・有利・類	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
川柳 ねやがわ	21日(日) 正午から 弁解・焦点・煙・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
京都 塔の会	23日(火)午後1時から 作法・軸・踏む	京都府立南労働セツルメント 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的 句会費 350円 投句料 62円切手3枚
はびきの 市民 川柳会	28日(日)午後1時から ラーメン・ラケット・ ライター・ラッパ	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
<p>※川柳東大阪は7日(日)第24回東大阪市文化祭参加第18回市民川柳大会(91頁参照)</p> <p>※堺川柳会は14日(日)第17回堺まつり協賛堺市民川柳大会(94頁参照)</p> <p>※八尾市民川柳会は21日(日)第37回八尾文化祭市民川柳大会(94頁参照)</p> <p>※岸和田川柳会は21日(日)岸和田市文化祭参加第40回市民川柳大会(94頁参照)</p> <p>※富柳会は28日(日)富田林市民川柳大会(94頁参照)</p>		

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(62円切手5枚)、各題3句以内
原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何か月分でも結構です)
〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

編集後記

☆今年も11月17日、大阪文化祭川柳大会が開かれるがこの大会が始められるについては、こんなことがあった。戦後、大阪鉄道局の中で川柳が再興され、その大会が川柳雑誌の麻生路郎、番傘の岸本水府、ふあうすとの楢本紋太、それに名古屋のすげ笠社伊志田孝三郎が一堂に会して城崎温泉で開かれた。

☆当時、三宮駅長だった藤本昌伸が鬧市で調達した酒を一斗缶に詰めて運んだのも思い出の一つだが、鉄道の取り持つ縁で、そのころ犬猿の仲だった路郎、水府の同席が実現した。その後脇田梅子とその夫君で大阪市教育委員をしていた脇田勇の肝いりで、毎日新聞社の大講堂を会場とする川柳

大会が開かれるに至った。

☆芥川賞の受賞者が決定したが、芥川賞と言えば岡田徳次郎のことが思い出される。彼は「某人」と号し、昭和9年から12年にかけて本誌の前身である『川柳雑誌』に句出し、大阪鉄道局の支部の世話もしていた。☆彼は戦争中、鉄道をやめて豊後日田に疎開し、市役所に勤めながら小説を書き同人誌「作家」に掲載された「銀杏物語」が芥川賞候補になったが、遠藤周作の「白い人」に及ばず、選にもれた。最期は昭和53年12月、吹田の弘済院で淋しく世を去ったが、その伝記は河津武俊著「秋澄」(講談社刊)にくわしい。(萬)

▼国際的腕白餓鬼大将、イラクのフセイン大統領の横車に、世界がよってたかってふり回されているのが国

際政治の現状である。お陰で株は連日暴落して、新聞の株式欄を見るたびに細るおもいである。他所の新聞ならこんなこともないだろうと、ふと新聞を替えることを考えた。生れてこのかたA新聞一本で操を立ててきたが、余生わずかになつてのこの変化には、理由がある。

▼八月は日本全国を熱狂させる高校野球があり、A新聞の独壇場である。そんな霧囲気の中をスーツ姿の男が、M新聞を勧誘に来た。今時、新聞をとっていない家を探すのに困るだろう。それをよりによつてわが家へよくも来たものである。せめて甲子園が幕になってからならわかるが、準々決勝のさなかである。本社から来たというから、その心意気に惚れてしまった。人生意気に感ずとは、こんな

ことだろう。▼よく、部屋の模様替えをする人がいる。ほんらい怠惰な性分なので、こんな人と一緒にいると落ちつかない。今までA新聞だけであつたのも、惰性からかもしれない。また、読み慣れ、見馴れかもしれない。替つた当初は、すこし抵抗があると思うが、こう簡単に替えられるものだろうか。フセインの発想では困るが、川柳の発想をガラリと変えてみてはどうか。(き)

★平成2年度の路郎賞・川柳塔賞の受賞作品が決まった。該当句の評価については、編集子が言及すべきことではないが、さすがにベテランの選考委員が年間一万句にも上る掲載句の中から、3回の中間発表を経て推薦句を挙げ、主幹が最終決定した作品だけに、燦然として輝いている。受賞者に心から祝意を表したい。★しかし、受賞者がいつも感想で述べられるように、受賞はゴールであるとともに、スタートでもある。これまでの研鑽に対する表彰ではあるが、それによつて「我が事成れり」とするとせつかくの受賞がかえつてマイナスに作用する。受賞者に身近な方が多いだけに言わずがなの駄弁、お許し願いたい。

★もう一つは、10月7日に開かれる同人総会。同人組織である川柳塔社にとつては、年一回の大切な会議で特に今年に結社としての憲法にもあたる規約の改正とそれにもとづく役員を選出も行われる。理事ははじめ役員はもとより同人の方が一人でも多く出席し、川柳塔社発展のための提言や意見をどしどし出していただきたいと思う。(正)

作品募集

12月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 栞
水煙抄 (10句)	黒川 紫香
銀河系 (3句)	河内 天笑
茴香の花 (3句)	八木 千代
吟「助ける」	奥山 美智子
課題吟「特別」	筒井 朴童
「ラスト」	田中 亜弥
初歩教室「末席」 (3句)	辻 白溪子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

1月号課題吟「鏡」「未来」「開く」

同人費・誌代などのご送金は、川柳塔社会計室 (高杉鬼遊方) へお願いします。

〒581 八尾市中田2-302
振替口座 大阪 8-33368
誌代 半年分 3,800円 (送料共)
1年分 7,500円 (送料共)

定価 六百元 (送料51円)

平成二年 九月二十五日印刷
平成二年 十月一日発行

編集兼 西尾 栞
印刷所 藤原 童心社
発行所 川柳塔社

〒545 大阪市阿倍野区三明町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

電話 (0)六元一六九一四番
振替口座大阪8-33368番

二賞表彰 本社10月句会

日時 10月7日(日) 午後5時半
会場 大阪市立労働会館(205号室)
JR環状線または地下鉄中央線「森ノ宮」下車
すぐ(日生球場東側)

路郎賞・川柳塔賞表彰
おはなし
兼題 「仮り」 田中正坊
「余生」 林 はつ絵
「当分」 安藤 寿美子
「一緒」 宮口 笛生
「いのち」 岩本 雀踊子
「い」 西尾 栞

投句費 500円
投句料 310円(62円切手5枚)同封のこと

席題 1題 当日発表 各題2句以内厳守

本社11月句会 7日(水)

兼題 「嫌う」「根」「めくる」
「倒す」「その後」

NHK川柳作品募集

課題 「走る」 森中恵美子 選

ハガキに3句 10月10日締切

投句先 大阪市中央区馬場町3-43

NHK大阪放送局

「ラジオセンター」川柳係

発表 10月28日(日)ラジオ第1放送

午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題 「めがね」 森中恵美子 選

ハガキに3句 10月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

川柳カレンダー・予約受付中

【題字】

坂本 一胡 (国語審議会会長・元NHK会長)

【カレンダー掲載色紙揮毫】

佐藤正敏・渡邊蓮夫・西尾菜・尾藤三柳・野村圭佑・磯野いさむ・去来川巨城・山田良行・大野風柳・吉岡龍城・斎藤大雄・坂本一胡の各先生
(順不同)

* 右先生の「色紙」別刷り十二枚はり込み

◎ 全国川柳大会入選作発表

* 入選句と作家氏名 (一、八〇〇人) 掲載

* 大きさ・タテ長和室向き二七〇×五八〇mm

◎ 次回の全国川柳大会「投句用紙」同封

【価格】 * 実費一部九五〇円 (送料は使用郵便切手分を「カレンダー」到着後に送金していただきます)

【申込方法】 * ハガキでお早めにお願ひします

〒194-001 東京都町田市金井町四二四

日本伝統美保存会文化部

「川柳カレンダー」全国川柳大会事務局

おわび 平成二年の「川柳カレンダー」は、発行と同時に
完売となり、そのため、ご迷惑をおかけしました。
深くおわびいたします。

大阪文化祭 第42回 川柳大会

とき 11月17日 (土)

午前11時開場・午後1時締切
午後2時から披露および表彰

ところ 大阪府中小企業文化会館

(地下鉄谷町線「谷町9丁目」または

「四天王寺前」下車)

兼題 「本」 岩井 三窓選

「意 外」 久保田半蔵門選

「最近のニュースから」 三川 美左選

「 」 友田茶の子選

「 」 高橋 古啓選

「つなぐ」 辻 白溪子選

席題 当日2題発表

出句 兼・席題とも2句 (出席者に限る)

費用 1000円 (作品集代を含む)

主催 大阪府・大阪市
大阪府・市教育委員会

大阪府・市教育委員会